

64-265

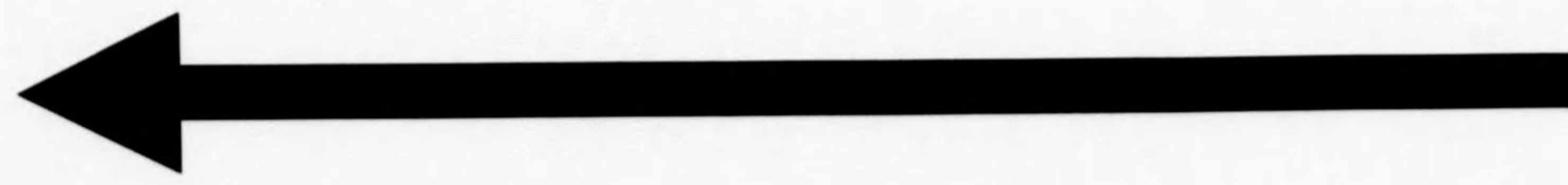


1200501278145

64
265



始



64-265

川路聖謨文書 第五

目次

一 寧府紀事 第四
自嘉永十二年正月三十日
至同年十二月三十日

目次

寧府紀事四

嘉永二年カ
弘化五年正月

○元日

晴

のほりますあまつ日のかみとよさかにみかけ匂ひて霞たなひく

いや高きみかとかしこみ大江戸のはるをいはふや四もつ國人

とよさかは豊盛の意也みかといふこと新右衛門なといかとおもふへ

けれと吾妻のみかとなと真淵もいひたり夫は万葉に百濟クダラのみかと其外日本ノ役所ノ

朝廷イミ也の人の行て政をする所を遠國をは遠のみかともよみたり夫により

て上をみかといひたりへ奉りたる也みは美稱カトはカネをかけてべりを

する門カドにて門モンをいひ則鏡戸カネドの約也大江戸といふへきよしは宣長の説あり

武藏野なといひては繁昌の地を野といふこと恐れありと夏かけ翁の説也

寧府紀事（嘉永二年正月）

翁は都は宮居にて 天子御座所ならてはいはすといはれたれともミはミ
カトのミヤは家のことコは居るの義なれはみかといふ例によれば都必
天子の御坐所といふこといかゝあるへき人麿かうたに宮と殿とを一ツに
よみあり

韶光何處滿庭霜。旅客開元還斷腸。四十九年迎邸舍。一千百里隔都城。

豈知爺叟新春恨。遙憶兒孫今日慶。屈指慈親既希古。堪媿書牘報寧康。

こゝまでは晦日にかきたるに元日となりて雪ふりたりしかしはつかにて
ひる頃よりは晴となりぬ

ふりつもる木ことのはなはしら雪ははる立歸しるしなるらむ

○二日 くもり又はれ けふは大紋着用にて東大寺の 御宮春日社東大
寺の八幡二月堂へまうて中院屋の参拜いたし兩御門主へ参る兩御門主に
ては直に御逢あり大乘院殿にては御盃事あり一乘院宮は御手昆布被下る
ゝはかり也大乘院殿にゐは帶劔のまゝ御盃事御肴被下候節脱劔にゐ御側

に参る一乘院宮にては御次にて脱劔也大乘院殿は家司狩衣をきる一乘院
宮は直衣也攝家門跡と宮との相違かくの如し興福寺のものなと輕きもの
にても一門様大乘院殿といふ也關東にては攝家門跡とあまり親王門跡を
違ひをいはぬなれ共南都にてはかくの如し○けふ興福寺の南大門より山
々をみて

浪なせる外山のうちも桂らきや高まのみねそ雪にしらるゝ

けふの廻勤のうち二月堂の観音あるは何事そやこれは中坊といふ人元來
興福寺の衆徒よりなりし例を追ふ故にかゝることあり可笑事也観音へ参
詣も廻勤のうちなるへしや實は 御宮と春日社はかりにてもよきこと也
二月堂の観音は内實は聖天也といふ也観音なれ共穢れのこと至る六ヶ敷
いふ也この観音のことに付奇々妙々のことをいひ傳ふること殊に多し可
笑ことなと尤多し

○三日 はれ けふは市中よりなら廻りの町人共之禮受る也東西坂の穢

多頭共迄罷出る也町人はみな白洲の上椽へ出る穢多は砂利へ出る○夜に入る謠初の式あり用人給人出席する也三獻加へありて小謠をうたふ畢而盃を遣し猿樂金春清之丞退去也この清之丞は御役所へ出入也目錄二百疋遣すけしからぬ大笑也○一乘院宮へけふ紀州の粕漬を内々奉りたりかゝる事は儒者佐々木育助にさする也この男學問はなれ共行跡におゐて眞の書生の風ありて氣遣ひなき男故にかゝることに遣ふ也宮のことに御喜ひにて京都より被下たるといふ根松貳本を被下たり江戸へ廻して植たきものなれ共仕かたなし○御門主けふは御機嫌にて左衛門尉方へ夕かたより行たくおもふなれ共奉行所は門に困る故に御同學の法師の寺に御遊ひにいらせらるゝ故に育助にも參れと御意ありしと也宮は御痲症にて御鬱しのこと多ければ醫師より申上内々は殿下を以奏し奉りて折々御忍ひの御歩行あり其時は育介方などは御學問の御師範の譯を以爲入らるゝこともあるか也貧儒故に店かり也大にこまるよし也左もあるへし奉行所は門を

牢内もの往來する故に其門を御くゝり候亦は御穢になるといふこと也誰か申上げむよき定め也ふるきものには兩御門跡奉行所へ御落合にて御酒など被召上たることみゆる也され共牢内ものゝくゝる門をは穢にて御通行のならぬといひたるは奇妙也若御立寄などあると大こと也常々の御手うすなる御様子見上ケ奉ると落涙する故にいらせらるゝことなどあれば必屢御入となる也門は奇妙也

○四日 くもり けふはならの寺院社人共禮にいつる也

○五日 くもり又雨 けふは遠方へ寺社へ禮受るけふ海人藻芥にたゝみの縁のことをいひて四位五位雲客用紫縁といふにいたりていたく恐れたる月卿雲客杯いふ人々はいか様なる天孫の血筋にあるらむかとおもひ居たるに五位も雲客のうちなれはわれも其列を辱なくすること也難有こと也夫にいろゝおもふはいかに物しらぬより欲もふかく身分をも忘るゝ也

○六日 晴 俊藏方之少女來るますく、伶俐也其取廻し全に母そめの如しこのはるより字をかくといふ也いろといふ字をのり入へ小まかに百字はかり書たり追々に字もかけるなるへし宅にて坐蒲團の上にて遊ひ居る市三郎をみればふとんより下りて手をつきなから口をきくなと教へすしてかくの如しいつ方よりか書狀來りたるに夫婦共に長屋又は奥に出居下女は密にこたつにあたり居ねりし居たるに少女取次に出て書狀を受取留守なれば歸り次第にみせ可申とて使を歸したりそめ歸りて其ことを申す故にこの頃五才になりたるものゝかゝる取計しては間違ある故に大に叱りて俊藏歸らば以之外之叱り可受とていたくこらしめたるに大に恐れ居るうち先にても懸念せしや先刻の書狀は御小兒さまの御受取ありしかいかにといひ越したる故にそめか夫々に返事したるを聞濟してヲツカサン夫レあの通也何も御心配には及ふましといひていさゝか心得かたき様にいひて又大に染に叱られたるとのはなし也

○七日 晴 儒者を以御門主より御内意にははるに成自分は所々あるきかすか野などへも行或は興福寺の法師のうち御同學の方へは御遊ひにもしはく御出なさるゝ也され共奉行はいつ方にも不行氣つまりなるへし今夕は推參せよとの御意也推參ものなといふなれ共こゝにて云推參は關東にていふ推かけよはれの事也夫故に日くるゝころより參殿せしに表の御小坐敷のとき震殿といふ所へいつも行てそこにて御酒被下なれ共推參の故なるへし直に御居間へ御通しありたり御上段に御膳被召上ていらせられたりけふは不慮の事故にゆるせこのきたなき所にて逢也と御意にて御膳被召上なからいろくゝの御はなし也大日本史を御覽なさるゝに誤字多くてこまる水戸へたのみたらはよき書物のあるへしやいかゝとの御意故にされは其事にて御座候光圀卿御撰の世にある日本史といふものは先ツ藁のときものにて未定の書のこときものに御座候夫故に史の躰もなく史記の八書のこときものも無之論讚なども其人々の傳の末へは書

載あらずよつて齊昭卿御撰になさるゝ積にていろ／＼御しらへあり少々
ツ、御板にも被成かゝりたるに其事ならず隱居被 仰付其事にあつかり
しもの共之内も閉居等いたし居よしホノカ仄に風聞に承候へはいと／＼可惜の
かきりにて候光國卿其事を九分通に被遊其ころは皇朝の學ひらけすよつ
て日本書紀古事記などにあけたる辭の解かねければ難波の法師契沖に万
葉の解被仰付たるなるへしこれ世にある代匠記也乍恐日本史を御覽なさ
れても万葉の頃の辭のある所にいたりよく不被遊しては御迷ひも出可申
歟元來は御佛學の御閑暇に日のもとのこと御覽被遊るゝには御代々 朝廷
にて御用ひの御事故日本書紀より御覽被遊候は、可然哉され共これも誤
字等多く一わたりよみ候義は私共にも出來候得共よくは分り不申候間書
紀より古きものにも申サは書紀の下書のこときものに候得共古事記に宣
長の傳をしたるもの御座候夫を御一覽之上にて其上に書紀等御覽候は、
可然旨等申上たり脇坂中書のことはいかにと御尋ありければ才氣の速な

ること千里の馬に鞭かことく勇烈なることも人にまさりたる人にも人々
其不及はしる所に候得共其外に人のしらぬことにけにも別段なることの
有之候ひきと申上たるに夫はいか様なる所と御尋ありければ右之才氣を
以支配家來向を遣ふことなく夫故に人の傷ミ無之候御法中と違ひ武家と
申候ものは嚴なるものに候得共中書などは明なる人故に人は己か才ほと
には出來ぬといふことをよくしられたれば大勢のうちには氣にいらぬも
のも遅鈍なるものも候得共夫に少も叱りは無之其人をよくしられて不念
不行届の事は多くゆるされたることの多候ひし家來又は支配向などを嚴
敷咎等申付ると申は譬は馬乗のかくをつよくいたし口にあたりたる様の
ものにも畢竟馬を乗ること下手より起り候上手は強く荒くいたし不申候
も馬よくあるき申候中書などは才力多く候故よく己か才氣を以人を遣ひ
不申あればあの位のもの也とてころひ不申候様に足らぬ所をよく補ひて
家來支配向を使はれたるには實に驚いることにて候論語にも上なる人寛

ならざるは喪に居てかなしみます禮をして敬せざるものに比して聖人の仰られたるなど中書のことにてくれくれおもひ當り候と申上たりこれは御門主あまりに御明英にて御家來氷をふむか如くおもふといふ風聞あれば也○御門主御さかつきを被下是は江戸のはへ遣せとて被召上たるまゝにて直に被下たり御きせる御烟草入など被下たり其御きせるなどは被召上入らせらるゝを其まゝ被下たりはしめて御居間を拜見したるに御たゝみなど十年前位に換させられたる位の體也しかし白木の三方に御かよひをもするイキたる神さまのこときもの也去年 禁中の御内宴に被召て天盃を被賜たるとて拜見被 仰付たりこれは我等には吞せられず拜見せよとの御意也かゝる品中々 禁中にては見しこともなし關東を献上なるへしとの御意也鼈甲にまき繪の御盃なりきこれを以て輕きもの銀の酒器などゆめゆめあるへからざる事也御門主は紫縮緬にいろくくの文あるヒフに緋のうらなるを被召白綸繻の御召紫の立涌の御はかま也めつらしく

御紋のこときものを金に縫たるをめしたりいかなる御衣にあらせらるゝ哉と奉伺しに紀州の御簾中よりの被進也と御意なりき御かみは例之通百日かつらのことくに御いろ至る白き美僧にて被爲在るればかしこくも役者などのすかたの如し御門主御うたを被遊たればわれもつまらぬ歌などよみき御門主何そかけと御意ありければ唐昏へいろくく書ちらしたり御門主之御書は拜戴して歸りぬわれか弟之新右衛門と申ものこのほとはさかりにつとむると承りたり江戸の秋山貢と云其家來など世話になるなど御意ありき○院家の内ひるより参りたるものあり此坐にてもくるしからすは樂の相手させむとの御意也可奉辭わけもなければ思召にまかせらるゝ様に申上たり院家はかりへは足打の膳也奉行にても御門主の御酒被下の時はへきなるに院家は格別のものとみえたり御樂なさるゝときにわれらころもをとれと御意ありきみなく衣をとり白衣になりたれ共さし貫をはき居る故に紫袴にて却る風流也この院家共攝家方之庶子共とい

ふ也

○八日 くもり 白洲に出る是は去年の落着物のこり也○宇治拾遺物語に貫之か東人に似せてよめるうたに

あな照や虫のしや尻に火のつきて小人魂コヒトタマともみえわたるかな

拾遺物の名に

東にてやしなはれたる人の子は舌たしてこそ物はいひけれ

いにしへはかくなむ東人はうたのみちなとにていやしめられしことにそ有けるしかるに二荒山にみやはしらふとしりまし、御神の東よりして日のもとを遠くまつらのうらよりこまくたらまでも照し給ふ御ことゝなりしよりのちは東にもからふみ學の人はさら也皇國のことも古學といふもの行はれて皇國のいにしへのこともしりかゝる中古のころより誤りたる傳へともをも改めていまはおさく二條冷泉の流をくむ人くをもおしなむはかりの歌よみ共も多いて來にけりわれらかこときことの葉のみ

ちの露のてにをば知らぬものなとまでも雲の上いともいや高き大王より御戯なからも御尋ましますことのありて御受など申すといふもみなふたらの御神の御光をさゝの葉のいさゝめの露にうつしたるおほんめくみにそありけるあなたうと

○九日 くもり 御兩親様へ年賀之御酒奉る○昨日高橋太助殿を御狀賜る御書牒よほと顛へみゆる也其内に十一月八日夜五ツ時北海より光りも南へ飛月夜のことし間近くいつくへ落るかとみしに薩州に落しよし豊年の瑞との風聞とのことしるしあり豊後日田にてのはなしをしるしましなればよもいつはりにはあらしされ共金玉人玉の類はきゝしか米玉とはいとめつらしこれを世に今あるコトタマ家とていたくひたふるに強こといふものにまねていはゝこれ光る上は火の玉也火はいにしへ多くホといふ也ホひかる玉なれば穂ひかるたまにて豊年の瑞なるへしかゝる類にてことたまといふことはいづれにも勝手にいはるゝ也

○十日 雨 昨夜四時過に去年十二月廿八日附之書狀とく母上様御機嫌よくとの御事其外一同之無事目出度候○乗馬の事御うらやまし○都筑之婦人着はいたし候得共六ヶ敷と之事歎息也弓改而目錄に被爲成候と之御事目出度候○新右衛門勤向宜と之事何よりの事也只々慎と禮の外勢ひあり盛なるうちの禍を可防もの無之候

○十一日 晴 四十六度 けふは東大寺之法師役人共并柳澤の者來りて年賀の義あり例之通今曉江戸にて三ヶ日之御式無滞相濟候旨之御老中々之御奉書來るけふは與力より同心其外末々之門番山番等にいたるまで具足ひらきの式ありて與力には目の下一尺の鯛焼物用人引也奉行より盃遣しかちくり昆布之肴遣之吸物三ツ肴五種也其外段々下る也され共十四五兩以上の入用也アサハ家來は中間迄も惣ふるまひの躰也

○十二日 晴 きのふみればわか具足のもちをは出入之町人共みなくほしかる也下女か咄に聞くに與助より一きれもらひて夫を打より切くた

き昏につゝみ歸りしといふ也まよけになるといふこと也其躰を下女かはなすを詳に聞ておさと其外一同目を見合てけしからぬ事さても 公義の御武徳の末を奉仰こととていと難有おもひたる也○昨十一日明樂大隅守京都町奉行被仰付たりとの爲知來る其ことを聞て御兩親より下女まで一際いさみよろこひてわれ京へ行ならば夫丈歸府の遅くなるへきを左もなくてうれしとの事也右に引かへて家來はふくれつらなるも亦大笑也

○十三日 雨 四位五位の雲客といへはわれらか子をも公達といひてかならむかいかといひたれはおさとか市三郎をはいかなる公達とやいはむなといひて笑ひたるに市三郎大に歎て云けるはその公達のことこそいみしき心くるしきことを侍るなるキンよりも上つかたなる所にて何のはしらかふとしく立てをりくは困りさむらふを又しも其上にキン迄もたちなは此上はいかにせむあないと御心なの御こととてなけくもおかし雲助に近き浪人ものゝ雲客の位の末につらなればキンたち共のかくきゝあ

やまるも宜なりかし

○十四日 晴さむし きのふ家來の小供等幼年之もの共は雜煮を爲給みるにみな笑へきことのみなるに榮のみはもちをキセに移し小まかにはさみ切て口をつほめて食ひ式居よりうちへ決していらす其外は立なから口をきく位也

○十五日 晴さむし 月並之禮受ること例の如し○昨夜なかしもとにて魚の骨をかむ也江戸のこゝろにて女共見たりしに大成狐にて眼のひかりおそろしとてみなくこはかりたり人をみても逃もせずじつと顔をみ守りておるとてのはなし也

○十六日 晴 革工家來方々禮に來る其わけは大坪道禪のくら并並くら共大坂の馬具屋へ賣に出候處二三軒にゐつれ共ほしかり御料を尋候間價銀壹目ならてはと申候處道禪のかたを十兩に即金に買度旨其外之品もみなほしかり候處大坂役人村々穢多有之是は伴頭之如きもの十人もあり大造成もの、由其もの之

申分に十五兩を一錢も欠賣候は後に差支出來可申いつれにも十兩に買候上は二十兩之見込無之候は不相成候間必十五兩に賣可申夫迄之内は役人村々穢多頭方に預り候由に彼方に預に相成候由大坂之馬具屋共初一覽候由にゐつれも賞歎いたし候由右は畢竟御奉行所にゐいろい御工夫有之候故かゝる事も出來候由に禮に罷出候由申也○昨年牛革之稽古同具を拵候は槍劔共に用ひみるに至るよろし三枚合之革也製は桶かは胴のことし槍にて強く被突も一向に覺なしされ共革故にくるい所々に出凸多出來たり其凸なれば實用最上之ものにも其上鏡と違ひ革は巾狭きものは至力少しよつて革の製作方工夫候は銀カハと唱候ものをチカラ如此に鍛合せ候はかさね八枚ハチに厚二分五厘位に仕立候はコシらへ候積家來々尋爲及候處至極なるへき由にて歸り申候銀カハとは牛の皮の精品なる所にて厚五リンはかりにて銀色いたしヒイトロの如くにすき通り候所也これらのことなかく馬具屋に申付るは出來ぬこと也稽古

道具は一ツにて一兩かゝりたり絶妙也金の具足のごときもの也並々の詔
ならば二兩以上之ものなるへしわれ當年四十九歳この稽古道具を何年用
ひ可申哉五十以上にあり身劔術の仕合は先ツ出来ぬ也彰常あらは可讓
遣ものをと不思議涙したりこの日記の類にても市三郎の類にははやわか
らすよみもせぬ也わか家に學問も武術も先ツわれ一代限か孫共いかゝ
あるへきされ共藝は公儀へすることには子孫のためにはせすよつて不
構武器其外共ためしみる也○水野甲子次郎より書狀菓子等來る右之返書
遣すとて云々之義相認候而心附候得は御改正之頃御番衆々突懸御目附之
御撰に相成候もの鳥井耀藏依田近之助久須美權兵衛水野甲子次郎也當時
躰いかにやいかに新右衛門など決りそくこゝろあるへからす只慎みて
禮を守り寺社役は御老中の及キ、の公用人同役は三奉行之格なるへし別
而豊藤は恩人也心あるへし勢あり人におもはるゝより可恐ことはなし可
恐可慎

○十七日 晴 晝後一乘院宮々大乘院殿御出ありたれば推參之積に參
り候へと之御事也御用日前に付御斷をもと存たれ共大乘院殿と親敷御物
語いたし候事も無之候間御用相濟候上に可罷出旨申上る然ル處朝五ッ
時より御出にて御樂被遊たると之義に付遅も如何と八ッ時過御用濟に參
る御居間の通候様と之御事其内儒生育介御廊下に出迎候而御門主御内
意也大乘院殿とは懇意にもなき様子に付招きたりけふ土産としてくれた
るものは左衛門尉々大乘院殿へ進上之積披露いたし置たれば其積せよと
の御意也これはめされたれ共奉るものなれば八百辰の申遣し鉢植に而
花と實と貳ツツ、あるきうり貳本其外青物を過刻に一乘院へ差上たるを
例之御出早之御門主故おもしろく御取計ありし也御前に出たるに兩御門
主は御上段に而院下其外坊官共多人數御下段に居て御酒最中なりき罷出
候得はいざゞ御免を蒙りて夫の參れと之御意に付御上段之御入かはは
着坐したるに坊官共塗さかつきと瓶子をもち來りたり頂戴と申上たるに

いまた臺も膳も出ぬうちに左衛門の盃を出すかといさゝか坊官御叱り
をみけしき故に何分困りおつと御膳を出ぬうちに御酒不被下候は恐入
をしワのひ不申強を戴たしとて坊主も立ち歸らむとせし盃を無理にも
らひ候而御酒を二ツ給たり御門主門一御機嫌にてそれ左衛門大乘院と御門
主を御酌せよとの御意故に御上段に御酒の御酌をしたりわれ大門の御
酌すると直に一門御下段へ御下り大門の院家其外へ御酌被下たれば大門
も御下段へ下り一番にわれへ御盃被下御酌をも被成たり左衛門ならと江
戸とはいつれそよきと御尋ありたれば其事に御座候今日のことときこ
とは江戸にては出来不申候間ならの宜ことも御座候と申たりとは何才
かと御尋に付としはいろく御座候差極難申上少々御酒被下候節は十
六七にも罷成旅中くさくといたし候節は七十はかりにも罷成候間いく
つと申上候可然哉ちと當惑仕候と申上候得は一同笑にて兩門御機嫌な
りき暫ありて大門の仰にわれは江戸へ下り富士山をみたり書をかきみす

へしとの御意にて富士に松の御書出来たり左衛門は學者にてうたもよむ
と聞たり何そと御意故に

高聳雲中千古雪名馳海外隘乾坤舉兒寶永示靈壽不識南山有此蕃

といふ富士の詩をつくり其外

村すゝめかしこくもけふあふくかなつるかめ遊ふ紫の庭

春日山朝な夕なに月と日のくまなく昇る万世のかけ

といふ歌を出まかせに記したり一乘院宮これは出来たりとの御意しか
し兩門をあまりにほめたりたと仰られきかすか山にかけて兩門をいふは
子細あらしとおもへは前のことくよみたる也けふ一門法王の御取廻しわ
か困らぬ様に大乘院殿へ其味をよくなさるゝ躰たらく直に舌をまきたり
御土産物の御取廻しには家來みなさてもくゝとて恐入たり惜しき御人御
門主也

○十八日 雨 此ほと泉水平水に一尺五寸も減したり此躰にておし参り

梅雨までも雨少なれば六月七月大雨なるへしいかなることか泉水の減四年來はしめて也

○十九日 くもり けふ古事記をみるに日本建尊の御太刀に黒葛多纏といふものみゆこれ今の中間などのさすものあるはふるき貸刀にある藤まきなるへしいにしへのことおもふへしこれは鞘もつかも藤蔓にてまきたる也これをツ、ラサバマキといふつゝらは則葛籠のつゝら也サバとは万葉に澤と書てサハとよむ澤山まくといふこと也いにしへのことゝいふに附一ツの笑ひあり倭建タヤマト これは古事記の 御寵愛の美婦人月事になりて其血を裾へつけなから御酌をしたり夫を御覽にて御うたあり美人の返歌あり今ときかゝる女あらはいかにさて其美人のうた御意に叶ひ直に御寝につれられたる躰也これ又めつらし本居か注に月事を御厭なく召られしかはた月事日を経てめしつれられしかと疑ひたりこゝの注釋なくともよきことなるへし又注に初花のさきし時故にもらしたるなるへしとい

ひたり大笑也日のもと古代のことを今を以いろく考てはいかぬ也古事記を書き日本書紀をかく人々も今ならはいろく勘辨の書かたあるへしいにしへの質朴にていつはり少取かさりなきこと可尊事也書經も武成泰誓の篇などはよほと面の皮あつきかと小人のこゝろよりはいふもあるか也

○廿日 晴又雨又雹 けふは中院屋參拜夫と興福尼院に參り參拜こゝにては中間までへもちを出し奉行には雜煮出る也夫と棹山眉間寺に參る祈願所也 聖武帝の御陵ある寺也所々よくみゆる絶景のてら也ひはりなきみかさやま金剛山生駒山など霞みゆる也いさゝかはるけしき也

○廿一日 晴さむし きのふいさゝか風邪故押る髪月代いたし拜禮に罷出候處再感之氣味にて頭痛いたすに付鍵もいたし不申候八犬傳を終日よむ

○廿二日 晴 同斷八犬傳をよむ馬琴は老後によほと學問を上ケたり二

篇三篇と八篇九篇は大にこと也藝術の怠るへからさること如此

○廿三日 晴 けふは大にこゝろよし乍去廿六日には上京せねはならぬ故に前に同じ御用向之書物追々に溜るを嫌ふ間夫々一覽了簡申遣スめしは三椀ツ、也

○廿四日 くもりさむし けふは全快表に出る與力同心共御手當願取調に付昨年之吟味物清調出來候處入牢物二百九拾六人十二月中召捕もの共計貳拾人當年之越公事數千貳拾三口當年之越候もの六口不濟もの六口は金子調達中之もの共計盜賊訴初年忍入百十四ヶ所戸明百拾三ヶ所去申年忍入二十四ヶ所戸明百九ヶ所右之通に付博奕打はけしからぬ減乍去木辻町といふ遊女屋并料理茶屋は殊之外さひれたり兩方共によきことはなき也右につき遊女屋之害もわかる也夕方惣年寄之届物來る

○廿五日 晴又微雪 風邪に三三日御用向相休明日は上京いたすに付白洲其外御用至多しけふ吟味物之内七十九に成る實父を忤打擲いたし候

而疵附候旨之義親類より訴に付召捕引合之もの共呼出吟味いたし候内繼母并村役人共は實父不宜忤は孝心也との訴ありあまり之義に付よく糾みれば兄弟三人みな男子に付質渡世いたし既に讓物之内に錫の銚子二對あるにいたる其身上もしるへき事也全は親子兄弟利附之金子之差引と老父偏執に而片最負より起たる一件とみゆる也中子の礫になるを老父一向不構よりて試に中子を入牢申付て嚴敷してみするに老父は中子はかくの如き疵所をつけたりとて手を出すみれば小疵にてみえす何にて疵附たるかと聞は爪ツメに而引かきたりといふ繩附の中子は親と兄弟うち寄打擲之上縛其節に釘クギに而親のみつから疵附たりとて泣く也かゝる不束之出入會而みすけしからぬこと也みな鳥獸におとりたり老父みつからいふ村中に而之吝嗇也と兄弟父子相争ふに利を以して此一件の如くにいたれり欲より鳥獸におとることよくわかる也欲ほと可恐はなし此一件なとよく其節を得て夫子人倫をしらしめされは奉行の職分不立也

○廿六日 快晴 大にはるめきたり○七半時出立にて京都に參るならのはつれなら坂といふ所を越れば山城也則いにしへのなら山にて手向山もみちのにしきといふはこの所といふ古人の説ありしかと覺へし今はなかなか山けしきはなしそこを通るとき

旅衣こゝろはかりの手向してなら山越る曉の空

山の峠必神佛あり故に行かふ旅人手向して行也タウケといふはタムケにて則美濃に手向村ありタフケ村とよむ也折ふし鶏の聲をききて

あけぬよとみちのほとりの鶏鳴て月かけさゆる曉の霜

とよみし追おおもへは名高き鶏聲茅店月人跡板橋霜といふをやき直したる様に聞ゆるもをかし○伏見の大池をみるに去年の出水にて又々道水よほと満たり全に海のことし堤くつれて船にて行たり豊後橋落て普請中に付宇治川を船にて越たり壹り余也豊後橋は八十間余もあるへきに橋下水湛居ること兩國はしのことしむかし我初る林大學頭に逢ひし時足下に經濟の心あ

りよつて申へし近江の湖水を水きり落し新開をつくり若州に堀割て海運をなしたらは國益なるへし若足下一生のうちに出來すは人を見立てこれをすゝめよといひきおもしろき事におもひ居たるにけふつらくみれば平水なるに兩國のことししかるに此上に湖水の水を切落し新開たけ減附けは其水必宇治川に出る也湖水の減したる水坪たけは宇治川流末にて必溢るゝ也さすれば近江にて新開出來て山城にて古田潰るゝ也是朝三暮四のわけのみならず人を勞し骨を折丈大損也とけふおもひしりたりかゝること世に多かるへし新右衛門など往々かゝる事に預るとも決る油斷すへからす十分に國益に可成とおもひたるは大間違也けふ京都に行みるに大上使へ御機嫌伺として大諸侯より其末々までも家老を差出し其外近國は諸侯みつから被參るゝ故に帶刀人をめつらしく多くみし也其繁昌麴町のさひしき位也

万頃蒼茫積水寒。換耕羣艇事漁竿。桑田變海須臾裡。猶看波中楊柳殘。

右伏見大池

春招嫩暖麥初滋。未見桃花點燕脂。誰識豐王金湯固。徒題今日黍離辭。

右桃山懷古

疇昔致身衆豪傑。儒夫感動淚沾襟。殷紅成血桃千樹。猶止赤心報國心。

同上

此も、山といふはもと伏見宮の御住居なりしを豊太閤の城地に御望有しを不被爲進候故に其頃までは伏見宮は南朝の御末との譯に五、千石被爲取候を被削而伏見之御住居も御取上に成しよし以上一乘院宮御話其後大閤城築あり御他界の、ち慶長五年鳥居彦右衛門勤番して石賊の亂に討死しのち御城は御引移に而即今の西丸の御書院のやくらこれ也忠臣のこと被思召御引移ありし故か今に不燒彦右衛門か腹切たるといふ一間は靈ありて當時も御作事之人足御普請の時清服にて立入るといふ也不宜事あれは必災あると也以上御作事御大工頭金田藤十郎西丸御普請之節物語也西

丸御太鼓やくらには伏見の時の鐘ありよほと地にうもれて御太鼓やくらの下にあり小普請方の人々語り傳ふるはこのかねを昔は時にうちしかと大猷院様必其度々に彦右衛門の事被思召候而御落涙ありし故に人々かしくみてつかすなりしと也以上西丸御普請之節今の御代官荒井精兵衛之父小普請方荒井精兵衛之話也○京都へ来てみればならの女と違ひ又一際よし昔より吾妻男に京女郎といへは威ありて

都女のよきにそ思ふいにしへと今とはいかに吾妻ますら男

京都にても刀好めるかありて持來りてみするなり備前の助眞の在銘也越後屋の所持也といひき一文字最上のことし夫等之人夜九ツ時過までいろくはなしたり

○廿七日 着の後雨ふりしかけさ五過より快晴と成れりならへ來り四年雨に逢ことなしあやしといふ迄に天氣都合よろし○九時揃にて所司代は參るのしめ半袴也上座は伏見奉行夫々大番頭京都町奉行禁裏附奈良奉行

御目付也所司代に一汁五菜二種を肴にて中酒出る所司代はよほと混雜の躰也○大 上使酒井左衛門尉并右に被添高家入來御機嫌伺之式ありいろくなる所司代と大 上使の手續ある事之由大 上使の退散暮ころ也右相濟る大 上使の旅館に參る是は松平土佐守屋敷也二十町はかりあり六半時過歸宅也○歸りみれば刀はなしなどの人一兩輩まち居る備前兼光の刀をみる太刀也五攝家の所藏かとおもひしに或は與力などの所持とおもひはからるゝ也奇代の實用刀也切味至るよかるへしとおもふ正宗門弟正宗をはしめ刃味兼元などに不及しかるに兼光は弟子なれ共備前風を守居故かいつも刃味よくみゆる也參りし人のうちに西村東藏といふ水野組の同心也五十俵三人扶持被下のしめをも着用也この人同心中にての人物にて學問も出来る也都筑より引附にて四年來上京すれば必來る也何ぞ書くれよといふ故に西村君といふ字をかしらに置て

西山弦月朗村里尙謳歌君看昇平日万民逸樂多。

といふと唐番二行に

南北東西村里盛。春秋冬夏屋厨蕃。

といふをしるし又にし村の字を春の祝といふ題にて

はる霞日かけにほひて千世經にし。村つる遊ふのとかなる空

かも川と濁らぬ人の末ひろみさか行千世をとほ仁志武樂慈。

などおもひ出るまゝに記したり○わか二十五年前留役に上京せし時の町人など來り目通願ひて彼是九ツ過までかゝりし也○大 上使參 内すれは 天子より御盃被下るゝ事之由心配之事之由され共内實は手違ある事を喜ふことよし某の人挨拶振の違ひて右之禮に傳奏之雜掌へ一生涯扶持方くれられたりと也其余をしてしるへし上使の旅館に參るものは詳に聞に侍從并二十万石以上之附使者也といふ也所々にいろくの紋附たる幕うちたるを市中にてみたりみな家老の來ること故万石以上之人もあるよし也きのふ大名なるへしといひしは其間違也此度の 上使も至る質

素と聞ゆる也雲州よき先例を出置し故なるへし先代の酒井左衛門尉上京之節はけしからぬ立派の事の由也○伏見の奉行は越前守殿弟にてよほと英氣ある人なり十一年ふりにて逢たり驚はかり穩になられたり市中にて評判よしといふ也○伴金左衛門に逢ひしに新右衛門よりこま／＼との了簡をも申越不相替参よし等申しき○夜に入人來りて刀をみする倫光ならむといひたるに兼光なりといふ拵其外共十分也我所持之クナリナワに不減良刀也○廿八日 晴 六半時前出宅にて六時前にならへ到着也○廿九日 雨 幸三郎はたのみ置たるきせるの宮出來たる故に一乘院宮へ奉りたるにことの外の御機嫌にてかゝるものいまたみすことし嵐山のはな見に門跡其外御つれ立て御遊覽の思召也その時に晴にもつへしと之義御丁寧に被仰下たりこのみやの御如才なきこといふへからす此ほと墨を夥御買上也いかにと聞に左衛門尉世話にて今までならにあらぬ唐墨製出來たり今のうちはよしのちにわるくするなるへしよつて多くかひてか

らし置と之御意也坊官方なと之御成の時は急度したる金子を被下事之由其日の入用は夫にて澤山にて只さわき損位の事之由也それは宮方之御家來其外共にいらぬもの故に一度の御馳走にけしからすかゝる也夫を御存知故に坊官等之かたへ金子を被下て御酒被召上るゝ時は十分一にてすむ故也と也以前鶴を雌雄御買上ありて御庭へ飼はれたるに表向二十五兩也内實は十二兩はかりの由ろく／＼御疊も替させられぬといふ位の御勝手なるに御家來共いかゝ也風聞偽なるへけれと万々一まことならむには恐入る也○晦日 雨 神武帝の御陵はウチヒ山の北にありと書紀古事記などにあるに今の御陵といふものいさゝか西のかたへふれたりよつていろ／＼の論ありて神武田とて今は田になれりといふ説までありあまりのこと故によく糺しみれば今奉行所にて 神武の御陵也といふ所より二町はかりわきに塚山あり其邊にて木を伐れば忽に罰あたる也其二町はかりの間に芝原ありそこは草をかりて牛馬に飼ても忽にことある也神武田といふ田を

起せしものは忽に神罰にて血縁之もの共迄悉に死絶し故に人恐れて當時は荒地になりしと也いにしへのみさゝき大成は方十町もあるなれば右二ヶ所并芝地共にみさゝきのうちにて田になり果およひ所の違たるにはあらぬ也いにしへはみさゝきといふは御なきから奉葬と御在世の御道具を奉修と御葬送の御品々奉修と三ヶ所に山をつくともあるよしなればかたゝもて間違はなき也され共必三ヶ所ともみえず寶萊山といふ 垂仁帝の御陵など二ツ山あり其外一ツなるもある也漸に前のことく 神武の御陵わかりて且神靈なるを詳に聞いていとゝ難有おもふ也

日蝕

○二月朔日 晴 御役所之馬見所二間に貳間半はかりあり大破に付修復に成御入用減候様御林之雜木にて立よ削るに不及といひしにたる木柱其外共いろゝの木をあつめ皮附のまゝ建たり却るよほと風流めきたるも存外也勿論瓦屋根也馬場は都而江戸へもち行たき事也けふは御役所たつ

みいなりの祭也例之通こはめし其外共夥事也市中より奉納之はなあり○日食九分半也快晴なればよくみえし也黄昏のことくにて空くろく物さひしきさま也東方に大成星一ツみゆみなゝみたり五星のうちかよほと大にして赤し啓明星のことくなるさま也啓明にはあらねとよあけに啓明の出る所へみえし也日食の類和言にてふるくハエといふ則榮の字之意也これ法師をかみ長死せしを目出度なるなど其外いむことこの反語也以上夏蔭の考也反語は宣長などの考もある也大かた同し

○二日 雨 泉水ふかき所は三尺余もあるに四五日已前迄は涸て水壹尺はかりに成鯉金魚の潜み居ところみゆる故に晝は雌鳩夜は五位鷲に魚をあさるゝ故に泉水中へかゝしをつくりて立置たるにけふの雨夏の夕立のことくにふりたればよほとましたり當年はくれゝ無覺束とし也

○三日 晴 講釋はしめあり○先日之便の日記を再ひみるに新右衛門の弓傳授もあり五ヶ月之内に二万數の矢數感心之至也先達もしるしたり



弓は的を不射はしめ一間にて一万本射てこゝろもち弓をつよきに改三尺さかり一万本の數にみつること三尺さかり二十五万數にいたりはしめて十五間之場所より射ならはくせは不出して上達早かるへしいかに此論承りたし○正月元日之巳刻より申刻までの雨にて中之口混雜百人番所までの混雜にて時服拜領之品行衛不知に成留役組頭の大森善次郎之素袍其外共挾箱被揉破之行衛不知になりたるとのことけしからす先年元日之大雨にて殊に寒甚敷中間の笠につらゝさかりて中ノ口にて被踏殺又は凍死之もの有といふ風聞ありし時も混雜したれ共當年のことくにはなかりきめつらしきこと也中之口之面々御玄關を退出になりしとはめつらしき事也○四日に都筑参り候之段々と御物語など申上候之母上御安心のよし難有候○太郎彰常とかはり世智かしこくあるへしと之義困りたること也被申越候通大きく御したて可被下候世智多きもの大人になること難し士の尤可恐事也○淺野中書より文通之内浦賀の御臺場西洋風に實用のもの立派に出來戰

艦も別段之製出來る積之由この人など近頃の君子にて世智かしこき味更になし○地天泰の論新右衛門考よろし別段之事也右之工夫にて少々安心也いにしへの人兄弟の互に誠るに人ありて汝か顔へつばきを吐かけたらはいかにするといひたるに唯おし拭て居り可申といひしに大に驚てその心懸けにては世は渡られす拭へは必向之氣にさわる也しらす良にてかはかせその拭ふこゝろある故に案事るといひしと也この人唐の賢相也しと覺へし也新右衛門之考右に同し甚よし○酒のこと御減のよし至極也われなど近來もとより多くは飲ますされ共舊年中寢酒小猪口にて八ツ位ツ、のみしにやはり身に當るかことし當年は一合の酒たりともみたりに不飲ためしみるに大によろし身にあたること目にみえこゝろにしるゝは更にもいはす段々の數つもありあたるにいたりては何事もなきかことくにて大事に及ぶ也疊のきれ衣のきるゝかことし一度より二三度まで何事もなきかことくなれ共往來しけく或は多く物にふるゝところ早く破るゝ也よつておもふ人

間の身には差當りてさしてのことなきかこときこと大にあたる也養生のことには付はなしあり昔淺野中書を京仿式といふ筆を一本くれたりよく洗ひて遣ひし也去年まで細字をかきたり七年になるへし其ことを淺野の書狀へしるしたるに右之筆を又四本くれたりこの筆前のことくあらむには我七十七歳のときまでの料也人世一醉の夢のことく可歎事也と淺野へ申遣し同人を大石良雄か書簡の詩を申越たれば則其ことを申して良雄など大不幸に逢て大幸を得たり士といふものはめて度ときはまたも出来るなれ共難義に逢ひし時に君子小人のわかることなりとおもふといひやりたり夫を案にて詩をつくるへしとおもふ也○新右衛門書狀之内市三郎弓之義御尤也當人達を望故に申候され共もとより御同意に付先ツ見合候積○母上舊臘御月代に新春御着替もありしとの事恐悦也○筆の事忝候いつにても宜候○八丈稿忝候望外之至御氣之毒に候○御精勤之由目出度候○奉行之ために相成候様食物迄も御世話之由至極可然候人媚諂候様萬一申候

とも御構有之間敷候元來留役は上へ對し不敬なるものに候尤御奉公いたし候上は御用向に御不爲之義可申争は勿論の事ながら不敬は如何に有之され共奉行たるものは其不敬をゆるして御奉公をさする事之譯故自然と不敬はやり候留役のことく御奉公を引受する御役も少又不敬も多しと存候間御心附御尤に候媚とみえ候とも不媚上は論なし事君盡禮人以爲諂これらは孔夫子の溫良恭謙讓の躰を人みな諂と申せし故の御歎なるへし孔夫子をさへにかくの如く申したり況や今人をや其外いにしへの君子も名を好といはるゝをいとふ時は善事は出來すと申たれば決而御構あるましく候名を好む黨を結ふ私恩をうる此三ヶ條にてよく君子を小人の害すること候こゝろすへきもこゝにありいとふましきも亦こゝにあり道理をふみ私なからむ様にして其後は人のいふを構ふへからざる構ふ故に悪くなる也人をいふを聞へし聞されは身の修行出來ぬ也人のわるくいふ程のことをきくは身大良藥也○近來之如く留役之よく成ることをいにしへ

よりきかぬ事也當時 御目見以下より芙蓉之間へすむもの久須美佐渡
守中野石見守某中嶋平四郎也其外之役人に 御目見以下之もの万人以上
あるへししかる。壹人もなし留役の可恐役さて出精せねはならぬといふは
このわけ也いにしへ聞かぬこと也刑名のことの權下りたるにはあらぬか
○四日 曇 初瀬僧正かもとよりわれ學問を好と聞て昨年來申付て漸出
來たりとて什物之内菅家之御自筆の緣起一卷を字跡其外共其通にうつし
くれたり奉行之巡見等之時たのみていろくの寫なと申受ることは常の
事故にもらひ置たり末をみれば執筆遣唐大使云々道真とありこれ日本一
品のもの也初瀬には百疊敷の坐敷等あり出家も千人以上常に居て大和の
寺院いにしへのすかたあるものは此寺はかり也ならの般若寺にも菅相公
の御名の緣起あり是は文章は菅相公なるへけれ共手蹟は初瀬の方よりも
丁寧にして少々よき様也いにしへの右筆手といふものか初瀬に比す
れば下品也初瀬の書は儒者の書風也御自筆無紛るへし

○五日 雨 めつらしき日蝕に付當地之曆座を相糾たるに末之書付を出
す明和七年五月朔日日蝕皆既天明六年正月朔日皆既寛政六年十二月朔日
九分同十二年四月朔日九分享和二年八月朔日九分當月朔日九分半太平年
表を以みるに明和は大旱魃其外いろくあり天明は申迄も無之大變寛政
より享和迄九年之内三度之日蝕何もこれといふことなし天變地妖といふ
共人事治まれる上は子細なきこと、みゆ寛政享和は殊に御仁政の聞へあ
る時なるに九年に三度までありし也

○六日 雨 都々帝王の御名をいにしへは不構事なるに中古よりいむこ
とに成たり缺畫のことなどは中絶したること、おもふに今もある也よく
聞は二三十年來初被 仰出たると也 天子御位につかせらるれば以後
はこの字を缺畫せよとの事御門主方等には御達しに成也兼とかくか如く
末畫にても又兼兼かくの如くにても勝手次第なることこのよしこれらは關
東にてはしらぬこと也古學のうたよみなと一向に構はぬといふはいかな

古事記に御は
天神はより
主代は國
常立は尊
前代は尊
これにあり
にあらざる
御紀は日本
書紀は日本
に決るとき
に決るとき
さるべき也
古事記の必
誤るに誤る
故に誤るに
をれに誤る
御紀は日本
御紀は日本
へりし御紀
へりし御紀

ることか分らぬ事也惣而古牀のうたよみといふものは多く上は對して不遜なること多き也たとへは古事記と日本書紀のとし古事記といふもの出來たれ共よからさりしにやはつか八ヶ年のうちに又日本書紀の撰ありて其ときは古事記の作者も加りて日本書紀の出來たる也しかるを古事記を用ひて日本書紀をことに悪さまにいふ也これは書紀の書牀あまりにからめきてたとへはいにしへは鹿のかた骨をやきてうらなひをしたるを龜トの趣にかくの類にて大にいにしへをあやまることのある也かゝる類げにも書紀のかたいにしへを失ひしこと多しされ共いは、夫は小々のきすといふへし日本書紀と古事記を突合みるに 天子の御年違はさるは古きところにはいとく少し數 帝にて百年も其余も違ひ一 帝にて五十年も違ふかある也外に可見合ものなければ千年來朝廷にて御用ひありし書紀のかたをよしとせねはならず又 神功皇后を古事記には 仲哀天皇の末へ記し書紀は御一代のうちに成ありこれらは水戸の日本史などにも同

かたくしるは
試ける先生は
古に先んて大
に障ありて是
はかへし人あ
なみせし給ふ
へにかみからす

く古事記の例によられたれ共 神功皇后の御事は開化天皇の 御曾孫にて則 天子ともし御つゝきにてからの呂氏則天などの類とは可引競もけがらはしき迄にたかへりかゝる例は 天武天皇の崩御の後皇后の御位につかせられて 持統天皇と申奉る天武と持統は御兄弟なれば女帝にて更に子細なし 舒明の皇極又同じこれは日のもとにては異母の御兄弟は夫婦にならせらるゝこといにしへよりのことなれば、則糾へしからの夏殷の時のことくなれば子細のなき事也しかるを古事記によりて御代々 帝王の神功后を御一代とせられたるによらぬときは臣として其君を廢し奉るわけ也からにてはこれは天子とはならずこれはいかになと後世よりいふことあれ共日のもとにてはいにしへの天子は則 御先代の御事故みたりに臣下より奉議事は少もならぬ也たとへは神武帝の御事を神ヤマトイハレヒコノ命とするしてからさまの御名は神武帝と申奉るとしては御代々様の御事を恐多御事ながら 家康からさまの御諡とか天子より御諡号は東

照宮と申と御諡を注にしるしたるかこときものにて 上の對し奉り不敬
をかきりならずやよつていふ古學の國學者など恐多ことをいふものはな
しこれは眞淵にはしまり宣長に甚しく其のちの人々はみなみたりに口ま
ねして 朝廷の御法 公儀の御法にも奉背罪人となりし也
○七日 晴 けふは薪能の初日也例のよやまかせに西出る薪能中は奉行
の晒ものゝ如し給人はみせものゝいひ立に似たり○昨夜五時正月廿五日
附の書狀來る○岡崎の馬よき馬にて手に合ふを撰出されたるなるへし予
大炊頭殿にてはしめ被爲乗たる馬は少も不動二度目よりはよき馬を借さ
れたりいかに名馬にても手にのらぬは力なき人正宗の大刀さすかことく
にて仕かたなし○馬をもらひたるとも飼はれ候義は御勘辨もの也以前既
に其ことありけれ共予はよしにしたりさてく世上の説うるさし鎧を被
買候は、近來の加賀鎧などよからすみな象眼を專にしてナマ鎧同前也象
眼少して明珍の鎧のことくにて少さくかね薄なるし此邊の地かねにヒヤめ

きたるものなきを御撰あるへしふるきには必ヒヤの如くなるものいりて
かね弱り居る也予調役組頭四年つとめたれ共馬を飼はず正月肩輿に乗らす
仕舞たり馬のこと更に子細なきことなれ共既に新見伊州御用取次に馬
九疋かありしとて一かとのいはれくさに成たり伊州は下女十八人はかり
にて木綿夜具也しと承るそれはいはす馬のことをいふ也土岐豊前には女
四十人ありしといふ也妾も三人かありし也伊州には妾なし世中武のこと
をいはす刀は鈍刀にても女房は籠甲のくし珊瑚のさし込の笄といふこと
は世の常なればみな少もわるくはいはぬ也わか劔術を出精するころ久須
美のいはれたるに奉行に酒を過し怪我したるは言譯立とも劔術にて怪
我いたしたりとては云譯は不立といはれき此こと御勘辨あるへし白きか白
きにてみなすむことならば君子は必身を全する也君子は小人に必多く害
せらるゝ也それは早くいへは乾三君子大人也坤三小人邪物也既に卦を一
卦かくと君子は三人小人は六人ある也象干これ故に易君子のためにまうけた

れ共小人の爲にはまうけすといひ陽をたすけて陰を抑へるといふは伏羲
已來の法なるへし馬のことよく御勘辨あるへし伊勢守殿供つれを御止な
されたるは近來の大出來也やめすして虎皮并御紋附にても誰も一言のい
ひてはなき也しかるを今のことくに成されたるといふか人にすくれたる
所也○船橋久五郎屋敷替の無間も出火盛衰可歎可恐○廿一日に龍之介の失
せしといふこと手をもつくしたることなれ共仕かたなきこと也さすかの菲
もこのたひはきかぬ也無詮もの也薬を以必いのちを全するものならば良
醫の手に死するものはなきわけ也九半時に夢さめて兒孫のなくかとおも
へは法師か經よむ聲なりとはかなしきこと也○これに付一ツの患ありこれ
らのことにて母上の御歎と手こりによりて太郎を別あまなく被遊るゝ
ことはあらせられすやいかにますゝあまく被遊ては太郎のためになら
ぬ也其譯はわれいかにするとも母上よりは必嚴なるへし其時に嚴せねは
人とならず人となる様にすれば煩ふといふにいたるへし何卒嚴敷可被成

候○中書殿のこと當脇坂淡州は御存知なき御行狀もある故に過日申進候
類之義可申進と之義追々おもひ出すことに記すへし中務殿は寇萊公によ
く似られたり寇準といふ宋の宰相也
名臣言行録にもみゆ水野越前守殿は明の宰相張居正に似たり
われ御兩人共に一たひは帷幕のうちのことをもしりしなれば委細に心
術もしり居に凡之坪先かくの如し中務殿剛烈なる御人なれ共天下の人の
手本と成ることのうち尤の美談といふはわれ中務殿飛鳥も隕るといふ御
勢の時何事をもみな取計たるうち御存慮と不合のことありて段々申上て
御氣色に拘ることもありし時にけしからす御勢ひの強き御人なれば御顔
をみると直にいひ負る也よつてこれは万一御爲にならぬと思ふことあれ
は下を向きて居る也此御人われを御懇に被成下るゝにこれは千慮の御一
失かとおもへは決而御受をせず再ひも三たひも争ふても其議を動さす既
に正月初而参りしに其ことありて右之書物を寺社役加集卯右衛門預りに
あとしの初より御議論ありてはよからす此次に御出の節仰らるへし先今

日は御酒被食上て御歸り候へと迄に申せしことありこれまでに争はれし譯は中務殿と此位に争ひて申上たることもし實によければ其跡はたとへは大雷のはれて清風明月に暑を洗ふかことくにて過にし日もよくいひたりそこのいひしこと真にしかりしかるに家來より手を越きし故に間違たりなと申されて其御悦ひの躰たとふるにもものなし夫故にこれらはよからぬと万々一おもへはかならず押而申上ていさゝかわか直也とおもひしこともある也其後越前守殿のことをするにいたり印幡沼のことよからすと申上て最初は其日に御止被成此ことはよからぬといふこと河村清兵衛も申したり其後再び御起しなざるゝ時はわれも一言もいふことなかりきこゝにいたりて扱々中書公は賢人も明將也われ直にて上へ向ひ物いひしとおもひしは大なる誤にて中書公の良知にてわれを自由に遣ひ廻されて元來は其役を失ふことを恐るゝ鄙夫なるをも正直の人のことくに乘廻し給ひし也さても扱もと内心にて手を打て大智の程を奉感人の上たる人はか

くならてはならすわれ少も直なることなく臆病ものなるを中書公の御取廻しにてかくなりけむと此朝臣失給ひしのおとろきし也ことはかはれ共加藤清正の家來に飯田覺兵衛といふ人あり覺のもの也とて大闇の御意にて角兵衛を覺兵衛と改し位の人也其人の遺言に子孫を武士にはすへからすわれ戰場にのそみて功ありて後みればみな幸にいのちを拾ひし也其時にさても危かりし二ツなきいのちを失ふへかりしをかく幸にまぬかれけむ再び戰場のはたらきはすまじとおもひ居れ共清正か常に其功を賞し人にもいはるゝよりて忘れては又鍵をいれたり清正果られわれとし老ておもへは一生涯清正にだまされて既に命を失ふもしらさりきあなおそろし子孫は決而武士にはすへからすといひしと也大と小との違ひこそあれわか少々も御奉公の出來しといふはみな中書殿の御取廻しによりし也とおもふことにかの朝臣のことを感し奉る也かくのことくならむには今の淡路殿も不遠御老中にならせられても臆病ものをも強くし不正直も

のを正直にして自由に御遣ひなさるゝなるへしわれ一人にてかくまてに剛臆正不正のたかひあり可恐こと也

○八日 雨 きのふ薪能の張番に高松四郎出て居て少々こゝろわろしとて湯を呑なから卒倒して人事をしらすかこにて御場所より歸りたりなら中有名の醫共來りて昨夜世話したれ共今朝にいたり同篇也いさゝか人事をしるかことなれ共口もなにもきけす全卒中風ののひし也又きのふなら抱の門番俄に胸痛にて倒れこれは妻子あるものなれば其かたへ遣したり昨夜はよほと取込たり○われよつていふ誰もかゝる病あらずとは難申もし我など中風を發したらは日數五十日藥を爲飲夫にても同辺ついでならは少も藥をのますへからす夫はわれ平日灸をすうること月に三千はかりッ、其外のみたき酒もろくにはのます日々武藝をしてこれにて中氣出れば天命也必らずもくすりなとまますへからすとおさと申聞たり扱々いやなること常なきそ世中の常とはいふなれといとこゝろくるし

○九日 曇大風 薪能之場所よりみればかつらき金剛山はさら也春日山の奥まで昨夜雪ふりたりならば今曉迄大雨なれば薪能はあるましとおもひたるに出仕のこと申來れり途中も草履みちにて芝地少々しめりあれ共いさゝか能役者の足袋のうらくろくみゆる位のこと也ならの地面のよきこと如斯驚へし雨なければ芝地にて能をするに足袋うらなと少もよこるゝことなし大風なる故に薪をたくことはならし夜にいらは能はなるまし其始末に寄存寄ありなとおもひ居たり日くれころより風彌甚ししかるに例の通かゝりをはしめたれは奥力らか居る所は高麗へりのたゝみ二十七疊敷也そこへ吹かくること夥し火の粉は北風の雪をちらすかことくに吹入る也奥力共なと袖にはらひて平氣也扱又疊もこけすわれをはしめ江戸ものは火計見て懸念すれ共土地の人更に平氣也わからぬもの也かく迄に火をいたつらをせぬわけ眞に可怪こと也夫故に千年以上のもの多く存しにくらといふものは土藏にはあらず檜の木のくれ木をくみかさねて下を

六尺はかり吹拂にしたるものにてすむとみえたりこの藏天平寶字のころのまゝのものより頼朝卿の御たてなされたるものまで其まゝある也市中井與力等之内にあるものは皆江戸風の土藏なれ共寶庫といふものは悉あせくも也元興寺の塔は聖徳太子の御建なされたるものなるにきはふ市中にあれ共火災なし以上のことは江戸もの實に驚くこと也これのみは余國にあらぬことなるへし夫故に火を等閑にすること甚し奉行所の庭の奥のかたをはるに風ふく日に火をつけて去年來のかれあしなとをやきて掃除する也はしめは驚てみなく其夜はねられすわれは屢起て庭のかたを見し也其後はなれて不怪土地のものゝ火を麓末にすること江戸の至而麓末にすると土地の丁寧にすると釣合也勿論火のもとのこと人念旨等は昨夜も別而改而申付引拂たれ共土地のものはかけにては笑ふ也風土のこ和人理を以猥にはかるへからす土地の人のいふをき其始末をみてせぬと遠國は一概にならぬこと火の一事にてもしるへし○給人高松四郎昨夜

七時頃終に病死せり卒中風の少々延たる也よき男なるに可憐事也常にいふわれ死したらは順右衛門に棺桶一ツをくれよと也このこと酒後必いふこと也四郎いまた棺桶のはなし出す今一ツ酒さし給へと云位のこと也よつて順右衛門より棺桶を進物にせしといふ也薪能中に付今夜内葬いたす寺はならの東向花芝町浄土宗宗徳寺也戒名は天光院稱念遠風居士といふ也一昨日の薪能には立派にのしめ麻まで御式の御場所に出けふは野邊の送りいたしづくも同じことなから可憐事也四郎は二本松領の苗字帯刀する庄屋の長男にわかゝりし昔元氣過て娘壹人を故郷に置いて江戸へ出たるもの也當時の妻になら出生の女子あり四才也これらのこといつれかいたし遣すつもり也いまた申出さるは内々故也清少納言か遠くて近き物といふに男女の間船のみちなといふこと多あげたれとヨミノ國のことはなしこの國いにしへかよちありてけるをイサナキノ尊大石をもて塞給ふ故に今は常のかよひなし遠きくになれ共さて近く人のいく也とおもひて

彼いひし男女のあひたより遠くてちかきよみのみちかな
とおもひつゝけたり蘇生することをヨミチかへるといふはヨミノ國の路
へ行て途中を歸り來るのわけ也

○十日 くもり夕雪 けふは春日の神前能也 春日若宮の御神前朱の瑞
籬之内には千鳥三位外壹人衣冠にて圓坐之上に着坐瑞籬之外には白衣之
詞官共數十人着坐也白衣の布衣のとき仕立之もの也此内に諸大夫之神
主共もあるへし瑞籬のほとりの紅梅さかりにて神前へかく人々並ひしさ
まいふへからす折ふし雪ふり出したりもとより神主其外之詰所は青天井
なれば雪のふりかゝるををりく打拂さまさのゝわたりの雪の夕くれと
いふさまもあり神前は冬のかくらにて榊葉赤星なとうたふもかくとおも
はるゝ也春日の大宮といへ共六尺四方はかりの朱塗檜わた葺のやしろ也
もとより拜殿などいふものなしさゝかの屋根あり下は土間なるにわら
の圓坐あるはかり也奉行も百姓も拜の時は同じさま也いせの大神宮も凡

うたに土に
あらかねと
いふ冠辭
トハあり夫
は宮殿ミチ
アラカとい
ふ也ミとい
よきことい
ラカといふ
は宮殿其柱
をたつらに
土へたつら
故にミアラ
カノ根とい
ふこととい
ふとカネと
いふと宣長

は似たるもの也いせはかやふき白木づくり也階段となし抑日本の神宮
のさまといふものはかやにてほつたてはしらにいたしたるきといふもの
など竹にて繩からけなるへきもの也しかるを追々立派になりしといへ共
今のいせ春日等尙古風の存すること也公儀の御靈屋などみな日のもと
の風を御用ひあらは今のとき御大造はあらし久野日光紅葉山兩山など
夥御入用なるへしこの御入用みな佛法仕立より起ること也しかし夫には
深き御意味のあることなるへし我等のときものゝ考も及はず議奉るへ
きもかしこし

○十一日 くもり 少々風邪に付薪能へは不出日々の能に食傷して頭痛
氣となりしもしるへからすつゝきて能をみしかはよる夢にも太鼓のつゝ
みの音するかことし八日の夜一乘院宮へ大乘院殿被參野村三次郎是はこ
の節上かたにての上手也を被召てさる樂あり今より急に左衛門尉を召候
へみせて嬉しめむとの御意なりければ此ほと奉行は日々の能責にて落城

せぬはかりや、甲をも脱やりをも伏する位なれば彼を御歎しめなさる、思召ならば召さるかた可然と儒員の育介が強申して御止に成しと也育介近來のはたらしき也其はなしを聞難有は別段之事能には身ぶるい出たり京都にて傳奏衆のこどもを叱らせらるゝに汝とがとして能をみすへしと申さるゝと也左もあるへし小供いかなれば能はさまてにおそろしといひしに足の折るゝはかりなるのみならず畜生の革をたゝきたてゝ幽靈のまねをする也といひしとか承るまことにや

○十二日 夕かた微雨 薪能半より二月堂へ参る抑この二月堂といふはいかなる佛にや京大坂其外諸國の人々厚信仰する佛にて即奉行も年始に参り初る此地へ参りし時も参ること也尊信春日に同じこの佛へ二月十二日には大なる佛事あり奉行一代に一度は行こと也我いまた行かす與力共もいふによりてけふ行し也二月堂の観音とはいへ共秘佛にてみしものなし法師といへ共しらす或云歡喜天也或は元來の正躰この二月堂のある所

の山を以正躰とすなといふ也聖天也といふ説は元祿の頃出火して堂宇焼失せし時に本尊其外多く灰燼の内に残りて其時にみしに聖天也とよつて常に観音といふに異なりければ秘佛にせしなと俗説區也神田明神の臺はとなる小山の上の堂なれば古き陵なともしるへからすいづれにも観音とは名はかりにて殊なる佛と聞ゆる也夫はいかなる法師もけふの修法七日の内は大精進にてもものいみ殊異に多く服穢等のものをいたく禁する也佛に服穢をいふこと嚴なるはいづれにもめつらしきこと也ある僧穢たる行ひありて十四五年以前のことのよしけふの通夜こもりしたるにあしたになりみれば行衛しれす終に行衛しれすになりしなとけしからぬことを土俗はいふ也とるにたらぬ事也され共元祿の火事に火の中にて佛具等残りしよしは奉行所のふるく記したるものにもみえ關東へも申上に成今奉行巡見の時もみするに經文等字躰はのこりて外は焦たるなどある也木板右に付桂昌院様御再建にて 公儀御修復所とはなれるといふ也これはこゝにて

傳ふ所なれ共 桂昌院様の思召にて唐招提寺へ御寄附物多く法隆寺は御修復もあり江戸上野の三門中堂なども同じ頃に出來たりこゝの大佛の本堂も御再建あれは二月堂に限りたることならず柳澤昌保といふ人佛をも好みしは柳かけ日記にてもしるへしよつてこゝにて二月堂のことをいふ／＼傳ふこと取にたらず只々御修所にて御貸附もあり奉行も拜する佛といふ迄は實事とみるへし扱夕かたより行みたるにならにはめつらしく江戸の縁日のことく人賑ひて廣き境内万蟻の春の日につたふかことく人集たり境内に水茶屋等多くありてこゝに來りはしめて江戸に似たることをみたり奉行は二月堂の前迄乘輿也この日は火をけしからす取扱ふこと故に與力同心共火事具にて火消をつれて出役する也奉行の見物所は竹にて手すりを造り山の半腹にあり其次は與力共也この堂山上に欄干つくりに出來居也さて佛事と云て人々のみるは山の下より堂へかけては壹間に高サ九尺の廊下つゝきにて其廊下の板羽目を人のみるかたははつし

あり下は石の階段也其所をはしめ四五尺の檜の木のたいまつをもちて三四度のほりくたりする也其さま鳶のもの躰のもの松火を鑪を構たるかことく頭の上に捧けもちて走ながら上り下りする也其事早而長四間はかりなる最上の大竹の先へ屋根板のこときものを以四五尺はかりなる圓きものを作り其内へ干たる松の葉を夥つめたるもの也夫へ火を附て其壹間に高サ九尺はかりなる廊下をもちのほることなれば屋根うらも何もみな火かゝる也火のもゆること六尺はかりもあるへし火のこ四方へ夥ちる也夫に法師壹人にも躰のもの差添てのほる也夫より本堂の欄干の上へ出て其大松火をなゝめにしつかつきあるく故に火のこ四方へちるはさら也蟻のことく見物するものゝ上へ火の落ること夥しかくすること十一度にて事畢る也先々の奉行も拜ひをする事なればわれも堂へ登り拜するとして廊下を通りみしに火氣ありて板はめなどはよほどあつくなり居る也され共いにしへより焦ることなしと也所々に燈籠あれ共其かみに火移ると

いふことなし堂のうち火の通る所には燈心をわかねてかけ置て火のつかぬをみするといふ也衣類などの上へ火落ること夥みえ素足にて火の粉の中をふみ行けとも傷火せすとてほこる也われみるうちに見物の上へ火の粉多くちりたり或は兒のかしらに火の粉のかゝりたるをしらすして行なとはみたり扱右之松火をみ畢而歸るものも通夜するものもある也法師共は通夜にて板の間をドン／＼ふみなから修法することのよし夫故に二月堂に悪魔を封しこめて其塚の上へ建たる堂也なと／＼もいふ也例のとるにたらす百濟王仁の墳を今鬼の墳といふ類なれば更にいふにもたらぬこと也さて又深夜になりて修法ありて井戸へ向てワカサ／＼と呼と井水涌出すると也其水をくみて二月堂へ納め置也去年の水をことし出して人にくるゝ也泥水也よつて清すため也なといふ也其井をワカサ井といひて堂の脇にあり二間四方はかりなる家をつくり常には封をして人にみせず今夜修法のときにかきり開きてワカサ／＼と呼は地底より水涌出するといふ

大和にては所々の靈あり類る井なとありしらくぬもありは雪隠か真木部やかと關東にへし品川東海寺あり

世ノ尻ツビフリ儒者ト唱ハルモノカヤカマシニモヤカマシニキ

也ワカサとは若州より來れば也といふ也大和名所圖繪にいにしへ鶴を若狹にてはなち試たるにこの井中より出しといふことあれ共例の佛説なるへしサ／＼といふはものを呼ふことの古言にて今もサア／＼これはなといふ類也涌サ／＼といふを若狹と心得たるにはあらずや天竺の無熱池につゝくといふ池など日本には法師のいひつたふるもあれはまた若狹は至而近きなるへしこれらのこと長吏の手下の者などに探らせたらは事實わかるへけれ共與方同心共より長吏其外共市中末々迄尊信夥しきこと故に左衛門尉様御代に御内探までありしか實事也なといひてます／＼あやしきことの上塗をもなし其上從來人の信仰して害もなく土地の潤になることなれば少も構はず先例通りする也これらのことにかゝり居るいとまなければ也

○十三日 雨 この頃の能に一乘院宮御内覽ありしと風聞する也御内覽なれば寺僧の御衣をめして寺僧の通り頭をつゝみ書かける辨慶などのかしらのことく槍術上覽のとき寶藏院御前にてもかふり其上へやりの面を

らすとて一
錢もあけぬ
也佛にもす
はいらぬこ
と也

天子の御方血
筋も尼に被
爲成て如此
然るにわれ
らか娘なと
に嫌ふなと
の不届も僧
のあり可僧
のかきり也

つけたりなして石の間へ召^{メシ}たる草履を御脱其上へ御着坐にて御覽濟御み
つから御草履とり召れて寺僧一同に御歸り也又中宮寺宮も御内覽ありこれ
らは御女儀にて御としも十八歳はかりなれ共ねつみの麻の御衣に白き
緋の女だるまの冠る頭巾のごときものをふかくめされ御供の尼なるへし
同し躰の尼四人一同に御内覽也一乘院宮の御妹なれ共尼にて被爲在れ
は石段の上にて男僧の所へはいらせられたし衆徒共之棧敷を町人へか
してみする所の末へ御坐なされて御内覽也町人共は氣つまりなるへけれ
共いたし方もなければおのれらは酒をのみ肴を食なから見物する也か
ること大和も山城も上世よりの習はしにて今にしかり春日の勅使の公
家衆能見物に參らるれ共其時は一己の自用なれば雜人の通にて今の人
勅使也なとあとにて聞位のごとき也この風唐も同じかるへし日のもと
天子の御遊覽のとき菜^ナつむ娘にうたを被下たれば宅へ歸りて其ことを
父に申せは夫は天子なるへしといひて奉待と無間^モいらせらるゝなとい

ふさま其外中昔の法皇の御供にて忠盛か油つきもちたる僧をくみとめた
るなどのことにて其凡はしらるゝ也今の武家の微行^{シビ}は役人の類は少も
ならず大名等の微行^{シビ}にては鍵を爲持馬かこに乘立派にして歩行といふは
二百年來の風義にてよき御作法也いにしへの風のごとくならば江戸なら
はいかなることや出来なむ可恐こと也前のさまなと上野の宮などの躰を
以おもひくらふれば偽のごとくおもふ也京大和の風今もかくの如し仕來
なれば人もあやします關東の人々のみ膽を潰し居る也

○十四日 晴 能せめも今日にて相濟たりけふ儒者佐々木育介來りて話
に昨夜鶴林玉露をよみに人の婦のよく儉なるをいひて朝につとに起て
婢などのすることまでを成頭のかさりは銀にかきり其余の奢侈の具を用
ひすとあり分らぬ事にて既銀を用ゆるを以大成奢とすへし何の儉にやあ
らむといふ故にそは先生江戸の事をしらぬ故也江戸にては千住といふ
なかの糞とりの娘にても銀の筭より下品なるはなきことゝおもへり銀よ

り下直なる簪笄は御改革のはしめはしらす五十年來みしこともあらずならにてよき町人の中の部かゝや助藏こときの妻は五十兩以上之頭飾ならては衆人指さして亭主の吝なるを笑ふ也わか吝なるも下女共に時に寄二三兩の頭飾をもてもある也といひたるに目をみはり舌を吐てけしからぬ僞をいふ人かなとおもふけしきにてしはし無言也きけにもいにしへより夏虫氷を疑ふといふそまこと也ける惣ゐいにしへのこと余國のこととくとおもひはからねはしられぬ事也奈良人はよき町人の娘にても遠方よりみれば緋桃牡丹のことくなる粧なれ共みな木綿にて笄簪に二匁五分以上なるはまれ也銀なかしの花簪に紫の房を多さけたる類を夥さしかさる也夫にて上かたの儉おもふへし江戸の人これにて江戸の奢の不宜をおもふへし

○十五日 晴 きのふひともしころ空より狼煙の銀星のこときひかりもおち來りてなら町の南方へおちかゝり凡屋根より三四十間はかりもあ

るへしとおもふ所にて消たりいまたとまりからすの飛行もありしころなれは全く夜中ならず勿論十四日なれば月もあるにそのひかり如右よほと物なるへしみなくみたり四五日以前をかゝること兩度ありしと也一度はよほと光にて輿力の中條良藏といふものゝ宅へ落しことくみえ火事也とて近邊のもの欠附たりよほと事之由也江戸にてはいかゝひかりものはなかりしか承りたし右之光り物は南大門の能の見物所は南方をかつらき山の邊まで見はらす高き所也そこに我はみて与風はな火の流星かとおもひ見居りし也もとより花火ならず家來共もみたる故にまきれもなき事也いやなる事也

○十六日 雨 紀州御不快に而京都を醫を被召たるよし或は當月六日の御出立も御延引のよしなど風聞すまことにや○能見物にもと瀧澤の家來なりし源七來り我去年銀七匁目に米を夥しく施たりと風聞するかまことかなと民藏に聞て其序に咄たるをきくにわかことを五泣百笑の奉行とい

ふと也夫はいかにといふに錢か取れずして與力同心なき公事宿に滞留の
ものなくて宿やなき大法師の謀計するもの御仕置になりし故にみなこは
かりて謀計をやめてなき博奕打嚴敷故にこれもなく也よろこぶものは百
姓也盜賊の穿鑿嚴なる故に盜賊少く其外公事出入事正敷なりし類品々あ
りて百姓并市中には笑ひをふくみ悦ふものもある故にかくいふといひし
と也施しの事は内々にて惣年寄にくれ遣したる事なるに夫々の評判する
とみえたり大法師とは公事師の類悪方かきといふものにて山師の事也公
事を拵たるものは滅たる也夫は年はしめに先年わか調役の頃見込扱にて
手を懸たるものありて白洲に而汝は暫逢さりき今に公事師かといひしに
不存よしを陳する間しらすとはいはせず伊豆守か寺社奉行の時我たし
を受しをわすれはすましといひて直に入牢にて追放にしたり夫々つゝき
て金公事の取拵の召仕其外四五人嚴敷したりしに其後は願出ものに夫等
之類は絶たり御門主は懸御目時左衛門は一見して公事師を見分ること神

の如しといふ也いかにして知るゝや不審也見わけらるゝ傳授あらはわれ
に教へよなど御戯ありし位なれば公事師共は恐たるなるへし與力同心の
事實にきのとくにおもふ也博奕を召捕といふことは絶ゝなかりしをあま
りの事共多ければ追々召捕たることも僞にはあらぬ也

○十七日 與力の羽田半之助といふもの願たるは子育なしよつて半之助
といふ名を改たしいかに名あらためたらはよからむに字を願はくは教へ
たまへ祖父も半之助なりしか改名してのち子供出来たりとて願ふ也可笑
ことなれ共いなむもいかゝとめてたき字を二ツ三ツして半の字の辨
といふものを出て遣したり半は丁日半日などの半にて一三五七九は半二
四六八十は丁也しかるに三々九度などの類都半の數を用ゆること也半
は陽數にて易なともしかり月の弦といふをめて度事にいふも未滿の月の
こと也何事も十のものを六ツ七ツにしてつくることなし至而目出度字也
といふ意をしるして

衰ふることこそなけれ^{ナカ}半とは千とせさか行千字にありけり
と記し遣したり其ことをしりて半之丞と改たりよつて子孫繁昌のもとて
といふものを書遣したり其意はわれこのころ春日神前の能にて福の神の
誑人に目出度事をさつけ給ふ其もとてといふことを金銀米錢にはあらず
して己か身にもとむるの意をとき示されたり子孫蕃昌のもとてといふこ
とを大徳必百世紀といふこと左傳にあるも子孫繁昌のもとてなるへしの
ちの書なれ共袁了凡か陰騭錄に子なきもの三千のよきことをなして玉の
ことき男子をまうけたるといふことみえたりされは子孫蕃昌のもとてと
いふはよきことをつむ事にそ有けるといふ意を即坐に筆とりてしるし遣
し其但書のことくにして今かくいふは昔わか實父の常に陰騭錄をみ給ひ
て御はなしありしを覺たるまゝに記しぬといふこと記し遣したりこれは
袁了凡か歴史綱鑑の論などの躰にては善惡の差引勘定することき人とも
おもはね共既に其書もある上は夫によりて人をして一善をなさしめむと

のこゝろにて記したる也○けふ白洲にて無宿を吟味してみたるに一昨年
天狗につゝまれて一日所々を歩行其上に疵をつけきん玉を半分とり持て
歸したるといふを吟味したり與力共にあらためさせみるに金玉二ツのう
ち一ツならてはなくかさにて腐しとはみえすといふめつらしき事也

○十八日 晴 俊藏方へけふ市三郎馬場より歸りに行みしに榮小兒居た
り市三郎の來りしは下女しらす手拭かふりなから來けるを小女みて速に
手まねをして教へて手拭をとらせたる差働一向氣のつかぬ市三郎さへに
驚かるゝとて歸來りてはなしたりこのほとむしバのいたむとて何を遣し
てもたうへす其おとなしきこと實におとろかるゝ也いつれに十四五歳の
才氣也けしからぬ事也乍去大人をきりつめたるかことくにてあまりにお
もふもおさとゝ常にいふ病など出さる様にいたしたきもの也万々一のこ
となとあらむにはそめは忽に死にもし俊藏も狂亂すへきかとおもふはか
り也右之少女此節百人一首をよむ也其内に風をいたみ岩うつ云々とよみ

明はれつるを記
せるはかりの底く
なくたりたるは
かくれりことし
其人五十年の
歴にあり人々の
て我にもよめとい
ひけはかむとい
ことなにかのひ
つれにににかき
もよきしる
のあとに
と記し置たり夜
五時頃ニ本ノ下ニ
テシテ下ニ
しるす

七人も死せしよし夫故にみなく、恐るゝこと夥しわれいふ人間に死するといふこと元來はなしあらはれて下なると易にいふ氣と理とのたかひにて人間の五躰は死すれ共躰に附たる人の人たる所謂の妙理は死することなし夫ははなの開落のことしはなに開落ありてとしく、に同しすかたをあらはすをみれば元來のはなたるわけのものに開落なければ也明儒高舉龍なども其つもり也よつて彼流の人死を潔くしたり既に法華經にも方便現涅槃而實不滅度といふも儒佛みちを異するとはいひなから同し姿に聞ゆる様也とて歌をよみたり

人の世の姿もかくやちれはおきおけはちりぬるはちすはの露

○廿二日 くもりさむし 昨夜宅狀來る先以一同之御無事母上少々御不快なから格別の御事には無之候由恐悦之御事新右衛門日記之内廿六日董其昌のかけ物被見候而疑のよし尤至極也江戸を出候而後は在方に米庵詩佛文晁のときものにも真跡百に一あれはめつらしき事也夫に而も西

土の人有名の書畫真跡のなきをしるへし大名に趙松雪の畫なきところは少くあれは七八はみな馬也可笑事也或人いふ趙瑞圖にかきり真蹟あり夫は明を亡したる魏顯忠の書記同前の人にてありければ人々いみきらひてみるものもなし文筆にはたけたる人なから餓死同前之事之由夫故に賈物するものなしと也世に村正の贋なきと同しことなるへし○太田攝州寺社奉行見習被仰付たるとの事扱々目出度御事也備後守殿の御悦おもひやらるゝ也備後守殿此ほとはいかにやあらせらるゝよく承りてよろしく御申上可被下候我におゐてもまことに大悦也攝州の初のほりをみせられ候而其節攝州櫻田のやしきにて大醉にてはてくは終に役人の宅などへ行たり備後守殿二十四にて寺社奉行と覺たり攝州も御同様かとおもふ也いかゝ役人書役には品に寄わかされる人もあるへし攝州の見習近來のよろこひ也攝州の先代廿五われ廿三の時よりの御懇意也御老中に被爲成候而も必御宅へ参り御逢のなきことなく以前の通りにて御待せなさるゝことな

朱子文集跋
東坡帖
爲世多寶
藏者與余
有先車
德與詞意
超然觀者
飛動之能
問或疑之
余亦不辨
朱子與東
坡七十八
十年之共
如既
に實物多
しに物所
朱實物多
も人實物
いひし物
辨するも
不能とあ
は定かね
はるるの
えたりと
竹るに東
にの世に

かりき可惜御人也夫をおもひても此度之義を大に悦候道淳と申候は備後
守殿御事歟御法林等に被爲成候哉承りたし○本多中務大輔殿之くらの御
目き、驚入たり一々御尤之御事と感歎不少候道禪のかた眞田より圖にて
参りたるによりたれば必よからぬ事なるへしよつて實物のよき物を借用
候而相直し候積與力の申付候而實物穿鑿を今日申付たり○藝に入用かけ
らるゝも 公儀の御惠と御尤也此ほと唐番を買置候而いろく書候度こ
とにいにしへの人沙へかきたるといふに唐番へかくはとおもひて御同前
に奉存也去年四月頃書たるものを与風見出したる所驚はかり今よりもわ
るしよつて大に嬉しくおもふ也としはとりても文事はいまた少年なるへ
しとよつて大に別而養生をはしめて末永く修行する積也○北條之出産目
出度候○馬之事先便にしるし置候
○廿三日 晴 此已前母上より賜りし御書に左衛門尉はならへ行て大物
を以突といふかとし五十に近くなれば大物を以突ことはこゝろせよとの

多きは朱子
にそや朱子
の跋を以て
わがことぬ
し偽ならぬ

筆をフンテ
よむるは
文手の訓也
至多しこと
選多し和言
なと多し和
この人多し
流るるに書
り古言日々
に失言日々
也

御事也謹而奉畏候大物と申候は近頃つくれる大棒大鍵のことにや外に大
物と御沙汰を可蒙ほどのものなし絶倒

○廿四日 易に類豕牙吉といふ訓をふるく道春點にタケキイノコノヘノ
コサクとありしかと覺へ今の後藤點と違ひふるき兩點の五經は大内本と
て昔大内義隆のからへ遣して和番へすりて素讀本になしたるか多ありた
るに道春のふるくつたふる辭を以點せられたるものなれば古言多ししか
るにへのこさくとあれと實は翠丸をさきてとりしにやあらむ其わけは西
洋の馬翠丸を去りカラフトの犬又しかりからの奥へ立入る官人の宮刑と
いふものも陽物をきりしにはあらずキン玉をとりしかとみゆ既に其こと
西洋人の記せし支那行程記のうちにあるしと覺ゆ陽物をきりても男女の
みちにかはりなし其證は脇坂中務大輔殿寺社奉行之節女犯僧某赤坂のも
のに廿六七歳計の薩州出生之ものと覺たり其もの立派にラセツして有
なから戒行難持女犯したり不思議に付相手は赤坂田町之隠賣女故詳に同



心より爲承たるに人道の通するは決而無相違よし申にも符合して其僧は
 落涙して歎たりきされ共矢張遠嶋に成たりよつてへノコサクといふ訓い
 かにとおもひ居たりしに當月召捕たる加州高田村之内三倉堂村といふ所
 出生之無宿佐右衛門といふもの法隆寺村に借宅して指物屋をして居りし
 頃四ヶ年以前六月日不覺朝隣家佐吉といふもの、聲にて只サア參ラフと
 いふ聲いたし候故与風表へ出候處高壹丈はかりの黒衣の僧立居夫に何と
 もなく被連候而處々歩行歟と覺其夜八半時頃に歸り來りしに右之方之畢
 丸なく夫而已に而外に別條なしといふ故に右之宮刑のことをおもひ出て
 牢内のことあつかふ長吏より委細聞かせたるにいま廿五歳はかりの男
 女色の氣ありて度々其場にのそみたれ共一向に陰莖綿のことくにてトン
 と仕かたなしといふよし也されは前のこといよ／＼たしか也日本には宮刑
 なければ事實するへき様なしよつて戯めきたれ共詳にたゝしたる也至極の
 道樂ものと一寺住職みな天狗にたのみたきもの也きん玉をきられては必死

この時手桶
 の水さけ給
 ふことな母
 上のなさを
 つけぬにけ
 つかみ下け
 くみ下けに
 二三日間に
 半は子ほに
 たりは子供

するといふに死なざるは不審也とていろ／＼人に問ひしに或人の申せしは
 某か知る人に与風きん玉をきりたるものありしに夫かくされは死すると
 人のいひたるに折節殘暑強ころなればこまりて不取敢そこにありし虫か
 こに入て風のすゝしき窓へつゆ置たるに夜ふけ人静まりて物有聲を發す
 る也よくきけはキンキラレ／＼といひしと也いと／＼無覺束こと也

○廿五日 晴 市三郎寶藏院へ行たりしに江戸はなしに成江戸の道のし
 られぬといふことはなしていろ／＼笑たりしといふ夫を之はなしにわか
 御實父 行道院様御浪人の時下谷々牛込中里町の同心の地面のかやふき
 のいか、成賣店を買御引移ありし也これは文化三年也しかるに其翌々日
 と覺たりわれを御つれ寺町に而御買物被成夫を爲持予をはそこより御返
 し御自身はいつ方へ歟いらせられたり予酒井の矢來下の横みちへまかり
 しか道しらす歸るさを失ひて泣居たりしかるに刀を帶し鎌を手に下けた
 る人通りかゝりいつれの人なりやといふ其時とても父上の御名申てもし

こゝろに御
手も申上
つてもり
かへりて
居りてな
御事な
上は御
事に御
事な御
候よせ
す母上
苦勞の
記す恐
し勿體
御親様
わが爲
に御苦
しこと
しと知
る余の
へお

らし地主の名はしらすよつて矢來下の同心に塚本政右衛門といふもの有り其ことを覺居たりしかはそこへつれ行くれよといひしに其人は其隣へ行とて送りくれたり幼年のこと故はつか二三町のことなりしかいたく困りてよく覺居といひ出て指を屈しかゝなへみれば六歳のとき也以上のこゝと少も虚言なし母上も御承知也然るに太郎今六才にて予前のことにあひしと同年也太郎はかゝるめに逢し祖父のことをおもひて何卒母上の嚴敷御叱り新右衛門なども嚴敷叱りくるゝ様にたのむ也今の氣にては六才のものに買物をもたせて知らぬ道十町計の處へはやりかたきかことくなれ共前の如し予父上のわれを愛し給ふこと莫太にてよるゝ足を五百ツ、つかみ給ひしと也そは二ツ三ツのときのことのよし早く成生せよとの御こと也と追ふゑ御はなしに承りきおもひ出ても勿躰なき事也其御愛子にても嚴なる御質故に御叱りも嚴敷扱常の御取扱かくの如し誰かしらむ今の結構其時にモトキ基せしことを夫をうら反しておもへは太郎等か成長の後

一に向役にたゝぬことゝなり且は冥利果報につきはつへしと歎息する也けふ論こゝにいたりて其時に父上も母上もわれ遠國奉行になり諸大夫に歴昇り高貴の御人と親敷御物語すへしとは思召さじとおもへは奈良に何年居てもうしろくるしとはおもふへからさること也と旅情頓に消てこゝろすかすかと成たり何卒太郎をは嚴敷して一ツ打ッ頭は二ツツ、御打被成たく候われか彌吉などをそたてしはさてゝも甘過しことゝけふおもひしりぬ○廿六日 くもり 石河よりいろゝ深切のこと申越たり其返事之末へ石かはやせみの小川のめくみ得てこゝろすゝしくいつみそきせん又いろゝ取揃てとし玉をくれたれば

なら村はまた冬かれを玉ものゝめくみのつゆにはるはしらるゝと書狀の末へしるして返書遣したり○淺野よりたのみにて古瓦十六種遣すいろゝの品あるもの也○石燈籠に三百年四百年位のものいくらも賣物にあり十四五兩もするなるへし好める人は買て江戸へ廻すなるへし江

戸にては日光御門主の御茶室に明應年号の石燈籠をみしまゝ也

○廿七日 是れ けふはしめてのとか也乗馬いたす馬をのることまことにいや也馬は病後大によはり力減したり其上馬をみれば彰常のことをおもひ出てこまる也老馬故にのらぬといとゝわるくなる也市三郎などあらくなく蹴つけて鞭を持乗れば元來足はよき馬故によくあるく也足は今もよほとよし可惜事也○古梅園のすみからにても賞したるよしにて古梅園墨譜のこと新渡本にあるをみてかくよみて遣したり

これも又ならの都のはなならしこと國までもめつる梅園
ならの子もりうたに

いかの上野の新七さまはわらでかみゆふて五千石

といふことありをおもへはふるき御書付にいにしへは御料所百姓共わらにてかみをゆひ繩を帯にいたし候處とある御尤なることなり新七は則藤堂新七なるへし武功有名之士にてわか甲冑など其人の所持之目かたにく

らへて作りし也其頃にても目にたちし故うたひしなるへけれともされ共わらにて髪をゆふといふにて其余おしてしるへし二百石にて士四人馬貳疋中間六人ありしといふむかしかたり偽ならぬことなり今に公家のうちひもにて髪をいふにても今の元結といふもの後のことをしるへしもと結ひの立派なるは鴈かね文七といふ役者より起りしと人の云を聞きまことかわか書物にてみしにはあらず新七のうた醫者柳介はなし也

○廿八日 晴 月次を禮受ること例の如し○續日本記にうたかきといふことあり古事記にもみゆいかなることかとおもふに今の盆おとりの類也其おとりに 天子の皇子もいらせらるゝとみゆ江州にて盆おとりのうたに盆にボ、するは天下の御ゆるしといふ也淫風の極也とおもひ居たるに万葉九に筑葉山にてうたかきの長うたあり夫に人つまにわれも交らむわかつまに人もことゝへこの山を牛はしかみのはしめよりいさめぬわさよ云々とある意はなはた江州の歌に似たり周禮に中春の月に男女を會す走

るもの不禁とあるも聖人の御ゆるしなるへし

○廿九日 雨暖氣也 おさと當年けろくの再度也尤はしめは輕かりしかけふはなみもおさと此ほどの躰ならへ來り三四年朝われ棒をふりやりを遣ひ居合を抜夫より二百篇以上飛はねをする也其飛はねの音にて起る也夫をひるかれこれとして居れ共あまり機嫌なる日は少しきけむなれば市三郎へいたつらなといひ居る也日くるれば御隱宅へ參り御酒をいたく也盃に二ツ或は壹ツ半より三ツかきり也夫にて少々元氣のつくときもあり却るよからぬこともあり夫より巨燧などにあたりてわかねるをまつ也われ風邪にさへなければ必四時に仕舞也夫より直にねる也市三郎もおさとに同じ時候あしければ二人なからころく也これを小石川養生所と号してわかいやかること也市三郎に書物のはなし曾あなしおさと、は少々うたのはなしなとする也このほと語言概略といふものと古事記余論といふものを書はしめて夫にときく珍らしき説あれ共はなすものなしよ

つてはなすつもりにて書物につゝる也日々大かたは此通也此ほとみれば以前よりよほと書ためたるものありて其内に古傳通鑑の評といふものは彰常か居たらは清書させて文章の論もありらむなれと不幸にして短命也なら抱の榮吉にいひ附たれとも曾あせず其外易の講釋系のとりかたの覺四五冊ありいづれも人にみすへきものにもあらず子にも甥共にもよみてなければ相談もならずよつてきり破りて紙屑にいでてこれ又段々と書へしやなとおもふ也けふらも御用少に付ひる後は夜食もしらす夫らのことにかゝりはる雨の日を短かくおもひし也友たちといふは書物と筆也はなしは書狀日記也市三郎いまた和本の字典をたのみてくり出さすることかならず尤人は少々よくなりたり

三月朔日 晴さむし くらのことよきくらを手本につくらすへしとて聞合たるに革工伊兵衛織田丹後守によきくらあるといふことを聞出し來り

たり與力に織田の家來に縁者ある故に其ものをもつて一覽をたのみしに
家老用人立合にてみせたるよし其宮のうら書をうつし來たり

此鞍伊勢駿河守貞雅所作也。吾祖如菴有樂慶長關原之役從於 東照公爲
軍務時跨此鞍。適遇於石田三成軍將蒲生備中。交言于馬上。以刀接戰。備中刀
伐有樂鞍後。々々刀痕猶存。從士千賀又藏以槍突落備中。獲其首也。夫鞍馬上
之牀也。雖有名馬。然鞍不正。則進退周旋。難得自由。況能致千里耶。伊勢氏世傳
所作之鞍其利尤奇也。故稱之爲此鞍自有樂相傳。世爲家珍。余因紀其來由。
示之吾後而已。寶永二年龍集乙酉孟春十二日

長清謹記

今より六代前也

とあり刀痕あと輪にありてはみくるしとて塗けしたると也。大將のことな
れは一向にくるしからぬに可惜事也。奉行よりたのみに付作人をさし越候
は、則坐にみせ可申候。去乍門外不出の重器故與力にはかすことならずと
の事此宮書にては尤の事也。全々作人ならば麻上下にてもきせてやるへけ
れ共穢多故に何分やることならずよつて少々工夫をつける積也。上かたは

穢多非人の取扱かた丁寧也。長吏などに劔術の遣ひてありて宅に稽古同道
あり捕方のこと專に引受る故左もあるへし奉行所々來るにもみな手下迄
一刀を帶する也。凡の勢ひ町同心位のもの也。肴やなとかけにても長吏をは
苗字附さま附也。長吏はことあれは同心に差添て一刀にて數人出る也。奉行
所にては直吟味を節繩取也。風俗のかはり如此

○二日 晴さむし四十五度也 奈良町に某の町人ありむかしはいと貧か
りしよし其子の家つきておこたらす朝夕に物商ふことつとめければ今は
ならにて一二を争ふものとそなれりける。然るにあまつ神の御めぐみにて
父もは、も七十に過て身煩ふこともあらず日ことに酒のみくらして遊ひ
けるとなむされ共諺にいふはとはたかに成ても尙眼あかしとやらむにて
其老たるものはむかしのさまにてときは乞食非人のこととき輕きものと
も親しくものいひてをり、はそれと友垣と隔なくくたはらむとするな
れと今はみせのことあつかる伴頭とか唱ふるものも二人とか三人とかあ

りてそれらもならにては人かましく物いふもの共なりければ其いやしきさまをいたく患ひかゝる家にしあればそはに遣ふ女のたくひまでもまめたちて其ことなといふを老たるものゝいきとほりいとくはけしくてはてくはその女はわらひて酒の酌せすかみたる人に向ひてなめけなり酌とるものはたとひいかに老たるおのこなりもわかきみやひ男とたはるゝことくすることそ禮といふものなるになといかりのゝしる故に女共も夫に困し果て夫らのことよりとるにもたらぬことにてめし遣はるゝことをいなむによりて其子か方に遣ふものを侍らせて其氣に背たるものをよめか遣ふにいとくよし其頃は又前の引替て侍らせ置女あしくなりていみきはるゝこと甚しそのときに成てわか方へはよからぬもの撰ひてこすかとして怒るとなむわれ其ことをいろく詳にきくに笑ふことのみそ多かる只其うちに一事ありある人將棊をさしてわか飛車角は桂馬のふみとをしといふ手にあひ或はフに逐はれてあれ共なきかことくなるにそこの

飛車角は早くなりてよくはたらくこれ全こまのよからぬ故也わかこゝろをつくすに動かぬ飛車角はこのしれもの也とて相向ひし人のこまをとりわかものとし又將棊をさすに又前のことしいくたひしても同しことなりしと也凡天下を治むる時よからぬ人もあるを上にたつ人其人なればみなよくなりて忠臣孝子のことしこれ將棊のさしてによること也堯舜の民も桀紂の民も一ツ民なるに其趣を異にするはみな上壹人のこゝろにあること也つゝしむへきのことならずや夫を以おもへはなら市中のものはみな堯舜の民也しかるにわかこゝに司たらむうちによからぬことの多かるはみなわかつみにて民に少しもとかはなき也しかるにそれをかれこれといふへきことのあるへきやと前のはなしよりわかこゝを治むることにこゝろつきていよゝわか不行届故に御仕置に成も多しいと恐多とおもひしりし也天下の事かゝること多し明智光秀なども春日の御神の御家來ならは定而今頃もよき大名にて子孫あるもしるへからぬ也

大坂役人村
の多岐申付
の地共積多
の呼寄甲費
のく並外へ
の行其外よ
奉り行大長
崎之奉り居
屋も参りく
是よりも餘
は三枚餘
は三十枚餘
と六日に朝
禮に來れり
鞍下直に
鞍下直に
共仲問に
何分不承に
に何分不承
とにて高料
も高料也

○三日 雨さむし 上巳之禮受ること例のことし兩御隠居様へ御酒奉る
 ○きのふ夜五時頃に二本松之旅人四人四郎を尋來れり家内之ものに逢ひ
 て四郎か死せしことを聞て驚て且神社まうてするものなれば直に歸らむ
 といひしを順作方に聞附而同人の長屋にまねき四郎かことはなして詳
 に聞に四郎はもと二本松の庄屋にて世は弟に譲り江戸へ來りしものにて
 四郎か娘はきたりし旅人のうち一人かよめにて殘三人之もの内に順作
 かつきからのものもありて順作か方に酒くみかはし歸りしと也四郎
 か弟今はかなりなるものなれば十兩はかり之義は直におくり可越と約し
 行しと也四郎か娘四才也我引取て世話をす積也され共先ツ親類共引
 取之義は表向達したりわか子は死して孫は弟之世話に成わか家來は死し
 て子をはわれ世話をす也太郎等か新右衛門之世話になるによりてもな
 か 四郎のみなし子見捨かたし○新右衛門之遣したるくら廿兩其以前
 廻したるくら十六兩之直段に大坂にあられたりあまりに高し今われよ

り申付れは新右衛門之方江戸運賃共に八兩以前之方六兩足らすにして出
 來る也新右衛門之くら塗をさするとき江戸の直段何程位のものなりやと
 くと聞合て御申越可被下候此こと此次之たよりまてをまち申候大坂の直
 段あまりに高し可疑具足なと胴其外にて十兩はかりにては造らする積之
 處扣に造れるまで買手附別に二領詔たるものあり其外所々より申込もあ
 りしとて穢多大に勢を得たり乍去高直に追々なるへくとおもふ也穢多の
 身分をたしみるに土藏の二ツもあり外に湯屋の株をもちて兄弟三人小
 荷駄馬の道具をつくりゆたか成もの、由しかるに去年よりのりくら甲冑
 の細工になりて評判もよろしく殊の外喜ひ居るとの事也
 ○四日 晴 御用日境の與方共之内組之與方と親類ありて來るによりて
 中野より鯛をくれたり壹尺五六寸もあるへしめつらしき鯛也途中までは
 ね居たるといふ左もあるへしよつてさしみ又はうしほにつくりて兩御隠
 居様并用人共にも酒を給させ候一同大悦也中野も七十になるとて狂歌な

として越たり其内に

われも又鬼をためしに福はうちさかきにとしをとりの十七といふことありたり

十七を若かへりてそとりのとし鬼もためしにきかぬすこやか

とよみてやりたり三笠山の松をはちに植て夫へ

七十はふもとなりけり万世も君か齡の三かさねの松

とよみて松へつけて遣したり

○五日 晴少々暖氣也 此節所々之旅人大和めぐりのもの多く來るならも少々にきやか也○春水のきゆるは陽氣の地へ段々みつる故に下よりきゆるといふことを明人の説を一わたりにき居たるか池の金魚にておもひあたる也さむきうちは鯉も金魚も一所になりて池底のくほみをうかちて夫にしつみ居る也其邊は温なりとみえて氷至而薄しさて土之暖氣みちて氷らぬ様になりてはみな散亂して食をもとめあるく也され共水上へ浮

かすこれはいまた水上のかた冷なるへけれ也暖氣に成水上まで暖氣徹り日かけも又暖なる故に三月下旬より浮歩行也冬は四十度にては氷る也はるは四十度にては氷はすかたはかり也○ならの堂社案内といふもの旅人をあさむきでいろ／＼のことをする也甚敷は旅人の欠込訴なとするいかに製しても不止よつて工夫をして旅人宿ははり出しをさせたり旅人をあさむくみち案内あらは早々可申出直に召捕よしを所々へはりかみをしたり○興福寺之境内を三笠山より一乗院宮の御庭へ御引なさるゝ水道なかるゝ也夫へ小便をし或はくみてのむとしらぬ良して居て与風見附たる躰に而以之、外之由に申成しいか様にも可取計銘々百文宛出すへしなといひて欺取也其外 禁裏より今日被仰付たる御祈禱ありなといひて其御品なりとて何にもあらぬものをみする故に出舎士は平服して拜みのちに偽なるよしを聞て大にいかりてさわくなと常のこと也○なら市中へ之施しの金伺之通御差圖相濟候間右之分を今日より施す積にて大病人或は極難之

ものあらは可申出旨をも觸たり年に二百人だけは永世施さるゝ也難有事也われ貧人施之事は兼おもひ居たりしに出來て大に悦也

○六日 晴 御用日ならにては御料所は百姓共出訴之節役所を添切手を出し夫を目當に取上る也私領之分は村役人之奥印有之分は取上る也よつて出訴之みたり成こと甚し差添人之村役人といふものは郷宿にて日備を買て出る也奉行所之門前町に印形をうることも家々也夫故に返答書に其偽を被申立御仕置に成もの年々あり右に付來る十八日之訴狀は奥印は人別帳と突合する積其上にて取上る趣を心得として郷宿に一昨日申達たるにけふは出訴至少しいつも五十口ツ、もあるにけふは十口也これによつておもへは常にはけしからぬ偽をなして出ることゝみゆる也人別帳持參して夫と訴狀之印形符合する上は取上るといふも元來簡易之かきりなるに夫に右之如し上かた筋の等閑なること知へし京都にては差添人は一白洲百文ツ、とかにていつるよし也ならにも差添人に出る定式の顔

ありされ共夫等は先大目に過す也都筑金三郎はなしに上方之こと異國へ行し積ならてはつとまらぬと常にいひしかまことにしかりをりく御
膝元の正敷を見覺居るヲクビ出てこまる也

○七日 くもり 西本願寺末なら承教寺に居る長州僧晃嚴といふもの天文に明にして遠目鏡をよくつくるといふことにて一乘院宮へ被召たるとの事に奉行所にも呼みずやと與力らの申に付呼て天文之器の講釋するを聞たるに大成三間はかりの遠目かね并一度しかければ數十年仕かける不及といふ時計并須彌山を中央にしてつくりたる時計夫をいろくにし近くいふときは地球と渾天儀を見合てつくりたるものゝ如し右をもて日蝕月蝕其外共に手に取ことくしてみする也それによれば來亥正月元日夕七ツ時より日食四分也といひきめつらしき才子とみゆる寺社奉行所にも先年調になりし叡山の僧普門といふか佛國歴象編といふをあらはしたる其孫弟子にあたるといひき普門も時計に仕かけて見たしといひしはか

りに器は出来さりしかこの見殿工夫に出来しといひきまことにや
○八日 微雨 一乘院宮東大寺のさくら御遊覧にて樂人共を被召連御遊
ひありわれにも参候へとて東大寺より二條宰相を以被仰下たりしかるに
きのふより少々風邪にて勝南院けさ見もらひたる事もあれは其こと申て
實は大承氣湯を給たれば瀉して只今は参りかぬるよし御断を申たり一乘
院宮のかく仰らるゝ難有もかしこし

○九日 雨 朝飯給居たるに庭をみれはいさゝか白またらなる大成狐居
たり人をみて大に恐たり四方土塀なるにみるに塀へ上り逃行たり庭の泉
水に居るをし鳥を取に來りしなるへし去年をし鳥もかも、狐にとらるゝ
こと多きこと也御役所の大書院の椽の下へ子をうむといふ也をりく深
夜に近く來りてなく故みないやかる也○今日奈良中へ觸書を出し幼にし
て親なきものとし老て獨身なるもの并貧人の出産長煩ひなどの類は已來
奉行所に可申出夫々手當を可遣旨を申聞かせたり○ならに九十二才も

の兩人あり夫の生涯壹人扶持ツ、遣したるにいつれも身上かなりなるも
の、由男の方はもち一備母はぬか袋一ツ爲冥加われに差出度旨申出る故
にわれ實にもらひたしなれ共これより流弊してはならぬ故に断る也實に
もらひてくるしからねとも無余義故とよく断遣したり

○十日 曇 二月廿七日之書狀昨日來る一同之御機嫌克と之事恐悦之至
也母上の御賀にうたよみ奉り候へと之御事奉畏候十一日遠乗として新右
衛門御出之由羨しき事也遠乗は武士の第一の事也いにしへは御旗本に遠
乗の上手ありしと聞也新右衛門などはなくさみの遠乗一兩度にてよかる
へけれども鐘三郎にはよきつれを撰み屢遠乗ありたしわたし場船中の取
扱より細きはしを越ること其外共に武士の心得遠乗にますことなしとい
ふ也其こと沼田先生の騎格順道に詳也不案内其外にて大に困りし例を多
くあけあり今は馬のみち中次といふものゝ手に落て第一に馬場にて足を
面白のることを專とする故に更に實用をしらすまことか馬の師に買と賣

との事は上手なれ共カマサシ繩の遣ひさま芝つなきもしらぬものありといふ也何卒夫等之事はよく聞置たき事也遠乗にのるましき馬かけ出し或は横へきるゝとめくちあしきなりつまつくよりも可恐人をふみころすと大事也人を踏こと細き小路より駈出来る子供或は老人などに不慮に行あたりたるときは馬を引とめて不動して居ること第一なるに互によけ合よりあやまちで踏にいたると先生のかたられき酒をのむ若き人いかに上手なり共道つれ決して無用也遠のりに甚しき過ち多きことを沼田先生かすゝあけられたり前の日記にも記し置たりしか其後否不相分候此節中務大輔殿のさと附々家來をたのみて一平次殿の著述の書かり寫可被申候大に益あり彰常存命中教へて馬も月に六度位つゝ遠乗してけふは十里半此次は十一里といふことく同じ馬をのると馬もみちなるゝ也遠乗は必だく足にて首をさけさせて右の足をたしかに左のかるくなるこゝろにてのるといふはなしを聞たり彰常遠乗の友に田中一郎右衛門をたのみ置て雨

ふり雪のときなと殊さらに出したり可歎二人ながら北邙の塵となりし也乗切は十か三四其余はだくと日記にみゆ尤なること也十八日の條に馬の師に革鞍をみせたとの論一々尤也きのふ慶長十年の銘ある螺蛳の美をきはめたるくらをかり出したり夫を革工へさけて修行にかゝらせたり新右衛門のはしめのくら紋を附ることはやめにして惣年寄の時にては日長たよりにも返し候は引替て可遣あの節は革工も未熟也き肉合其外共に十分にして手本通りにいたすへし大坂にて高料にうるゝ故に一向に損なし且手本にもなる也くれゝ其かたしかるへし馬具の類馬具屋又は師匠へ投にてたのむことわるし損徳はいさゝかなれ共職人の直手合ならずして理を究むること不能大に損ある也職人に直手合をして素人の功者にきくにてよし人により後悔することあり予今にいたり其覺あり泥障力革等々類其表の直段御申越圖を添被遣候は當地にてつくらせ可進候革のこと段々しらへみたるにけしからぬ事多し力革などは巾ひろの革にてシ

ンなしにて折込よろし江戸の並はみな表はかり也さて余之品は一日にも間に合ともくらと鑑はよきもの少し鑑のこと前便しるす通也決而あさむかるへからす手もとに金子あれはうかとのせられてとんたものを買也其金あれは貧人一ヶ月のくらし也われ後悔尤多しましてあさむかれてかひかぶるは盜賊に逢と同じ金もちの道具賣物に出るとき半價にもならぬは金を何とも不思想して人たのみにてことをする故也實によき道具を三兩のものを三兩前後にて買置は武士のたしなみ也道具にてあさむかるは盜賊に逢と同じ其上に必實用も少なくてのみにする丈大なる害あり尤可恐事也盜賊のときものにやるかねあらは人に施すへし予以前この災に多くあひて今後悔すれ不及也新右衛門に覆轍をふましむるをいとふ故に詳に記す也○新右衛門の日記に一門を賞歎したるヶ條は直に儒者を呼てよみ聞かせ置たり是は宮の御喜はかりにあらすそれを力くさにて御家來共御爲を申すものあれは也奉行も常に奉感而江戸にても御英明を奉賞と申

せはよほと御つゝしみあると也恐入ほとよく下のいふことを御聞なさるゝ御人也御家來の御沙汰共あまり嚴なる故に脇坂を賞して風諫したるに直に御のみこみにて御家來共大に喜び此ほとは穩過候位のことのよし也廿六日條いなり奉納の弓のことおもしろしかゝる式の書物かまくら士の遺法よく講し置たきこと也以前グシ的を孔子的と書あるを其頃日のもと事假名に字の意なきことをしらすして大にこまり松岡清助へたのみてしりしことありき弓のこと古法多くして師傅にいつはり多きものゝよし也いせ貞丈の論あり馬も弓も古實はしらすとも一日に出来ること也され共知らずしてはならぬ也いにしへ石川伯耆守箴の古實をしらすしては打死したるとき外聞あしゝとてよく聞しといふことを其頃の武士大に賞したる事之由也○鐘三郎の弓上達目を驚かす寺もと新家のよく中りし時よりもよしよきあたり也元來のうまれもよし精も出る故とみえたり實に百發百中也眞に驚たり新右衛門の中九分よりよし驚はかりこれもあかりた

り射は六藝の一孔門の人々もつとめられたり甚よし／＼夫よりも甚よきは奉行之招より歸り更に醉たるけしきなきは弓馬金子にまさりたる修行也酒のみのほとよくのむといふは白刃をふむよりかたし孔子も酒にくるしまぬ様になされたしと仰られたるにておもへは凡人にてよく酒をのみて其節を得るものは凡人ならぬこと數等を出しなるへし

○十一日 くもり 此ほと花よし八日に一乘院宮にて被召たるに雨にてわか不參之由を御殘念に思召たるに醫師勝南院に被聞召たるに不快に無相違しかるにしらすして陪從に被召候は氣之毒に思召候由勝南院を御使にて被仰下たり同人のはなしにて詳にきくに八日は東大寺のうち北林といふ寺に被爲成たるよしこゝのはな此節花第一也高サはいか程なりや遠より雪山のことくにみゆるよし也枝のわたり十四間余といふ大木也其木のもとに所々御休らひ所出來て此北林は庭に瀧ありて亭をめぐりよき庭なるに右之花ありよつて曲水の御宴ありて陪從の人々うた詩或は奏樂な

とありしよし夜に入雨ふりたるに數十ヶ所につりかゝりを焚てさくら御覽にて奏樂樂所之もの共多く參り御門主も數曲遊はされしと也このつりかゝりをたくものみのかさにていと風流なることよし也火のいたつらせぬ所故かゝることも出來る也宮は例の夜を好ませらるれば還御はきのふの朝の五ツ時也と也かゝることみな官家の風にて武家にはなき事也御目さめは晝前御近習も夫まてはねるなとけしからぬなること也優長か○新右衛門より筆を銘々ぬくれて忝し早速にきのふ遣ひみしに純羊細大とも別に別段也純羊のかた別而よし細大の方は全唐帯へ六行位の字はよし夫を大成は筆きゝ過て下品なり純羊のかたは十分にて申分なし細大のかた楷書ならばよからむなれ共所謂清朝様行書の外は出來ませぬといふ生なれのめりやすにいはるゝうちなれは筆遣ひこなされぬ也純羊の通にて今一段小サキを一本御もらひ申度候

○十二日 くもり きつねといふものはにくきもの也をし鳥かもを去年

已來多くとりたる上にこの頃をしとりを飼ははやしりて日のくれぬうちより庭へ來りなく也終に又一ツとられたり夕かたより庭より馬場の邊を啼歩行尤可憎事也をし鳥は雌をとられて雄鳥のかなしかりてきのふも夜すからなく也其あはれなることいふへからす八ツ頃より其聲耳につきてねられさりき○所司代御參府當暮歎來年に相成候旨伴金左衛門を内々申來る○幸三郎に月に一度宛書狀を差越し候へと申遣し其外用向をも申遣せとも一向に返事なし參り候は、御催促可被下候不快かと日々案し候事也

○十三日 晴 さむし四十二度也長屋にては薄らひはりたるといふ也泉水などには氷なし霜雪の如し○下掃除のかたにて山を買も、を植附たりこのほと盛也とて市三郎と順作行たり茶はかりとの事故少々鯨なともち行たりしかるにも、山に休らひ所を作り毛氈を敷て立派なること辨當の用意せしとて下ヶ重箱にて酒を出し其器物みな眼を驚す七ツくみの高

まき繪の盆にて菓子盆まで金をちりはめたるとて市三郎大に恐れて歸りたり山を買も、を植其もの、代に別莊をつくるといふ也其倅も二男もみな糞桶をかつきて來る也關東とことなることかゝるにはいと多し公事出入に負てもあやまり證文などは出さす其挨拶とて二日三日を或は其出入丈之雜用を出す也こゝろみなかくの如し關東もの、及へき所にあらす此ほと所々花見とておもひ、に出る輕き人は飯置をもち出し香物位よきはきり干に氷豆腐位にてみなうちよりのしみて歸る也酒は至而被行るされ共喧嘩といふこと決あなし女壹人にて更に子細なし強姪といふことなし錢百文位にて直に相談整といふ也娘の頭ひなさまの瑤瓔のことくなれ共銀さへもなし紅白のふさに屑子の玉とを多くさけたるやき附のかんさし也

○十四日 晴 庭の芝原の馬見所建直しに成御林のまつ丸太之類に惣出來に成たり却而風流也垣根は入用差引に惣惣ねり塀になりて庭の芝原

よくなりたれば芝原にて辨當かりを與力らにさする積に而松葉其外をかた附させみるに今日にて既に四日人数四五人懸り居れ共いまた不畢これにて寺社奉行衆にて下屋敷のひろきを掃除さるゝ入用はいか計なるらむとおもひしりていにしへのことをおもひ不隱徳のかきり子孫貧乏のたれをまきしことをしりたり夫に付又おもふは池之内村を引合村に村入用を勘定出入起りていろ／＼いふ故にきけは惣入用三千兩に近くかゝりて村々困窮に陥るよしをいふ也不思議に付段々聞は地改之節より其外見分に二百日に近くかゝりし諸入用等也被參たる人々におゐて不正は申に不及随分百姓共をいとはれたれとかくの如しと也其吟味中白洲に而与風おもへは江州庄村へわか行しときは二十五歳にて只はしめて御紋附をいたきたるなとおもひしはかりに而民之思はしらさりしか其時も二百日はかりもかゝりたれば定而今般之一件の如くなるへしア、百姓をいたためにき此ことみな天のせめにわれには不來とも子孫には來るへしとおもひたれ

は大に内心ふさきたり其ことおもひながら晝飯に向ひたるに此ほと例の通十七日前の潔齋なれば香物はかりなり夫をおさとの氣のどくかりて梅干などを煮置で給さする也市三郎もこの頃は夫を心くるしくおもふ故にわれいひ聞するはわれ七日之間少もうまき物を不食され共此位的美食は御徒位にてはならず其わけは米至而よしさて煮梅なといふものは親類に病人などあるときこしらへて見舞にやる也中々常に可食ものにあらすよつて汝か御祖父母様のわれらを人かましく御育なされたき計に而御徒のとき御くるしみなされしことをいはむよくき候へ先ツ第一に飯は御ふち米故今食するものに引くらふれば麥のことしさて朝はめしとするひるは香の物はかり夜食はひものか或はあふらけ豆腐位のことされ共菜を再ひかへるといふこと決而なしましてやみりん酒を遣ひ又はさとうをいゝは勿論也先はキ醬油位也され共酒やのシタミ酒といふものをめされ置て魚類なとたまさか煮とき御遣ひなさるゝことめつらしくみたりき夫

に亦餘の食物のますきをおもふへし茶などは三夕の茶は珍客のにはな也
 かゝれは上菓子などいふものは目にみしこともあらずたま／＼よき家の
 法事に大成まんちう來れば天下の奇品也とおもひ居たる也以上のことは
 をかち町に亦の御くらし也夫にても書物筆墨の類に終に錢を御惜しみ被
 成たること一度もなしそれは予に賜ひし書物などの残りたるにてしるへ
 し然ルに其御かけに亦予段々結構になりつゝきて新右衛門も結構也よつ
 て今も母上には御苦勞の万分一をなし奉る也ア、いかにせむ父上は其こ
 とにあひ玉はすさて母上の今はみな御わかゝりし時の御くるしみのうら
 也いとさむかりしとしの翌年はるあたゝかに夏あつく時候のよきかこと
 し夫にうらはらに行ものはみなわれらの子孫也わか常に歎息することこ
 ゝにありいにしへの人鶴匠鷹匠役の末とはよくいひしこと也とそかたり
 きかせたる

○十五日 快晴 いつ方もはなならぬ所なし ○欽明天皇の二年に秦人、戸
日本書紀

この頃日本
 の御威高麗
 新羅百濟任
 那加羅其外
 迄も及ひ三
 韓は全の御
 家來にて采
 女までも奉
 りし也今よ
 りも強こと
 あきらけし
 欽明詔ニ安
 羅加羅卓淳
 早岐厚結
 弟好以爲子
 以三任那
 爲三子弟一
 那以レ我爲
 父兄一とあ
 りかく今は

數惣七千五百七十三戸と有にいたりて市三郎傍に閑居て笑ふ其秦人はわ
 れに過たりよもや一日にはあらし屁數七千三百とはといふ故に正史に屁
 の數はしるさすといひきかせしか左にあらす 雄略帝かと覺たり采女を
 一夜めされて皇女をうみ奉りしを人の子なりとみことありて御受ひ
 きなかりきしかるに大臣たちのいろ／＼と申上るときさらは君は其采女
 を其夜いくたひめさしと申上たるに七たひめしつとみことのりあり其と
 き大臣の御受到に子はやき女は袴の裾の腹にさはりてもはらむと承り候ひ
 ぬ七たひめされし上はたとひ一夜なりとも御子ならずとは難申と申すに
 よりてみ子と定られしことは又日本書紀にみゆいにしへの人の強ことを
 おもふへし今の君の女御更衣をめし給ふとも一夜にいくたひと臣下より
 御尋まいらすることあるへからす又 天子より下百姓にいたるまで一夜
 に七たひに及ふものあるへしとはおもはず日のもとひらけ初しいにしへ
 人々みな雄なれば必一夜に數度に及ひしなるへし夫故に太臣かたよりも

てしらの國ま
へは君とに
仰こと也
明紀によれ
は任那加羅
安羅は一國
なり

其夜いくたひと御尋申上 天子も七度をあやしとも思召さぬなるへしこ
れらは閨門度数のことを正史にのせられたれば市三郎の屁の数もせめて用部
屋の日記にしろして御なら奉行の御ならは子たりといへ共如此とときは
かきはにあめつちと共に傳ふへしといひて大に笑ひし也

○十六日 晴 俄に暖也○きのふ與力共に庭にて田樂をふるまひたり作
事之ものにしたゝみをかしたるに高麗へのたゝみ十八疊をかしたり其た
ゝみを芝間へ敷馬見所へもたゝみをかして庭のさくら馬場のさくらを
みたり馬場に大小のさくら貳拾五本あり其内大木貳本ありよし野のさく
らたねとみゆ最上の山さくら也庭の山かけへ幕はりをしてそこに料理
をしたり随分とあそぶるゝ也こゝにていかにさわきても住居のかたへは
聞へすよそへも聞えぬといふ位也屋敷のひろきことしるへし庭の外は七
拾間の馬場にて其外は高サ三間はかりの土手其上に土塀二重にありて堀
一ツあり小城のこときもの也この節花をみぬは不風流のかきりなれば日

ことに庭へ出て一日に二たひも花のもとへ行なり○近頃としをとりにたる
故か少々分に過るとおもへは酒の翌日氣分少々薄くなるかことし夫は外
ならず酒をのめは血氣めくる也めくる故にいはいはゝ氣血かドロ／＼めくり
をなすかことくになる故に其もとへもとる迄は氣血のめぐり又遅くなる
かことし近來大酒などいふことせぬ故に以前と違ひ酒にあてらるゝこと
なしきのふのことくなるときにてもなしされ共其位のことにはあり以前は
夫位に少のみしことなく少のみては少もかはらさりしか又少々のことには
しらさりつるかいつれとも分ちかたし新右衛門などいかに
○十七日 晴暖氣也 いますた兩御隠居様の御はなの酒奉らすよりてけふ
夕かた右之馬見所にて御酒奉るけしからぬ暖氣もおさとの外はかさね着
のものなし○きのふ夕かたおさとの本箱をみれば遠山かの子といふ草双
帯ありかの柳亭種彦かつくれる戯場かゝりにて大帳といふものに書を加
へたるかこときもの也与風くち書をよみ其巧拙をいふうちに種彦か妙に

劇場のおもむきをかきたる實に無聲の劇場ともいふへし昔ならば二町ま
ち今ならば猿若町へいつしかと遊び行て上手の優人の藝つくしをみるか
ことしこゝは廻りしかけなるへしこゝは出かたりの幕ならてはおもしろ
からすこの勢是非せり出し可然なといらぬ評をしなからよむうちに今少
々とよみて終に夜九ツ迄かゝりて十二冊よみたりいかに後悔すれとも仕
かたなし經義をよみ心を養ふひまをまるに一夜つぶしたりけさ其ことを
いへはおさといふ能狂言もいにしへの芝居ならずやこゝろをたのしまし
むる上は雅樂も芝居の淫風ならむものなるへしなとて其御後悔やあるお
さとの眼よりみれば役人などにも甚敷芝居に似たるもあらじとは定かた
し心と躰とかはりたるはみな芝居也何卒あなたも役人の狂言芝居の場を
まことに御はなれありたし日々に芝居に似たることの甚敷うちにあらせ
られなからしはしの間芝居に似たるものをよみて其後悔つや／＼合點不
參候いにしへより今にいたり芝居の臭氣なき人いかはかりかある御かそ

へ御覽候へときめられたり

○十八日 晴 けふ日本書紀をよみ歎息したるは聖德太子の御ことを聖
人のことく申奉るはつや／＼解へからさること也太子の御兄崇峻天皇は
蘇我の馬子弒奉りしを太子の御ことは推子天皇の攝政をも被遊なから御
誅戮なきはいかなる御ことにや既に守屋の大臣を御うち被遊たる御こと
もありなから君を弒奉るの賊と同じく政をなし玉ひて數十年の末に馬子
より先に太子の薨玉ひたるはいかなることによさて又太子の御聰明神武
にしてあらせられ殊に用明の一の御子にてあらせられなから十二番にあ
たらせ給ふ御弟御子の 崇峻天皇の御位につかせ給ふも是又いかなるこ
とにや馬子の聖德と殊に佛を好玉へる御ことなれば御なかのよかりし故
に君にかへて御誅戮はなかりしか憲法十七條の二ヶ條に篤敬三寶とあり
神國の太子にあらせられなから御先祖の神々のことは露仰られぬといふ
はいかなることなりけむ御君を弒奉る賊を討玉はず御先祖を捨て異國の

ことを好ませ給ふの二ヶ條にいたりては其本源なし聖徳の御号いかなるものにや疑らくは崇峻の書紀には後世よりあやまり傳ふるか或は曲筆多かるへし趙盾弑其君の論もあれはわれらかこときものには不解也

○十九日 晴 きのふ遊學生にて大銃の師たるよし仙石讚岐守家來多田彌八郎といふもの、由大坂より儒生佐々木育介を尋來りて文章一編を出せり其文章の意は大銃に祭る神なしよつて君恩の二字を以神躰とす君恩とは主人は關東の御用に立ッ武術を懈るへからさるとの意也右之文章育介にみせて予に君恩二字を大書してくる、様と之事也其意は仙石一件之獄わか預りて功多し夫に付主家三万石も尙存する也このほと大坂へ來りてわか書をかくといふことを聞たり君恩の二字をかきて神躰とすへきにわれより外に決して人なし何卒しるしくれ候様と之事に涙を流してたのむと之事也君恩二字にて文章の意も可なれば遊學生などに書を遣すはおもしろからぬことなれ共害とすることもあらねは君恩と大横物をした

ゝめて眞僞はしらねとも神躰として關東の 御恩を奉拜と云に号などもかゝれぬ故に従五位下源聖謨としるし外に未向民間貧一錢と落句の七言絶句をしるして育介に遣したりかの學生數多拜謝して直に出立して大坂へ歸りしと也○唐墨製之墨清朝人はいかにいふらむとおもひて長崎の舶人にみせもらひたるに殊之外賞歎して隷書にて奇寶とすへき墨也との詩をつくりて越たり夫を加々屋助藏に遣したる大に喜たり爲陳玄堂大人云々の語ありし也

○廿日 雨 昨夜よりの風雨にてさくらはあともなくちりたりこの頃庭の馬見所へ疊をしかせて日々にはなをみし也朝はかならず行て馬場より庭のはなのもとめぐりてみる也晝後は御用のすみての後はおさと、兩人茶ととくりを携て馬見所へ行て日くるゝまではなをみし也十五日よりきのふ迄にめつらしく花に魂を奪れて夕くれは文をもよまさりきうたをは多くよみ出しかよき歌はもとよりなし馬場には三十本はかりの花あり庭

にも六七本のはなあり馬見所よりは夫々のはなにかすか山のはなくもかと雪かと木の間にみゆる也日ことにはなをみて大に遊ひたりこれは母上の御ほめにあつかることなるへきか庭のさくらははや緑樹と今朝はなりぬけさよりは又もとの左衛門尉なるへき也まだ樂ありいなりの社の藤大木數株へからみ附たるかやゝむらさきのけふるかことくなりたりこれもたのしみの一ツなり○このほと頻にふてをためしみるにきのふ長崎より來れる筆にて書たると靜晨堂の筆とくらへみるに長崎のかた拙く靜晨堂のかた上工にてよくさきのきく也され共其先のきく故に却る品のよからぬ所あり唐人の文筆おとろく也かゝやへ墨の挨拶の詩をみるに長短句にてよき手際也さて印章などもよし外に書二枚書壹枚來る書も何分風韻あり書も又しかり順作など感服したり風土の故かいました文筆のひらけぬ故か大に日のもと人とは違ふこと也乍去つらくおもふに日本書紀の作者安麻呂などいふ人よほと其頃の文章書なるへけれとも其内に凱悌と凱

歌とを心得違居るなど其外おかしきことあり其頃の日本人のことにおもひくらふれば今のかた大にまさりたればとしをかさねはよく成へししかし文章ひらくるほと人はわるくなる也可歎事也過日其ことを

稷契不爲讀書事天功亮得煥乎摸文過人情日輕薄仰看慶元赴々夫

と人にしるして遣したり武七分文三分ならてはならぬ也役者に相撲取學者に武伎の師にて凡をおもふへき也

○廿一日 晴至るさむし 夕かた宅狀來る三月十二日附也母上様御機嫌克と之義其外一同之御無異目出度候母上様之御狀御筆勢もよろしく恐悦之至也右御狀之内に日記若遅く相成候得は御夢にならのこと御覽被成と之義恐入たること也凡十日を以定めとして差上候得共川留其外都合にて遅速出來候故なり右に付おもひ候は新家よりの書狀なき時は御兩所様の御案し殊之外のこと也其さま凡は母上と同じことなるへし子をおもふ親ほと親をおもひなは世にありかたき人といはれむといふことのあるはけ

子孫のため
なすも其害
造なるは其
朝公ともは
殿下也御太
孫如此普天
率士第一の
人其如余を
況や其此

にもとおもひ合すること也狂女を嚴敷と申上候處母上の御返事なきはいかに思召にふれけむされ共嚴敷なさらぬといふは御不仁御不慈の御事かとおもひ奉り候いつれにも狂女のこととは出格に嚴敷あの御ばゝさまは不慈悲至極と江戸中に大評判に相成候位を思食にて三百三貫も下るなるへしこれは並々の御孫の事也まして狂女を少にても甘く被成候は、天理にそむき候間法華經の罰急度あたるへし不便と万一思召候は、上もなくひとく不被成候は決る不相成候天理に背候もの天道さまの罰あたること甚し夫を無理に人間業にて不便かれは其ものに十倍の惡來る也可恐こと也この義は甚しくいかゝの申分に候得共急度申上る也新右衛門よりよく被申上候へ○幸三郎方へ月に一度ツ、書狀を越し候へと申遣したるに不沙汰也内實は病氣などにはあらや新右衛門方へ母上の御機嫌伺として參候は、其廉已後は日記に御記し可被下候弱き男故に遠方別々案事候新右衛門を御役を氣遣ふこと十に八ツ幸三郎の病氣を氣遣ふこと十に二ツ

也其旨よく幸三郎に御申聞可被下候○五笑百笑は謔言なるへしとまことにしかり只永續のためまことをつくすのみ其上は仕かたなし○小人の奢に流るゝをみるは弱きものと力をくらへ小人嶋と丈くらへするに同じ備はることを君子にもとむと古より申候も君子の惡をあけて小人の惡をあけすたとへは谷風は世の中にてまげよゝといふ也一度まければ江戸中の評判也これを以君子のくるしき也潔白にて雪のこときもの汚れやすきといふ老子の語おもふへし○所々に乗馬のよしうらやまし○鴈打のここと二ツかりかねめつらしまことか暑中も白木にて射らるゝといふ也○廿二日 晴さむし けふ郡山より徂徠自筆の政談來る四冊一宮にて平かなましり也小奉書二ツ切位の本也いさゝか六ヶ敷所にはみなひらかなふりあり宿といふなとにことゝくシユクとひらかなにてかな附あり其書佐久間修理かことき手の至る能書のはしり書したるにて微妙たとふへきものなし日本一部の書無紛一二三四とあり部分したるものにて一には

國トとあり四には雜とありて自身老眼惡筆にて認め侍る也上覽にも入た
らむ後は火中有度事なり物部茂卿敬識とありて其末に

もろこしの文のかすく見れとくいつかわか身のか見ならさる

あめにとはむたよりもかもなくしの道をたか代の爲につたへおきぬと

とあり涙の落るかとき書也○革孔子くらに上作の手本とて作くら一ツ借用

のことたのみたるにいにしへより持傳の作くら夥ありいつれか可然とい

ふ故に天正の士のこのみたるをといひ遣したるに伊勢駿河守貞雅作寶永

年中七百貫の證文あるをかしたり至あたらしくして塗立のことし所々

に封印ありて一度も用ひたるものにあらず上箱其外の躰元祖の昌任のい

つ方よりかもらひたるまゝくらに納置しまゝの如し至あ新しき一同肝

を潰したり貞雅いつ頃の人か先達あ日記にある織田家のくからも貞雅なり

○廿三日 晴至あさむし 金剛山かつらきに再ひ雪ふりたり○けふ革工

を呼ていろく鞍をみせたるに彼いふいにしへのくら居木の肉合みな厚

此否此次に
御申越可被
下候

し又居木のうしろのかたあと鞍の付根の邊を多くかけたりこれこゝに力
いる所にてくら骨のくるしむ所なるへしわかこの度つくるくらはいにし
へにもあらぬ居木まで鞍故にいかにまがるとも決あ折ることなく三々五
分の鍔炮など決あ貫徹すかゝれはいにしへの作くらに見合て前後鞍居
木其外共よほと薄くいたし大力のにまけられぬ位につくらは軽く出來下
直に出來て至あ實用なるへきに革の鍛たる居木と木にてつくれる居木と
の差別をして造らするものなき故に革の實用一ツ減せり可惜こと也とて
家來へ向ひなけき行たると也此論尤なるかことし乍去馬術の實用にかけ
て不宜わけありや新右衛門の先生了簡いか承度候○もゝなりの兜あつ
らへあれ共六ヶ敷と云故にわけを聞は甲冑之類は大成石の平なる上は革
をのせて大成鍔づちにて數十篇たゝき附てきたえ不申候あは不相成故木
にて兜の形をつくり夫を以鍛附ては不十分故に出來不申候とゝこと也江
戸の甲冑は多くはふるき皮籠を買來りてつくりたるもの也明珍宗保かこ

ときもセンペイをやくかことくして火にかけ革をいためくるいの出来不
申様にする也南都の革工のする所とは大にこと成もの也考工記に革の甲
冑は二十年といふことありしと覺たり火にかけいためたる或はふるき革
にてはあぶら氣少決而實用にならぬなるへし清正のつくられたる龜の甲
といふ孫子轆轤車ものなと牛のなま皮にてつくること也これを以しるへ
し序に云生革しかるを生革とよみて生なから革を剝などの間違武者或
は俗醫などの論にあること也生膽キナモなどをイキ膽と心得たる誤のはな
し世に多きこと也

○廿四日 晴 おさと此節の躰五ツ前に起出て夫々よるは六半時ころに
御隠宅に参り五半時頃に歸る御酒の御相手猪口二ツも給る也五ツより日
のくるゝまではこたつにあたり胸より腹をなて或はもみ其間はごろく
して居る也二三年已來出来不出来はあれと凡如此われうたをよめは心配
し詩をつくれは心配し市三郎か鴨を逐は心配しかゝる事はみな落涙也さ

れ共飯の數等はかはらす○夕かた順作方に詩歌書讀之即題の會合ありて
ならにて惣年寄の居正或は孝美などみな先生と稱するもの来るよし也六
半時頃に柳介罷出てさくらの枝の下に月ある畫とくものすありてくもの
居を雀の啄まむとして飛居るかたを唐番半切に畫たるをもち來りて讀を
せよといふ故にとりあへすくものかたに

いとさときくものふまいあざりするすゝめもしはしこゝろなすらむ
さくらと月に

暖入香衾曉夢安力眠強起漏纒殘春烟黯淡櫻花月漫作黄昏疎影看。

とするして柳介を呼渡し遣して即題故に印はおさす追而印をおし遣す積
申遣したり柳助にきくに畫題と春鴈如字といふ題を得たれとおもひ出す
といふ故に出まかせに立なから

誰うたを書しるしけむありあけのかすめる月にかりの一つら

と即座に吟して畫題をもわれにさせよ即しるさむといひたるに放屁のこ

とき卽坐に出まかせのことは御免可被下候たとへ口より吐ても錦繡のこ
ときを云積也といひて逃去たり

○廿五日 くもりさむし このほと夕かたには柳助出て古今集万葉集源
氏物語のことを聞也いろく論する也右等々書なかくつとめてよむ
氣はなきことなるに彼らかいふにまかせていろく評論する故に無余義
真淵宣長らかを書を取り出してみる也教ゆるは學か半とはよく出来る人の
ことわれらはみな學ふこと故によき稽古になる也古今の序といふものな
との論真淵の説おもしろき事也われらにも受られぬ事多し真淵か學文は
貫之よりよきなるへし真淵宣長らか口くせのことくに後人のかき入本文
になりたり或は後人のみたりに直したるといふには可疑こともあるにこ
のほと徂徠自筆の政談を以所藏の政談を校合してみるによほととの相違に
て中にはわか所藏本のかたよきとおもふもある也おもふにひらかなを眞
かたかなに直すとき徂徠の男道濟かころに直したるかとおもふ也鈐録孫

子國字解などもとはひらかななるも知へからすなるほと後人の爲に古
書の災ワチハヒを受ることいくらもあるへし政談にておもひあたる也百年前のも
の如此況や千載の書をや

○廿六日 晴 此節さむくして時候至るわるしおさと例の通げろく也
市三郎庭に出たるに狐の市三郎をみて飛かことくに走りてにけたりとて
至る高慢也夫に付奇怪の珍談ありきつねのいなりのみやしろにて物かた
りをするを聞たるものありしに一のきつねのいふには常とは事變りた
る恐れやうはいかに市三郎さまの御屁をおそる故か夫にしてもけしか
らぬ恐れやう也といひしに市三郎さまの御屁はなかく並々の狐らか可
企及事にあらず其上に御なら奉行の御勢もあるものを我らかいはい頭支
配のこときもの也といひたるにみなしか也くよのきつねもいひしと
也謹而按するに市三郎の屁實に狐に過ること數等也され共續紀に天狗を
アマツキツ子とよみたる類の尊きキツ子にはあらしみな野狐の類なるへ

し
○廿七日 晴 革工禮に来る藤堂家にて和州之古市といふ所に出張之役
人方々呼に來り皮陣笠之あつらへあり三十具丈受取來るといふ其節革之
甲冑鞍等をみせたるに南都にかゝる職人あることを聞かすいつ方より來
たるもの歟と疑て尋ありよつて南都東坂之もの、由申たるに何分承知せ
すくらは甲冑も夫々其法則あるものなるにみな其法に叶ひ甲冑は又殊に
實用專也いづれ自得にては不參筈也といひよし夫故に實は奉行所に而
作くら作之甲冑等下ケ段々教示有之候由申立候處夫に而わかりたりなら
の御奉行ならば左もあるへしとて甲冑并鞍あつらへもありしとて其禮に
中之口迄出たる也古市の奉行は深谷源太左衛門といふもの也年始には先
徒五人侍五人にて年始に來る也右之革之陣笠三十といふは自用之分也と
いふ江戸ならば五千石の御旗本に而別段之心懸之人に無之候は陣笠三
十の誂アツラはなき也

○廿八日 晴さむし けふ日本續紀をみるに天平寶字の頃出羽之蝦夷御
征伐の時也四月なるに雪ふかくして困りたるよしみゆ彼壺石碑をつくら
れし時也石ふみ村と今いふ所は仙臺一之關よりはつかに隔たる所とか聞
夫々今のみち十里にて蝦夷の境となる也しかるに雪右之如し凡のさむさ
今のからふと或蝦夷地のことし右之譯を以おもへは地氣日本にては段
々と西南方東北へすゝむとみえたり當時之蝦夷も今五六百年も立たらば
奥羽のことくなるへくかなとおもふ也天孫はしめは筑紫へ天降まして終
に大和のよし野といふ至極之西南のはてに都を御ひらき夫々段々北へう
つらせられてはては山背國にみやこを定給ひたり今の京これ也夫より鎌
倉にて權をとり今又万歳兵馬之御權かまくらより東北なる江戸にあり夫
にておもへは右之譯わかる也からの今の北京はいにしへの夷地也からは
西北へひらくるか也不思議なること也これみな天意自前之ことゝみえた
り

○廿九日 雨 紀州之御家來參る三山并御用途金之義寺社奉行所之達之趣申出る其節一位殿よりとて銀一枚被下之○其節御家來之話にては紀伊殿は表向去る廿七日御卒去之被仰出可有之積に付急に今日罷出候旨申聞る紀伊殿御不快を 上にて御案事にて道中六日限りに御醫師被遣右之御醫師四十人はかりに途中かけ通しに大につかれ到着直に氣附の藥を用ゆる位之事之由され共無子細拜診いたし少々御快かりしか終に御大切に被及候由也 上之御友愛奉感戴也右に付此ほと之 思食又恐入る也御醫師は 上使同前之御取扱故別段之御馳走は不及申旅宿之警固として火消人足迄も晝夜詰切別御大造なる御事之由也菊千代殿十五歳に被爲成候迄は御後見有之事之由御三卿様方之内紀州に御引越之御例之由左もなければ左京大夫御後見申上其節は宰相に相成不申候は差支候由也然るに御老年なから一位殿被爲在故に先ツ其御沙汰には被及申間敷と之御事也御三家は 公儀之大切なる御補翼之處水戸殿十八九に可被爲成候は

かり紀尾共に御幼年にて御三卿も今は御二かたにて一橋は御幼年也王孫のかたも御少きこといかなること哉西丸様に御誕生之多く被在らるゝことをいのり奉る也

○晦日 雨 紀州之御達書拜見するに脇坂より之御達御尤至極也紀州之貸附といふものは江戸にてさへよからぬ故遠國はけしからぬ事はかり也古き證文等を書替或は證文を質に取候類之義言語をたちたる事有之由之風聞也され共此節の御達にて大に直るへき事也きのふ御家來之様子よほと恐れたる躰也右に上かた筋之貧人大に助かるへき也大なる御隱徳也紀州之御繁昌をおもへは御貸附は皆止に相成候は御繁昌之一助なるへし御貸附によりいくはくの人の膏血を絞らるゝことにあるらむ町人之金貸にても小民の害をなすに御三家の御勢にて小民をはたるけしからぬ事也當時世之大害之一ツ也しかるに御取締立て大にありかたき事也所々之奉行所之與力同心を手に附て御貸附之外にもいろ／＼なることをする躰

也都筑金三郎御代官所にては御代官開濟無之候而は拜借ならずと觸置たり別段之事也上かた貸附之大害金三郎に逢て後々のため新右衛門など聞置可被申候實に驚歎の事共也伊勢守殿之御書取に先代中務大輔といふことあり書損とみゆ今の脇坂は淡路守と被申るに先代中務大輔とありては却る不分ことし書損なるへし脇坂中務大輔とありしを書損せしなるへし御用途金を取扱奉行所々悉寺社奉行所々達しあらは別而よかるへし御取締たつへし熊野も取締たきこと也此邊の熊野貸附など以之外也

〇四月朔日 晴ことの外の冷氣也 おさとはいまたこたつにあたり居る也され共夏にはなりしとみえ庭の松にて蟪蛄のなく也

卯花を雪とみるまでさむけれと夏をしらせて松虫のなくといひし也〇きのふは家來共にも給させたり折ふし庭の池にて市三郎其外うちよりて鮒を戯につりたるに幸に大なるを六七ツ得たりふなのさ

しみつくらせて給させたるにみなくよろこひたり存外に味よきものなりけふ人のもとよりならの都の八重さくらを一枝くれたりなるほとよき花なり

手折こすならの都の八重さくら再ひはるに逢そうれしきとよみ遣したり

〇二日 晴 人のもとより畫讚をたのみたり雀のむれ居たる圖也

仰看發黃口噴々似啼飢乳雀多辛苦啄蟲哺數兒
としるしたり又龜のかたに其人かつきてと聞て

雙龜翹首進看得瑞應嘉爲祝無期壽欲行積善家

としるしたりわれらに讚などを乞馬鹿ものもあるもみな 公儀の御恩のあまり親の御惠によること也〇けふ人に問れて答たるは大閣殿下の 東照宮の關東へ御入國の舎は北條を御征伐の御目ろみと同時に御考ありたるなるへし其譯は小田原へ御下りにて途中御城をは大閣の御借用也日

本中之人數十六万人余の人々を集て小田原を攻つふしたり其勢にて御國替のこと被仰出たれば神慮にても否とは仰られかたき也大閣の小田原を滅すはやすけれとも 東照宮を關東へうつし奉らむことは別而かたき事也御代々の御國を奪ひて關東へうつし奉るに北條よりはしめしとはさてもく存外のところより手をかけたるもの也大閣の詐謀の手はしめは北條に上田の附城のときをくるみといふ城のあるをしりなからしらぬふりにて上田の城をわたし其時にをくるみを北條のとりたるをいきとほりて夫を名としてせめつふしたり北條と和談して城を明させて其後に切腹を被申付たりかゝることありし故に其むくひの來りし也大閣は十の堪忍七ツにて破れ信長は五ツ六ツにて破れたりと 東照宮の 御意ありしなとことを急になさるゝにてみゆる也川柳に

其序なといはぬか 神慮也

といひしなとは恐多御事をは申したれ共大閣ならば關ヶ原の序に大坂を

踏つふすなるへしといひし也

○三日 雨 與力橋本喜久右衛門父某は才あるものとは兼あきつ惣髮にてひけを延し一くせあるへき六十はかりの男也この頃順作相撲の檢使に行たるに渠も見物に來り居て内々順作に逢て喜久右衛門をわか引立くるゝ禮等いとく詳にのへたり又四五日以前にならの都の八重さくらのさかりなるを一枝くれたり我其挨拶にうたよみて遣したり其時に兼並々ならぬ人也とはきつ逢申度候され共例もしられねは得いはすと順作していはせたりしかるに今日喜久右衛門を以申聞しは十二歳の時より與力を勤隱居する迄に奉行をかはること十を以數ふるにあまりありされ共悴の咄をもて聞に我ことき人を聞かすよつて目通をもいたし度いにしへを論し今を評してき度こともある也尤與力の隱居いにしへは三日に機嫌聞として罷出たるよし古留帳にもみえたりされ共近く隱居の出たるをきかす其上にもし屢わか前へ出て其序に與力同心らかしくしりなどあ

らはみなこの隠居の所爲と成へし勿論罷出といふ共當今のならのはなし露いふへきころはあらねとも世の人のものいひさかなさをいとふ也隠居したる上は月とはなとにおさまる御世をたのしみて馬齒を全したきの外更に望なしよつて御禮にも不能出と申たると也其旨順作より聞てさてくもと感し入て名のむなしからぬを深く稱したるにおさと聞て喜久右衛門か父の凡ならずとは人もいひきまたさるもの也とおもふ也其答のさまクエヌ人ともいふへきかこは笑ひくさに戯をいふといひき

○四日 晴さむし けふ市三郎寶藏院の鍵に行勝負之上にて先生とくみうちしたるといふ故にわれ以外に怒りたり凡武術といふものは命をとるととらるゝとの稽古故にいかにも必命を極むへきはいふにも及はぬこ也され共竹刀を以御治世に稽古するには品々あり槍はやり刀術は刀術躰術は躰術也しかるに其稽古場になきことを以先生と勝負を争ふ畢竟弟子として其先生の心をとることをしらす藝に熱心なきによる所也以後ゆ

めくかゝる心得あるへからすとていたくこらしたり大小の相違なれ共鳥居彦右衛門は御玄關の大床に着坐して首を取らせたるを今にいたるまで稱し今川義元のくみうちして人の指食きりたるといふは大將に似ずと人のいふならずやいかに武稽なればとて目はしをきかせ其理を明にせずしてはならぬ也とていたく叱りし也さてもかゝることに智慮のたらぬは我にや似たると深く歎息する也幸三郎にも此風あり新右衛門はなきかことしいか

○五日 晴 明日は訴訟日に付今日目安願之もの其外にては門外のこしかけに百人以上之人居る也其前を通りて與力らか出勤するに辨當或は大成風呂敷つゝみをさけてくるとて家來の笑ふ故にさてく汝らはこゝろなき奴共也武士のさまみなかくの如きもの也こゝの與力は百五十俵なれ共馬をもかひ或は武器などに事かくものとはなし江戸もいにしへはかくの如なりきしかるに今は我らかかたの侍も使に出すにふろしきつゝみ

はみな中間にもたする也よつて立派なる人に武器不足の人多し可歎事な
らすや江戸のことの一ツをいはむにいにしへは御番に出るものいはゆる
番袋といふものを銘々の妻なとかもち行てもくるしからずして大手のつ
ゝら石のもとに持行て亭主に渡したるといふ也それらは偽のことくなれ
とも偽にあらず既に今いふ大御年寄といふ女中か御成の時の御くはりの
辨當をつめたるといふことたしかにみゆ今は惣辨當は我らかかたの下女
にてもつめぬ也夫故に武士困窮のかきりと成て武士のあるまじき事多き
也いにしへの武のあるまじきこといひて笑ひしことは今の武士に多く
今の武士のあるまじとて耻かまじきこといふはいにしへの武士は構
はぬ也可歎事とていひきかせたりなること此一條と前の日記に記した
る儒者か西土の人の儉にて銀の簪をさすといふを不審かるにてくらしよ
き地なることをおもふへし與力などみな申付され共綿服也乍去みなゆた
か也

○六日 雨寒氣冬の如し 今朝槍を遣ふに指頭ビリ／＼とする也市三郎
に聞にしか也といひぬされ共候器は五十度也當年も六ヶ敷としなるへし
○きのふ順右衛門其外之もの共伊賀之笠置山へ行たりならより三里也絶
景の所也山にのほること八町にして寺あり平坦の地にて奇石尤多しつゝ
じさかり也といふ也こゝは 後醍醐帝の御こもりありし所にて古戰場也
この所に山村あり人別三百はかりあるとかいふと也この村は 帝の御籠
城のときひそかに朝敵共之手引せし村故に今にいたりて其罰にて一人ツ
、必癩病になるといふ其上に近村にて賤しめて縁組するものなしといふ
と也五丈十丈の石ありて 天武天皇御行のとき天人あま下りて彫りしな
と土俗のいふ佛鉢所々の岩に穿てあるといふ也おさとはならへ到着の時
其麓を旅宿にせしに山水の絶妙第一也といふ也

○七日 くもり又雨さむし ある男にしらみ多しと聞て取あへす


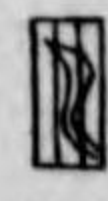
襦衣贖鼻一乾坤垢汗蒸成忽碩蕃絶倒華山高士後看花肩愛春暄

とつくりて其和韻をせよといひ遣したるに其人大に笑ひて去りたり今こそしらみのこといろく恥れ共もろこしには貴人にしらみ多し日のもとにても古事記に大あなむちの命よみの國にて人のかみ^{に脱カ}たかりたるしらみをとり遣されたる事あり夫を以おもへはいにしへの人はかしらにしらみの居たること明也○桓武天皇延暦三十月丁酉勅曰其遊食博戯之徒不論蔭贖決杖一百云々とあり博奕の百敲といふこと古代よりの律とみえたり

○八日 雨 けふ民藏の叔父其外五人備中よりなら見物に来る昨夜は小刀や善助といふならの猿澤池のほとりなるはたこやにやとりたるに相宿を旅人四百人以上ありとてみな大に驚しと也この小刀やにては春秋はいつも百人以上を旅人居らぬといふことなし多きときは五百人も旅宿するといふ其人々の草鞋一足も紛失せすことくくに翌朝わたすといふ也

○九日 一昨夜三月廿四日附之狀相届母上様御機嫌克其外一同之御無事目出度候○母上の御狀に六月には大分手習いたし候積之由さてくくと年

月の如夢なるに驚候義に御座候○狂女のこと母上様之御世話より新右衛門夫婦之世話殊に女之義おちる之世話いかにも難盡辭是又大歎息也○母上の御賀の御召出來候由恐悦新右衛門よりは御羽織差上候由御満悦之由私より差上候御召一同思召に叶候と之御事は私におゐて難有候○新家留役成候已後は書狀の參ることまれく也便ことに書狀の有無を兩御隠居様御尋いろく御配慮之躰也定る母上の御様子も右に類せられ候御事と奉察也遠國に親あるものは書狀は等閑^{す脱カ}へからさること深くおもひ當りたり○新右衛門書狀之内高橋之御出府之積之由等具に承知○二月廿八日之日記に岡崎の招きより歸りて弓を射たることみゆ甚よし○御能の時奉行より菓子其外共被下たるよしみゆ新右衛門之御取扱別段之事とみゆわれも調役之筆頭をも勤たれとも都之事新右衛門の今時のことくにはあらず難有のかきり可恐之かきりみなこのうちにあり敬慎之二字夢忘るへからす奉行は嚴君につかふるかことく寺社役などは組頭以上之人

の心得なるへし吉凶禍福一物のうちにこもり居也可恐々々〇くらのこと御尤也昨日作人呼寄申談たるにニカハにては決而不合ニへに無紛とて品々もち來れりさて針之事は出來合にはかくはせさりしか其頃きりにて鍛革をもみ見たるにもみて直に扱はきりぬける也半日置は決而ぬけすよつて念をいれて四本打たる也され共針にて決而べたるものにはあらずとて下地の出來たるを持來りてみせたり申ことくなれ共いかにも不束也夫にては眞の蛇足也よつて此度は革もきせず少々大きくいたしてくら師のかたにて仕あけいたし候積はしめよりの二背共日長たよりにて取もとして引替之由を申たりニへとニカハとの差別はよく御改可被成横革之事以之外なる事故申談たるに壹ヶ所もなしといふ横革の論あまりといひて涙を流す故に無余義日記を俊藏より爲讀聞たるに下地をぬらさるをもち來りてキシモ、の所をはしめは大きくかさねてキシモ、の形をは削りてつくる故にけつるところはきれてたとへははしめは  なるをけつりて 

朱のことくになる故に削たる所横革のことくみゆれ共左にはあらずそれは無余義也され共のこりの所の力木くらの厚ほとや、あれは用かたにかはりなしといふ夫は居木もしかり木くらは是非に木まめきれになることねりくらのことしといふ也いか、あるらむ下地をみればさして無理とも聞へすされ共針なきと引かへる積也〇道淳公のこと新右衛門の出精にて我が御世話の十分一之恩返しなるへし別而よく、我より新右衛門の御たのみ申候事也道淳公のことをおもひて落涙することもある也當時之攝津守殿御様子よろしく恐悦也〇十八日小金之御狩も相濟たるよし恐悦之御事也右之圖其外共御贈り忝候與力共にも拜見爲致候〇桑山六左衛門か馬にて怪我のこと可恐のかきり也かゝる事に而一生涯をあやまるもの多し有馬左兵衛佐など三疋にて遠乗に出脇坂の近邊にて馬はね合候而落馬氣絶其節面部に大疵附て無余義隠居されたり御治世之武藝に馬ほと可恐ものはなし決而新右衛門など馬のこと容易に御心得あるへからず候足利

將軍家のうちに落馬にて即時に逝去の御人ありと逸平次殿常にかたりて
いましめられし也なら奉行之本多飛彈守も落馬して鏢にて胸を打即死也
乗馬の時必たしか成とめをして脇差をさすへしたしかなるとめよし此こ
と必御忘れあるへからず鏢なき短刀よしされ共とめ別亦よくなければ抜
けてこれ又大變也無事なる馬にのりて大切にすへし以前讃岐の屋敷にて
われと太田某といふ人とのりしにわか馬は讃岐の乗料の老馬に成たる也
太田か馬はくせありてよからぬ馬也其馬馬場の中央にて居附て尻をわか
方に向る躰也われ恐て凡二十間ばかり隔て控居たるに太田の馬少も不動
よつて太田聲をかけて早く乗抜くれよといふ故にかくをいれて乗通たる
に其馬の近所は行と人をのせなからチウを飛てあとへさかり嘶なから三
ッはかりはねたりよほと恐たれ共わか馬よき馬なれば少も不構して行過
たり其時の怖さと六左衛門のことを聞につけても危かりしとおもふ也新
右衛門など馬は知らすともすむといふことをよく御心得あるへしわれ武

術 上覽に出さるは未熟のみならず元來筆算之申立に御目見以下より
出たれば也吹上に馬 御覽のときも痔疾とてのらさりし也○わか揮毫
のことに付段々御教示夫々尤也別右之所心すへしはや唐番三本ほと書
たり御説のことくくれく心すへし○筆のこと静晨堂の筆は先き過候
歟也大純羊毫は静晨堂の筆より先に肉ありて先き方はよからねとも書
躰穩に出来る也大純羊毫と御遣ひくらへ候へ○人の千金を失ひ子を失ひ
たるとの廉々御尤也この人ことに利欲家なりし也され共われなど早く御
取立に成其上さして金にも困窮せず當時之新右衛門又しかり利欲にて貧
たることはあらずとも其徳より金錢身分よくなれば其たよりくること必
せり新右衛門など此ほどの御心得大事なるへしわれ新右衛門の勤のころ
よりよく心せはよかりしに今後悔すること甚多し

○十日 晴 わた入かさねにて巨燧也○革くらのこと前に記るかことく
なれ共乍去キジモ、の所横革になる所不十分ならねは木くらをみて考た

革をこころし
て遺の類に
甲胃の類に
はいたくこ
まはむるこ
となれ共こ
すはありて
大成もみ
大は聊のな
しれを構な
るるに以し
るへし

寧府紀事 (嘉永二年四月) 百四十二
るに居木の所は作くらにてもきり込之所は前後共に目きれに成こと分明也され共キシモ、の所木の目キレに成はいかゝあるらむいつれも塗下に不分明也しかるにいにしへの人曲れる木を以くらすを作るといふこと書物にもみゆればもしくはきしものゝ如くなる木を吟味して作くらはつくりたるかとおもひて革をも不削して作りかたあるへしと段々工夫をしたるにきしものゝかたちを鏡にてつくり至る革を薄して右之鏡の鏡へ鍛へ附段々とかさねて行はけつらすに出来る也さて又くるひの不出様には革をいさゝかころして遣へはくるひ出へからすと其ことをけふ段々と相談してみたるに革工會得して無余義横革になる所を少も横革にならす出来る工夫附たりよつて今度は少もぬらすきちにて江戸へ廻す積に成したりされ共銘をきらねはいや也といふ故に銘はきらせて木地に廻す積り也革工大に歎息して江戸へ行て得と理を究るといふ故に江戸へ行とも入用かゝるへしといふに此職ならの穢多の職に末代へつとふる上は三十兩四

十兩之入用はいさゝか脱カも不厭といふ故に江戸へ与風行たり共江戸にては穢多頭ならては武家之門内にも入れぬ故に世話人なくては出来ぬ故に全之損になるへしとて差止て今一段其入用を損にして工夫をせよといひ附たり穢多といふものはけしからぬことある也上かた雪踏と江戸雪踏は違ひて江戸雪踏のことくには出来ぬ也しかるを江戸雪踏を作るものゝ欠落ものを尋出し圍ひ置て其職を會得したるに其こと聞へて右之欠落ものは引もとされて仕置になりたるといふ也しかるに此ほと甲胃くら等之類所々を多誂ある故に其職にするつもりとみえて引ふたなをいたし度といふ故に大に叱りたり甲胃は元來其家々あり鞍もまたしかりしかるにならに其職をするもの今一人もなしわれ文武を講するの餘りに今其人も其株もなければ革のこと故無余義差當り穢多にさする也しかるを汝らか職なとおもふは大成心得違也といたく叱りこらして遣したりされ共おのつから彼か手に革製のこと故に落るなるへし歎息也

○十一日 晴 當月は別段之潔齋に付十日よりかゝる故に九日之日に俗にいふ精進かための類にてマクロを買て酒壹合五勺はかりのみ其勢ひにて夜四ツ半時頃迄書をかきたり折節陳玄堂より精品の墨出來たりとてもち來りたれば試に六年前に都筑平藏にもらひたる唐人の遣ひ料の上墨并近頃与風買得たる氣叶金蘭と陳玄堂のすみと各々のすゝりへすり筆も各々にして書箋昏へかきみたるに氣叶金蘭も唐人の遣ひ料も陳玄堂のすみも縮みかた墨色少も不違見分へき様なし氣叶金蘭は古梅園に鑒定させたるに凡百年前後にわたりたるものにもあるへしといひたりこの墨此節日本にある墨中の精品にて古きは廿四五兩もするよし也なるほと句ひは至而よき也よつておもへはふるきと句ひはかりにて實用に少もかゝはらさる上は高直のものはいらぬもの也此氣叶金蘭は榮吉か親の弟子僧かてらにありしをもらひたるとて榮吉か遣ひ居たる故にをしきもの也壹分貳朱ならはいつにても買可遣といひしに日ことに市三郎を以壹分貳朱に買

れよといふ故に墨に壹分貳朱出すは奢也とおもひしか小かたの三四挺かけもあり其上に壹分位に人々かはむといふときし故に施しこゝろにて買置たり其こと淺井中書へ申遣したるに氣叶金蘭はかたも品もみな同じことなれ共其内に明の頃に製したるは至而少間部下總守殿并米菴か所藏みな廿五兩位也其余は貳三分前後位也ものよし也わか所持之墨万一二十五兩位もするものならはもとしてうらせ刀にても買はする積にて委細淺野へ聞に遣したるにいまた否わからぬ也いつれにもわれらか用ふへきものにはあらねは深く仕舞置たり榮吉か父はよほとよくくらせしものとみえ文寶の玩器などにはよきものあり書物などある也榮吉此ほと書物の校合の手傳させてみるによほと才あるもの也文章などわかかふ通のことを速にかく也され共なまけものにて一向に何もせずいかに叱りても平氣にて遊ひ居る也をしきもの故におさと迄か異見すれ共一向にきかす悪事もなく只遊ひ居る也才もあり利口ものなれ共をしきこと也市三郎などに榮

吉か文藻十分一もらひたき事也

○十二日 雨さむし 民藏か在所々伯父伯母妹并妻の母共以上四人并至
る親しき友とちの女壹人大和見物に来るこれは八日の條にもしるしたり
しかるに雨かちなれば所々の見物に困るらむといへは存外のことにて伯
父は高野へ行てのこりの女共四人に民藏并妻共うちよりて或は臥ながら
或はねながらにいろ／＼のはなしをする也其樂いふへからす客も大佛か
すか位にて外へ行かす主人も又いつかたへもやらす起てはかたり臥して
はかたりはなしのつくることなくよつて雨もなか／＼に天の御めくみの
うち也とおもふはかりなりといふ也われか今江戸のことをおもふに新右
衛門幸三郎らか類又は母上の御出あらむにはおさ／＼ならのこの見物
はなさてうちよりての物語なるへしとおもへはさてもうらやましき客か
などとおもふ也民藏も我御かけにて用人筆頭なれば小屋も廣ければ一間は
客へかしわたしにてさて朝夕のたうへものなともとよりことかくことな

周禮注疏四
十七の二十
七丁にあり

く居なからにふるさとへの錦の味もありて日々に出ては其難有ことを述
る也かるきものは自由なる故にかゝることも出来る也われなど今一二年
立ても歸らねは必母上の御迎はあけるつもり也○周禮に弓をつくること
をあけて其内に膠をつくる法をあけて居早亦不動居濕亦不動とありされ
は今の弓の法は周の法とみえたりしかるに膠のよからねは夏の用になら
ぬことみえたり膠は勿論ニへなりこの頃新右衛門紀州のかりのね打をい
たしてきたるといふかためしてみたき事也其序にこのヶ條を周禮より取出
してニへの吟味をよくなしたらは夏冬通し用ゆる白木弓出来へきか國益
のために其周禮のうちを人にきゝて弓に用ひ御ためしあるへし

○十三日 雨 大にあつし蚊やを今夜より用ゆ東門より當地ニ承教寺と
いふ連枝寺を呼よせて東門直々に沙汰ありたりとて金五百疋に縮緬二端
くれたり先達ニ改派ニ事に寄使僧被差向たることもありし故に口上手控
書もらひ受たし其上にて拜受いたし度旨申遣し候處いつれにも預り吳候

様との義に而歸りたり其後いまた否不申越京都へね申遣すとみえたり○
おさと此ほと快方とみえてなみたも少大に機嫌よしいろくの物語物な
とかりよせて日くるゝまでよみ居る也さして怠屈もせずといふわれ書物
を精を出せはおさと必いふかく御精か出ては江戸よりの御沙汰に背けり
江戸は可申上といふ故にわれも亦おさとへ其こといひ聞かせて今一段精
を出すに江戸へ可申上とて大に笑ひたりおさとおもひしよりもいさゝか
丈夫なる所あるとみえたり○一昨日より鳴物停止に成

○十四日 雨大にあつし 鍵のすきなとすれば汗夥し○所司代は御機
嫌伺には當病之由に而用人を出す也若州とかく御不快勝に而出京して御
逢あることなし公用人謁也しかるにわれ出れば必十三兩以上かゝる也よ
つて風邪も折々ある筈也ならへ参り所司代と閑談せしことは只一度也○
この頃ならの近邊の土中よりもものを掘出したり高サ壹尺五寸はかりの土
人形の左前なる衣類を着したる也と也不思議といふ故に我いふ日のもと

のいにしへみな左衽也右合に衽をなしたるはならの京の末ころかと覺た
りされは其土人形は夫より以前の古代のもの也さて夫は垂仁天皇のころ
までは人垣と云しと覺たり天子の崩御あれば御きさき近臣の類を御墓の
廻りへ並て生うめにして置たるもの也殉死なから人垣は又別段也しかる
に顔を出して置とみえて垂仁の御意をみるに息のあるうちは人々なきか
なしみ其上からす來りて啄はむ躰御忍ひかたきによりてはしめて野見宿
禰に命して土人形鳥を造らせて人に替られたること也人垣のことは止ても
殉死のことはありし様子也右等之ことによりておもへはかの人形は人を
以垣にして埋殺したる製をとめらしれ脱カより後のものなるへし一覽したし
といひて遣したりいまた來らす人垣のことは八幡宮生られさせ給ひしよ
り二百年前ばかりのことなるへし以上古事記日本書紀の空覺をしるす誤
あるへけれ共大意はちかはぬつもり也日本のいにしへのさまおもふへし
日本書紀之年月といふものは甚以可疑こと多し其譯は曆といふものなし

夫へおしあてかひに後世より支干をふり附て神武帝の元年は何にあたるといふ様にせしものなれば大成間違ある也古事記と日本紀と天子の御としの符合する一ツもなし神武天皇の元年は周惠王十八年に當るなりといふは一向にうけられず至る後のことなるへし

○十五日 雨 わた入二ツにて巨燧にあたり夜は蚊やをつる也○庭の池にて市三郎又は若さふらひ共釣する也われ元來殺生きらひにて今まで生たるもの貫へは必放つこと御存知之通也よつて釣などはせず与風子釣不網といふことをいひて汝らか外出するより池をあさるはよしなといひて戲言いふうちにおもひたるは明道先生獵をやめられ其外かゝる類多しよつて我も天地生々の理を思て活物をは殺さねとも君子遠庖厨とは孟子の一時の辨に出たれば取にたらず既に孔子も釣をさせ給ふ上は活物の理におゐて食ふへきは食して可也一概に活物は不食といふは法師の見解にて武士のすることにあらずかゝる所に宋朝の人のをとなし過たる所あるか

ことし孔夫子の釣をし給ふといふにておもひ定へきこと、おもひしりたり○市三郎は釣至る下手にてつることまれなり誠一はよくつる也よつて市三郎は太公望流誠一はゑひす流と号せり惠比須の魚をもたぬと太公望の魚つりたる天人の立歩行すかた幽靈のうち臥たるすかたあるへきものにてなきは不審也鍵もちの鍵辨當もちの辨當とは意こと也

○十六日 晴さむし 風邪の流行甚敷こと也○古事記傳に神武帝のみさゝきを糞田に成し或は三尺はかりのつか也或は綏靖のみさゝきといふかた神武帝のみさゝき也なと宣長いへりされ共高市郡四條村に高サ四間余のみさゝきありてたしかに神武帝のみさゝきと奉行所にてはいふなりしかるに宣長の傳に其ことなしあまりのことなれば段々と穿鑿してみたるに午未に畝傍山をうけて四條村のみさゝき無相違也それによりて人々いろくのことを聞出していふうちに宣長か畝傍耳なし天のかく山この三山は神代いはいはれある山にて其邊にみさゝき多所なれば宣長探索に來り

し時あやにくに大雨ふり雨中にて殊々外迷惑してみなみちしるへとして出たるものもつかれ果て凡にして案内をしたりといふことまで聞出し來りたり旅にはかゝる多也心あるへきこと也さもなくては四條村之内に高四間もあるみさゝきを見落へきはつなし名所穿鑿するもの心あるへきこと也夫故に大切なることを誤て千載へ過ちをのこしたり可恐こと也○古事記によし野よりうだへ行みち川尻といふ所ありて不分明也宣長にも不分明なりしか川セリと水源のことをよし野の奥のもの方言にて云をたしかに聞出し來りたりセリの假名を尻の字書しなるへし

○十七日 くもり けふは市三郎順作を供にて其外家來共兩三輩にてかさき山へ行たりこれは後醍醐帝の御こもりありし古戰場也市三郎いふ五丈十丈の石にてつくりたる本所の松平伯州の庭に似たりけにいふへからさるのけしきなりと也つゝし藤さかりにて畫かくかことしといふ也そこより三里いつみ川を舟にて下りて山城の木津へ出夫より御役所まで五十

町にて歸る也この木津川より笠置のけしきいふへからす夏夕くれより月に乘してのほると赤壁の遊を即今にみるかことしといふ也去年七月二條宰相と儒員育介行て詩を贈りたりきわれはもとより行れす夫故に詩をつくりたることありおもしろからねとしるす

癖中最癖在愛月弦光先賞西山朧夜々愛看添清輝況是中元無纖闕不論雲
靄星亦稀滿天月華十分發相携兩三詩酒朋輕舟棹上木川澄天漢江流遙相
接殘熱忽消凜如水沂流十里境轉妙龍蟠虎踞巖幾層千丈飛泉迸絕壁映成
一道晶簾凝銀橋高懸雲外路攀此月宮如可昇乘輿把盃物其旨勸酬交錯樂
極矣曾聞鴨川避暑棚親看扁舟泛墨水紅塵四合甚俗喧今夜幽寰何能比無
廻相類赤壁遊客有澹齋與西里有文有管又一奇澹齋欣然筵管起淒涼一曲
雨霖零舟中掩淚如洗耳西里文章翮々成錦心繡口驚瞻視髯蘇暗來似輔神
二賢呈妙魂爲禱吾無一技何爲乎或其鬪酒必歸吾不辭滿引幾太白笑言二
賢知吾無白鶴道士吾即是今吾羽化遊雲衢欲飛駭覺旅館夢餘醒尙在汗如

珠初知常時有^{リテ}此念夢中遂作^{ルコトヲ}奇絶娛^ク

この詩与風其頃一乘院宮へも入御聽宰相のこのみにてしるし遣したる所立派なる卷物になりて夢よりも一段の大汗に其頃なりし也

○十八日 くもり 法隆寺には柳助の弟子ありて今古の講釋又は歌の會ありて行也きのふも行たるに一乘院宮中宮寺宮に御成この宮は法隆寺地中に被爲入尼みやにて十七八に被爲成一乘院宮御妹也この宮と御同道に法隆寺の諸堂社御參詣中宮寺は尼宮故に御日かさをさしかけて尼數十人にて取廻て御歩行也みな麻のねつみころ裳也これいにしへの御仕來也一乘院宮は御近習に日かさをさしかけての御歩行也柳助など宮の御才子なることのみを承り居たれ共御様子をしらねは例の御長髪なから御け高き躰にいたく恐入たるといふ也法隆寺の寶物之内に天竺より來たる鏡鉢あり夫をかふるものは小兒のさかやき嫌みな直るといふことを中宮寺の宮兼御聞き召けむ一乘院宮へ頻に御すゝめ進せられて御かふらせ申

上たるとあとにて法隆寺の僧か柳助へかたりしと也絶倒也中宮寺宮は以前にまた御剃髮前に御目見したりあしき御様子とも不存さりき一乘院宮は御美僧也一乘院宮廿五六中宮寺宮御十七八か也いつれも一ヶ所ツ、むだ成ねかし物あり可惜一乘院宮は御男僧別御ねかしものなるへし御起しありては大變也され共御如法之御様子にて難有御家來共にも御四十迄は別御大切に被遊候様と申こと也○夕かた書をよみ居たれば柳助畫をもち來りたり蛙只一ツを畫たるもの也讚をせよといふ詩か歌かといへは歌也といふよりてとりあへず

みる人もあらぬにおのかうやつくす^敬これをかゝみとあさ夕にみむと直にしるして渡し遣したりこれは昔康節先生山中獨居の時も端居せられしといふをおもひてしるしたり

○十九日 晴 夜に入て四月八日附之書狀來る○民藏親族共より其外迄取集大勢來りしもの共明後日歸るとて詩歌畫讚等被頼御認遣す其内おさ

との手かみの切はしなり共一ひらもらひたし兼而望により遣したりし短尺等備中等へ廻り而女筆にてめつらしとのことに而此度は非もらひ來りくれ候様と之義に付民藏より段々いふ手本などの義はもとより斷たれ共一わたり之義は斷もされず認遣す積に付我よりも認やれといひたるにさらは不快なから認へしとて奉書をつきて七十くたり余二千字はかりの文を書かゝりたり夫は病にあたるへしといひしに不聞して八時頃より書かゝりたり出來たれ共細字すへるとて又書直すといふ故に夫にてよからむととめたれときかす又一通り書たり氣根つかれたる躰もなく間もなく出來て末のかたは筆のはしりよしおさとかゝることは元來すきなれ共氣根によき所ある故なるへし少も不疲しかるにくたりに凸出來たりとて又書直すといふ故に段々と利害をいひて漸にとめたり民藏病氣にあたるへしやとていたく恐れ居たるに右之次第也けさ遣したるに氣根のよくさて細密に出來たりとて肝を潰したりこの躰にてはどこか大丈夫なる所あるな

るへしかゝることおさとの得手也これは我中々叶はずといひていたく恐たりこの頃氣分整たるとみえて認ふりよし

○廿日 晴 中院屋并興福院に參拜○昨日とゞきたる母上の御狀を拜見したるにいつ方も病人なく太郎もいたつらになりしとのこといたつらもまたよかるへし武士はよはくは仕かたなしいたつら尤よしとしとれは直る也夫に付おもひ出したれはしるす昨日民藏の望によりて富士などの類の畫讚は詩を書たれと掛物の二幅對は田家といふ題に而すき鍬を朝な夕なの露の間も忘れぬそ身の寶也ける

里といふ題にて

山吹のくちなしにしておもふこといはての里そすみよかりけると記し遣したり百姓にてうたをよみ或は書籍をこのむは十にして七ツは身上を潰す也夫と同じく武士は武士らしくあれは其余はいらぬ也百姓町人の武士めきたる武士の公家衆めきたるみな捨物也御役もいらす只手堅

して人殺し奉公のよくつとまれは武士は外に望なし太郎のいたつらに付記す也しかし不法をいたつらは嚴敷せねはならぬ也祖父のことく御役をつとめ書物又は少々朝夕に武術らしきことはするとも内實は祿盜賊同前なるはいたくいむこと也御役なと被仰付たらは格別願はする存寄少もなしこれ祖父の罪亡しの一ツ也○わたくしに酒をのみ遊ひ候へと之御事何より也けふも與力か唐筆一本くれたりよほとよくみゆる故に何分一大白を満引せねはならずして八時頃一合余の酒をのみて大に揮毫したりこれは御ほめの一ツなるへしこの頃歌のことばのことの一書を作らむとおもひて古事記日本書紀万葉其外のしらべにかへり朱文公王陽明の書をよむこと等閑になりたりこれ遊ひのうちに付御ほめの一ツなるへし○母上の追々に御目よろしくならせられ候也此ほとは御目かね御用ひあらぬよし一奇事に御座候恐悦之御事也其御讓なるへし夜分燈下にていか様なる細書にてかけ申候○新右衛門書狀之趣夫々承知也馬術御出精之由至極

心理膽意な
との論未發
儒已發性
のい等な

也され共六ヶ敷馬決而御無用也右は前に追々記せるかことし可恐事也○はなし家といふものいにしへの書などを引といふみな文華のひらけたる御かけ也眞の學文年々衰て末の學文年々行るゝ一歎息也學文はみな行跡を直し心の修行なるに其ことをいふもの少行ふもの一人もなし文章詩作を學問とおもふ人もある也むかし寛政の辨書に南畝か詩經の解別段也との事なりしか今の人辨書よりは遙にあらき事也京傳の草そうしなと今の引くらふれは十分一也かく何事も詳成故に不被行也御政事をするものこゝろすへし寛政以前は一冊にて済たる留帳今は五冊にもなるみな文事の開くるによる可歎事也人間の智はいにしへも今も一ツ也しかるに不益の所々多く遣ふ故に實用次第にへる也其弊終にから人のことくなるへし世のならばし可歎○土浦にて打毬御覽のよし打毬などは役人の可致ものにあらず候御覽のみにてよろしく候され共元來は今の馬術のうちにて打毬はかり少々役に可立様也右に人をは若きうちに仕こみたき事也右之

ことこの馬
の毛のこと

藝はからにても亂世にははやりたるもの也打毬杖を竹刀位にいたしこれにてなくさみなから武を講したらは今の馬場乘にては一番用に可立也○馬の毛いろのこと御穿鑿至極也御申聞の如きははしめて承り候實は不明と云御論御尤也かゝること伊勢家のものならては證となしかたし油斷すると武藝者のいつはり事也これらの類庭訓往來にあるにても事たるへし庭訓往來の弓馬のこと分ればあまり耻はかゝぬなれ共しる人少し御奉行より頂戴の證よき品なるへし其論前に記す眞鍮象眼ならは必ふるきものなるへし○鞍御考忝候これ前に記す也居木のこと古鞍に打さるは少し夫にて考たる也いせの考の木火の不出故といふことためし見たき事也實はさけさる木には無之哉繩をこかし切しことありしや可疑か様なる事也其木にて繩をこすり又余の木にて繩をこすりみれば直にわかる也木火を生するは常なれ共多少はあるへしされ共くらの居木より火の生すること先ッはなかるへきかいかゝよくためし見度事也○月夜に月中の水を水晶

にて取といふこと大全云小注などにもありしと覺たりみないふことなれ共とれぬ也ためして段々論したるに大にいつはりなることを知たりいにしへよりきり火うち火の別ちあり今もいせ太神宮にてはすることのよしうち火は則石よりとる也家々のものこれ也きりひはきりのことくもみて取也これは木よりとること也西土にては四季に火を木よりとる也木より火の出ること勿論といひなから馬のくらより火の出ることありしや先生に御聞且御ためしありたく候○赤小豆長光は赤小豆かあたりてきれたるといふよりつけし名也といへ共今上作のものに長光よりも刃のよき兼元村正などに赤小豆を投付ても決あきれず直弼大に笑ひ候也これは腦割長光の訛たる也この類傳書にも又あり○力革のこと江戸の力革はシンに古革又はかみを入あり例の穢多工夫にて廣き革を折込にて造れるあり其製甲の緒のこときもの也勿論高料也なるほと左なくてはあしきわけ也追お進上いたすへし過日も甲冑をつくらせたるにすね當のひもをあさにてつ

くり其シンに銀革をもみていれたり至亦よし今迄かくすることは知らざりし也銀革とは牛皮のすき通る所也○貞丈の作くらは不平なるといふは不出來也との説俗説を破るへし奇也かゝる説尤至極也○いせか革製のこ
と詳に御記し忝候岩井の傳授といふことこの頃の工夫の石の上にて大か
なつちにてたゞき附る工夫までにはゆかさりとみゆ其こと前に記す也
其外のことは曾亦しらすよく穿鑿すへし昨日工夫通り甲冑の下地出來
たり十枚かさねて厚貳分はかり也くさすりなどは七枚にせよといひ附た
りこれはこの頃の工夫也ニヘニカハなどの穢多へ尋ね尙記すへしニ
ヘもニカハも數等あるへしニカハもニヘも同じ皮よりとれ共力は十倍の
相違也○芝つなきのこと御申聞の芝つなきは沼田逸平次殿のはなしに至
亦早くいたすにはかく也とて仕て見せられこれらは倍び臣しんなど覺居は馬の
口をよりなから下坐する様なる失躰はなしといはれき馬の先生にても太
刀の抜おさめさへしらぬを岡崎公別段の事也逸平次殿騎格順道といふ書

ありこれは忝無學にて馬の師となりこまるへしとて馬一道のことをしる
されたる書也夫と軍馬摘要の二書宅にあり夫に亦御覽あるへし逸平次殿
は馬のたらぬときは夫等のことを馬にて直に教ありし也○むかし岩井あ
る御甲冑をつくりしことを聞に傳書之趣に亦南蠻鏡を多く受取表向はつ
くる也この南蠻鏡といふもの寛文頃の人は好めるものなれ共ハシコシよ
つて内實は遣ひかたにならぬ故賣亦おろしかねにてつくる也宮田流其外
の甲冑などにかゝる事甚多し都亦かゝることは職人の直談にて且多く損
をせねはわからぬ也鍬とのこきりのかねを交てつくるなと、其節も表向
はいひしと也内輪の事實をきくとみなこの類也傳書は入念てよくしてあ
り左ほとには出來ぬ故に職人未熟にてあしくいふもある也おろしかねの
こと水心ねかはしめてつくれるといふはひかことにてふるくあるとみな
いふ也鏡邪の劔をうつにかねをとかすことみゆよつていにしへは劔を鑄
といふ説あれ共刀劔のことをしらぬものゝいふことにておろしかねなる

へしと直弼はいひきおもしろき説也○けふは興福院に參るこゝは尼寺也
二百石の御朱印也 大猷院様を奉祭也

○廿一日 晴 おさと兼而の望にて柿本人まるのつかをおかみに行たり
其序なからうち山の永久寺ふるの社ふるの瀑布みる積也往返四里はかり
もあるへし兩御隠居さま女共不殘也順作其外若さふらひも參る人丸のつ
かはいまきたかならねともうたつかいと脱カふ大なる石ふみあり其所也といふ
也又其ほとよりに在原寺といふあり業平の像などありこゝの寶物はいせ
物語のものなどあるにてみな偽なるをおもふへし永久寺は頼朝公御再建
のまゝにて大地也地中二十ヶ院はかりありしと覺たり諸堂社多く大成池
などありてとしふりて又關東にはめつらしきといふへきてら也ふるの社
はいそのかみふるといふ冠辭になる位にて日本神社はしめ也とふるき
ものにもみえたり今はあれたれと乍去府中六社などよりは大かるへくさ
て見所もある也ふるの瀧は清少納言か瀧はふるのたきといひたる所にて

古今集にも仁和のみこふるの瀧御覽せむとていらせられ其序に僧正遍昭
か伯母かの宅によらせられたることみえたりほとゝきすも此邊多し山の
高さ八町はかりあるへしふるのたきはから人の玉簾といふものゝ三丈は
かりもある也けにも名不空よき瀧也行みれば僧正遍正遍正はいかなる人を清
少納言は美人也やと瀧に問まほしきはかりいにしへを思ひ出らるゝ所也
幸にきのふは少々雨ふりしかけふはめつらしき迄によき天氣也右々留守
にわれにふるまふとて市三郎其外さふらひ共うちよりて釣したりしか二
三寸四五寸はかりのふな五ツ六ツとりしはかり也惣人數へは露にもなら
すよつて柳助はたかに成て蓮根を多とりはてにはいさゝかざれたはれて
いつくよりか網もち來りて頻にうてとも鯉はみな岩ほの下にかくれて一
向にとれす常は夥鯉なるに利口なるもの也みなくゝ殘念かりて泉水の入
さかしたるに漸一尺余の鯉一ツを得しのみ也みなさむかる躰也二十四孝
の裸になりしは不案事也といふもおかしわれ密に障子の破よりのそき

みるにさなから晝かけるトハエのいろ／＼のことすることくにて興あり夫を料理し夫におさとかとり置し肴など加へて民藏俊藏其外留守之もの共に夕かたより酒給させし也只池へいれといはゝいかにつらかるなるへけれ少も不構いひ附もせぬにみなはたらく也衆とともに樂故なるへし

○廿二日 くもり おさときのは二里はかりの歩行たるといふかさしてつかれたる躰もなかりきみなくふるの瀧其外をはいとくめつらしきこと也とて悦ぬ其上にきのふのみちはならぬ初瀬いせへのみち故往來もにきやかにて江戸ものゝ大和めぐりに來れる其外國々の旅人紅裾紫襟の美人など所々にてみて江戸めきたるこゝろせしといふ也乍去御役所の婦人出たりといふ故に見物夥敷事にあみなく大によはりたるといふ也今一段にて六十六部か附て兩國は可出か或はよる可恐ところへ行には必手燭を顔の所へよせて行は其躰にて却る魔物之方に恐るゝといふもの

共故に所々にてみたるなるへし○笠置山の古戰場を見に行ことのならぬといふは武家の諸大夫以上のもの行は必大雷か或は山に大あれ其外之怪事ありて登られぬといひ傳ふ也乍去 公儀は新田の御一族にて其御家來を御いみ被成事はあるましき事也され共むかし奥州の金華山は殺生禁斷の地なるを政宗の押而獵をされたるに山大に鳴動して大岩忽にひゞわれて千余人の人みな陥り死して今に千人澤といふ所あり其ときまさ宗大に恐れて以來決る帶刀する位のものをもわたすましとて山神へ詫言をいひて歸られ夫より仙臺領なれ共伊達の家來行ことならず今にいたり他國のものにても金華山は渡るものは刀を渡海場へ置て一刀になり行と順作か已前かたりたるを聞たり笠置へ行かすとも少も差支ねは我など決る行かぬつもり也かゝることにいらぬうりたてなとすること夢々あるへからさること也○京都より人來りて隱岐其外長崎に異國船みゆるといふ風聞ありといふ也まことにや

○廿三日 くもり又雨 鯉をとりて人のはなしの偽ならぬことをしりたりあみより引あけてみるに手のひらへのせて大小をものさしにてはかるに少も不動又あみを下すをみれば鯉はよく静にして池のふち或は石にそひて居る故にあみかゝらす釣みるに餌をくふものは多くふな也われよつていふ鯉のことく餌を貪ることなくよく難をさけさせて死にのそみて少もこゝろを不動かゝること天下の豪傑ならてはならぬこと也我この頃池の魚をとらせたるときに其躰をみて一生涯のうちに鯉ほとこのこゝろにならば其余望なしと感歎したり

○廿四日 くもり 前に記す織田家のくらを與力共々内家來に親類あるものを遣してうつさせたるに郡山所藏のものとさしてかはらす寸分を不違ともいふへし伊勢駿河守貞雅は明德より嘉吉の頃の人と聞は丙戌とことくくにしるしあれは應永十三年丙戌につくりしものなるへし其序に織田家重代の刀の陣刀をもうつし來りたり中心にヲ田タン正チウと銀象

眼ある無銘也相州の行光也といふと也押かたをみるに中心まで龍を鐫たる大そり上ものにてホウシのひていかにも相州ものとみゆ疑なきものなるへしふち頭はあかゝねへ金のやき附にちやすり目也鐔の様子鍔のぬり鐔也筭ありて小つかなしつはに筭ひつなしいにしへにかゝること多しハ、キハスカヒ銀無垢金きせ上は金無垢也切羽は金ムク也つかさめなどは至而龜末さや其外共に中よりも下なるかときこしらへ也といふ也刀にかへり角あり一躰のこしらへは凡にわれらか常にさすに同じき也タン正チウは信長公の御父なりといふ也其外蒲生の家來をうちとめたりしときのやりもうつし來る壹尺はかりのほ也柄は九尺余あり尤ふとし

○廿五日 晴 大坂へ序ある故に純羊毫の中字かきあらはかひ來れとて買せたるに壹本百八十文也古梅園にて入念にていはすれば三匁とる也新右衛門之所くくる、靜晨堂の筆などは五匁ツ、もするなるへしいかなれはからは諸色のやすきこと如斯なるやわれ唐筆をこのみて遣ふなれ共不

自由故にこの日記など記す筆は近頃古梅園より買七分五厘ツ、也さしてよからずさてよくきるゝ也からのふても七分五厘ツ、にては買は至るよろし其上十本かけの壽ありされは差引てみるとからの筆はたとへは古梅園の筆にて百字拾文ならば唐筆にては百字二文か三文にあたる也至極の下直のもの也これは筆工の下手なるにはあらず毛のよからぬ也唐牛皮の力と和牛皮の力とにては三枚と一枚の相違あるかことしこれは日本は嶋國故に天氣を地へうけかた少しそれ故にけたものゝ皮毛の類弱とみえたり佐渡の牛同國にて成長すればはつかに米二俵をつくる至るの小牛也小さきときに越後へうれば至る大牛になる也馬またしかり土佐駒の小なるにても合考らるゝこと也これらのこと風土によること也

○廿六日 晴 きのふは市三郎初瀬へ行たり夕七ツ頃に歸り來りたり往返十四里也大地なるに驚たりといふ左もあるへし古跡風景福地大伽藍僧侶多き以上のことを兼全き寺にゐるは日本に今比類あるましき也○けふ以

前々富士講の時の書物をみるに元祖といふものは應仁の末肥前のもの也といふ也可疑扱富士講とは名目に一の宗旨也一寸のすかた武州の高柳村ひもろきますら男のかゝみ或は一向州ひもろのたすけ給へ日蓮宗の岩本實相寺の類のもの也もとは實相寺などより出たるものなるへし實相寺は學文もあり且ふるければ也さてすゝめる躰は一向宗に似たりされ共父母のうみたるものは天地にて天地たりとも又父母あり或は天帝などゝいふことあり天は荒アハ井白石か西洋紀聞に載たるコロマヨハンか本領に似たり邪宗たること疑ふへからすわれ密に歎するは日本に教三ツあり神儒佛也され共神道の實の教なしのこりて佛と儒也しかるにみな衰て儒は詩文等を以學文として聖人の教と大に違ひて一の行跡のみるへきなく佛家いふ所は加持其外之義を以人を欺き錢を貪るを以主とすしかるに富士講といふものは加持其外之義をするは富士講の本躰にあらずとていたくいましめ其重立たるもの元來は無筆無學之もの共なれ共身を修むるを以主とし孝行を

盡すを目當として銘々行跡をみかく躰也夫故に信仰するものはみな無學の良民の善をこのむもの共也畢竟儒佛のみち大に宗旨に違ふ故に世のこゝろあるもの疑を生して儒佛ことを露しらぬ少しも目ありてかゝること好むもの共はみなかゝる外道へ陥とみえたりこれ六七分に過て儒者と僧徒とにある也可耻のかきり也よき己か行跡を以曲尺として教ゆる儒者法師のあらはかゝるみちには人陥ましきに可恐入のかきり也實相寺之一心常安録は母上の御所持也新右衛門拜借してみるへし尊き書也疑らくは不二講この類より出しか加持等之迷はしは十人に四五人は迷され共心の上の實をとく事に至るはよき心あるも迷さるゝ也

○廿七日 晴 不二孝之一件當御役所に於て吟味はなく回心いたし候上は早速吟味詰候る落着之積なるに當人所持之書物多あれは後之心得にもと一わたり一覽するに大目付の駕訴より奉行所吟味に相成たる始末取飭る所々の廻狀を出すともえたり其内に江戸深川神明横町不二道會所を諸

國御同氣中の廻文寫丸吉様持參借寫といふに一天の御使に奈良の丸吉子の以手紙申上候扱不二道御願も天地之大道子細なく御聞糾○一件之名も不二道と御呼込に被遊其外難有御事筆昏に盡しかたしといふことあり不二道と呼は富士講一件と呼事なれ共かく取飭たり三妙藤開山○三國第一山といふことをいろ／＼に僞たるものにて其内には地名或は字などをとくこと今のことたま王安石か字說易の繫辭などのかげ如くなることにてみな愚俗を迷はすの道具也され共宗意同前之一件は懸り之人々言語にこゝろあり度こと也みな僞なれ共万々一取ところあれは其ことを大造に書て日本中へ觸らるゝ也○六日様理性院様被罷出候とありてこのもの共日を様附にかく也高田大炊之差上候書面御讀聞此通無相違哉相違御坐りません僧正殿には一派之宗門を持たから不二道御聞用とは不埒に於ては無之哉と被仰聞其儀御尋に成候るは恐入候然は恐入たて御座るか夫ならば先御引取被成とあり寺社奉行之白洲に於殿附に於吟味すること調役衆たり

人以生天、理を以て佛と稱す、故に天地を隔つて、天人を別する、此の理を明かにし、佛の教を弘め、衆生を度ふ、此の理を明かにし、佛の教を弘め、衆生を度ふ、

ともなし然ルをかく書たりはしめ戸田加十郎夫を豊藤夫を新右衛門也其内嘉十郎吟味事を記して別席に尋あり度旨申上候といふより早くウン夫々此寺の無念くサア御役人も御引被成同心も下れ御立合不殘人拂に相成とあり彼らか偽を申觸すこと如此○申五月廿七日付棟行といふもの丸行并利助といふもの宛あり申十二月廿六日新右衛門様被仰聞候趣とありて庄七利兵衛圓十其方共願立候不二道仲間破混雜に付書面差出候段尤事なからとありて利害之趣をしるし利兵衛杯是迄申立の腹に似合ぬこととおもはるゝ却善惡共に吟味する天下の奉行所何事も上に任せて御沙汰を待てしかし事に寄は理性院を打合せも有ふかもしれぬ先ッ此段申渡り引取レ或はウムそれは難有そふな事だ庄七利兵衛圓十御役所にては理性院も此通りなれば子細は有マへ三人一同難有御受申上る外に混雜にち迷ふなナ又々追々可糺引ケ其外のみなこの類也安間純之進下椽の下りて書留をする躰なとまでしるしあり是は御勘定奉行にて吟味之

は自然の理を以て佛と稱す、故に天地を隔つて、天人を別する、此の理を明かにし、佛の教を弘め、衆生を度ふ、此の理を明かにし、佛の教を弘め、衆生を度ふ、

事をしるしたりかくしるして追々書物をみるうちに弘化五申年二月廿九日戸田嘉十郎懸りに調より六月二日迄を呼出しを覺書半昏に百枚余ありよつてあきれて與力共々下ケ遣したり其内に小陰小陽といふこと、郡康節十二元會のことなり一躰之様子なかゝ易などの可分ものにあらねともあしき書生らにてもきしなるへし十二元會のこと佛説より出たりと徂徠はいひたりしかりや否をしらす數のはしめ一也數の終九也九を以一を割は十二と成也九々八十一を以天元の一を割事也これ十二万三千四百五拾六石七斗八升九合となるもと也九たひよせて悉一と成たひにしてもとの十二万となる康節の十二万何千年とかいはれしにいさゝかわけあるかとし○この不二孝のときもの愚民を迷して万一凶年等々時大奸惡のもの加るときは漢の黃巾張魯日本の本願寺か加賀の富樫の介は累世の大名なるをとり潰したるかときことある也政にあつかるものこゝろあるへきこと也かゝるものと争ふと害あり不爭して愚民共の

正道をしる様にして上より善政を施すときはあさ日の霜のことくになる也いにしへ天草一揆の時水野日向守か宗意にて興りたる軍六ヶ敷とていろく被申たるも尤なること也一寸見には可笑ことなれ共可恐ことの多き也これ人の可恐ところ也この一件なと僧正の呼出入用其外共に富士講にてする様子也其こと書面之内に凡みゆる也

○廿八日 晴七十八度也 みなく單もの也明日は雨かもしるへからずきのふ同心共より町代等迄へ酒のませたり惣人數五十人余也夫に手傳其外多あれは七十人に及ふへし二斗五升の酒あまりたり江戸の振舞におもへはけしからず酒の入用少しみな大酒にて一人とやらむ下戸なりといふならつけの根本の國故なるへし酒のいらぬといふは上かたのものむふりをしてこほすもの壹人もなしこれはよきこと也きのふ位の人數なれば江戸ならばこほす酒五升もあるへし勿躰なきこと也

○廿九日 雨 大坂より加賀屋助藏方へ賣物來る同人一覽いたし吳候様

と之義也江戸之書家也といふ也名は永山といふもの也惡筆とも何とも可申様無之字は無之候新樂金十郎などは實に日本の王羲之之号不空と存候右之屏風丈十二枚に而價二兩也といふ也いかなる事ならむ家來柳助之歌の弟子ありて屏風をたのまれて書きわれにも折々たのみてありて懸物にする故にみな同じことなから大坂之書家といふもの、書實にあきればたり大坂は江戸につく日本之大都會にて如此大塩平八郎か謀反すれば天下の可動とおもふ奴もありて同意するなとさてく大坂といへ共田舎のかきり也廣瀬篠崎など江戸にては數ならぬものなるに天下に並なき儒のことくいふ尤至極のこと也遠國へ行かねは 御膝元の難有ことは不分事也されはとて人物は相應なるものならの與力同心にも三四人はあり宮方之御家來にも彼是みゆれ共藝のことに至り而はみな如此與力同心等之内に御勘定所に置たらは随分羽をのすへしとおもふものあり夫に而も子々孫々われらか家來共に手をつきてくらす也されは其所を不便におもひ

やらねはならぬ也江戸の御役人之結構になるもの之行跡に見合ふは人情なきとは可申也

○閏四月朔日 雨 月並を禮受ること例の如し裕にて汗出也○不二孝一件に先生と申様なる字価といふ字あり三明藤開山三國第一山といひながら西人といふ字を先生といふ様にいふは可疑事也佛といふ字に夫に類したる字をかくことありしと覺たり○おさと大にこゝろよしこの頃はふるの瀧の紀行をかくとて古書の穿鑿をなし或はいせ源氏榮花のしらへなどして夕かたまでも書見すれともつかれすといふよほとこゝろよきとみえたり○革工來る故にニカハの水につけて革を鍛ふることをとふにかはには水をいむこと甚しにかはの薄き水に革をつけ置ても鍛ひて合するときは水氣を去盡さねはならずニカハとニへとは功能別段にてニへのかた十倍すると也直段も精品のニへは至る高きもの也鹿の襟皮の皮肉の境に

あるものにて夫を第一とす弓師たりとも其よきニへを遣ふもの少しといふ膠は製しても數日遣はるゝにニへは只一日きりにて寒中たりとも一日限のもの也といふ也貞助漆器膠などのことは上手故にニへを遣つもりにてもらひたるにニカハの取扱には少もならず革工か申こと僞にはあらずといふ也

○二日 くもり その先達を不快の時來る按摩の灸をおろしくれたるをみるにこと／＼に其所を得たりよつてわれも元來の灸之外にかたこし等へ其灸をおろしもらひたり元來を灸共に惣身にて三拾六ヶ所となれり一度を灸二十五ヶ所にて九百てうツ、也壹ヶ月に五千はかり一年に六万ツ、すうるなるへし○庭に出て池の廻りをおるきてつゝしかきつはたのさかりなるをみてうる／＼して繩の動かとおもへは紅なるいやきみの蛇也ことしは蛇至る多し庭へ出ることに一二ツ、みる也おさと更に蛇を不恐くさむらを歩行時はおさと先へ立て行也大に笑ひたり

○三日 雨 三輪町といふ所に政吉といふ有名之博奕打あり遠嶋を申付たる所其悴親は六十にも相成候間親に代りて遠嶋に相成度旨再應願出不便なれ共難聞置ものに乍去孝子之義に付不便と得と申論遣したるに親に附添に而嶋へ参り度旨之書面を出す其旨伺書を出す政吉といふもの博奕打なれと施をこのみ凶年の時も富家の申論候而百五十俵はかりの米を爲出候而貧人を救ひさして余の悪事は聞さりしか博奕之口論より吟味に成たり人々をしかりしといふ也され共大和一國の男達にてこゝにてカミサン顔役などいふもの故に余之博奕打共大に恐れたり奈良之市中に有名之博奕ありしかこのさわきにて出奔せり

○四日 晴 具足櫃をつくるにならの般若寺にいにしへ大塔宮のかくれさせ玉ひし大般若經の櫃ありと兼而聞たればけふとりよせみるに其頃の大般若經今に四十卷あり宋本なるへし不思議なるは繼目少もはなれす聖武帝の御物などのり附のものみなしかりといふいにしへはのりの傳あ

りしとみえたり大般若經の箱今は一ツ存せり内外共くろぬりにて金物はおち失たりふかさ貳尺高貳尺長三尺のからひつ也大小はほとよくして姿は右之がたによるへしとおもふ也開運と題せむか九天と孫子の字などを題すへきかなとおもへり

○五日 晴 冷氣みなわた入也○此ほと御用多し○先達而與力同心共出精に付御林山を伐取候而御手當之義相伺候處伺之通御差圖有之候に付山を伐取候而與力共其外之差遣候積也この山といふはむかし欠所に成たる山也廿万坪ほどあり寶曆迄は與力同心其外迄同所に而薪取たるところ追々に伐つくしてはけ山に成たる故に寶曆の頃より公儀へ返上したる也しかるにいつしかと百年はかり之内に自然に立派なる山に成たるに付元來與力同心共之品も同じこと也しかるに今度五寸廻り以下之木を伐取候而賣拂たれ共百兩余に成也大和のもの山を家督のことくに百姓共之するも尤也と此節おもふ也御改正に而諸運上やみ御役所之諸賄差支候處右に續

たるよき御林有之三千兩ほとに、賣拂候御かし附にいたし候積に相成伐木に取かゝり候積之處與力羽田健左衛門といふもの考に商人の不賣奉行所に世話をやき少々宛切賣にいたし候積に相成追々其通取計候處三分二伐取候見込通之御金出來其外に後年永代御林之手入御貸附も出來て最上なる所三分一のこりたりこれ丈は全く與力之骨折也大造なること也奉行所之明き地馬場のはし迄杉檜之苗木を植附て日々百姓共來りくさを取手入をすること畑のことし健左衛門七十四五歳までも存生ならは御はやしは壹万兩はかりの山に後年にはいたるへし凡そ大和のもの地力をいたつらにせぬこと關東とは大にこと也○用水溜を人にかし鯉の子を放させて九月迄かす也九月には八九寸はかりの鯉を取てうる也右之入用にて溜池之普請をなしまたかりたるものは鯉をとりて樂しみ或はうる也このものは松たけころはみな池の水を干て魚をとり松茸めしを食ひ酒をのむことを世界第一のたのしみとおもふ也上かたの利にさときこれ

にてしるへし進物のつゝみかみへ字をしるさす長のしもたゝみめなしに卷帙のことくにして水引はちよつと輪にするはかり也みな追而費す二度用に立る也けにも可驚ことしるへし

○六日 くもり折々雨 御用日白洲に出る○夜五時過四月廿六日附之宅狀來る先以母上様御機嫌克と之御事其外一同之御無事目出度候いづれも無事なれ共雨ふりめつらしくほとゝきす鳴故

三尺郷書利於劍斷成寸々旅人腸孤燈影暗瀟々雨淚聽杜鵑添數行
其節之事情右に御察可被下候ほとゝきすは不如歸と啼と申候ことからふみに相見候間かくつくり候事に御座候○昨日儒生參り燕子と申候題を置參り候間

客舍梁上燕育雛翼既長何爲忽駭去遙隔天一方母兒相思切戀々斷愁腸
幸不驚鳥擊復集舊書梁喙々又喜々相持賀平康唯思西風起得歸烏衣鄉

右は此ほとのはなし也

コノ圖
長崎より
らひたり
ツ子拳な
して居た
所々にて
ふことい
えたり
バ、とチ
に考あり
女はしれ
りた

○七日 雨 日記之内於竹大日之繪被行候由歎息也三途川のシヤウツカの訛ナリなることをはしめてきゝたりシヤウは三ンにてツは途カハは川たることいかさまおもしろし○なてしこのこと難有又恐入たり
歸るまでわれにかはりて朝夕に母なくさめよなてしこのはな
たらちねのちりもすゑしとなしますにいと露けきなてしこのはな
なてしこといふものに二種あり大和なてしこといふは今いふかはらなてしこといふもの也わか奉れるはからなてしこといふもの也もろこしのたねなるへし

大和よりまいらせぬれとことさやく其もろこしのなてしこのはな
地震のことよほとのことゝ聞えたりされ共先以御無事にてめてたしならへ來り四年四ツの可恐内地震と火事のことはおもひもかけぬ也江戸にて地震かといふ位なること一二度ありてけふはめつらし地震かしたりなどいへる位のこと也居木まで革のくらを難せし論有之候由おもしろく候參

相撲のこと
日本書記に
のみのこと
れめなるは
し戦場なる
打と逃くみ
上もそか物
語なとにし
へいましる

り候は、御見せ可被下候○吹上にて相撲上覽のよし小柳荒馬并兩大關の勝負はいかにあるらむ寺社奉行所には勝負附あるへし一覽いたし度もの也○いにしへ小野川谷風の相撲のはなしいつはり也寛政の頃より六十年に及ぶ故にいさゝか書面の上の武藝をするものさかしらなる説をいふとみえたりよつて事實を人々より承りしを記す也寛政に二度ありしか也夫はしかと覺へす其内はしめの時なるへし細川越中守家來吉田追風は鎌倉將軍家の頃よりの相撲の故實の家なればとて召されて行司を仰附られたるに實は其頃の追風相撲を知らずはしめにまてといひて立合を仕損するをもて勝負として小野川の負にしたり夫を相撲六ヶ敷なりて小野川其筋の願たりと也以上父上の毎度御はなし也細川家にての説は追風に勝負のこと御尋ありしに相撲は戰場組打を以祖とす其遺法也戦場の法にまてといふことなしといふことをいひはりて終に小野川まけになりたりされ共夫にこりて其時より追風かたにては相撲の稽古常にありと源次郎殿の御

弓によくあ
たり夫をば
堅なつらぬ
く夫よりあ
遠きへあて
る其外は空
論也かゝる
こととある
すいとま

はなしありき再ひの上覽の時は小野川手もなくまけしやいかにかたかに
に覺へねは知らす前のことはみな人のしる所也氣まけをして笑ひて引な
と、いふことは元來の武藝にあらず夫は小手切一雲といふ空鈍流の劔術
遣ひの傳書に禪學を祖として高妙なる所を論したるにあひぬけといふこ
とをしるしたりこれ氣分と氣分の勝負の躰を申たること今の説に似たり
武藝に實に氣まけあり氣に壓倒さるゝことあれ共夫は立上るとき或は立
向ひてわさにならずにらみあひたる時にて夫をとり直して勝ところ妙所
也氣まけにて勝負をわかつといふこと夢々あるへからす惣而武藝のこと
高妙に過て近來の説偽多し儒者といへ共高妙は偽也論語に高妙のこと孟
子より少きかことく攀遲か老農老圃の間にもしるへし實地をするもの
に高妙のことなし衆人の知るところにてめつらしからぬところにて出來
ぬこと高妙のかきり也○昔われ元龜天正より慶元の書を好みてよみしと
きに長くて御陣の時松平金次郎と覺たり堤の上の鎗合其頃の無雙のやり

にて其一事にて一天下へ名をあげ關白殿下より一万石にて召遣るへしと
御沙汰ありしほとのこと也其やりのさまをしるしたるにあかねの羽織を
着て八幡くといひて地をたゝき立たるさまは實に万夫不當也といふ評
ありき其ことを伊能先生に語たるにそれは實の妙所にあらず目かくらみ
たればこそ地をたゝき立て八幡くとは呼たらめといはれき尤なること
におもひて酒井先生にかたりしに先生の説に伊能の論尤也され共高妙に
過たり其目のくらみたる様にみゆるを天正の人々賞歎して一万石にて抱
へんといふにて陣頭のことのかたきをしるへしといはれき實に深切なる
論也名人といふものは當り前十人並のことをたしかに仕とけるもの也夫
をわきよりいろくのめつらしき説をつける也○東照宮の御ことは申も
恐多ことなから御陣頭へ臨ませらるゝときの御様子信玄謙信よりも御動
なかりしと其この物師共申あけて奉稱たるよししかれ共御陣頭にて御
震ひ出て被召上たる御食物をみな御吐なされしと申也夫にて實地のこと

は万事をはかるへき事也○貞丈か八陣手綱の説はしめてしりたり御考の通なるへしかたしけなしならへ來りかゝる説を聞ことなし聞見の狭くなりしは甚敷こと也たま／＼江戸の狀のとき朋友又は新右衛門等か説にて得益ありこれは田舎に居る故也かなしき事のかきり也馬のとき手を平日膝の上へ置たらむ姿のまゝのことくなるこそよけれと逸平次殿いはれたれと此方の乗はいつも八陣手綱となる也可笑のかきり也

○八日 晴 不二孝之もの回心いたし不申候由與力共申立に付呼出吟味いたしたるに直に承伏して回心いたし如何様なる證文にても可出由申立に付其趣を以過日之一否分り次第にて口書取候積不二孝之書物をみるに心學といふものと混同して夫よりも又一段天地之理をとくところ高き也人の迷ふはつ也扱又迷ふはかりにはあらず其理もあれは也され共纒之所にて外道に陥る也楊朱墨翟其外論語中之テフ沮桀溺等之類みなにしへの賢人也いふ所必よからぬことのみにはあらず聖人の道と同じき所もあ

万葉に鹿の
子とをい
むとをい
ひたれと
は一正子
は長きも
壽は百才
に以下な
もりのな
るよ

るへしされ共見當之相違すれば聖人禽獸と迄に仰られたり司馬温公の賢にても格物の論にいたりて終に禽獸となるへしといふことくに朱子は被申たりされは道を以人を傷ふは可恐事也近く日蓮の不受不施一向之三業たのみなと少々の宗意のとりかたにて遠嶋に成也されはたとへよくみゆることありとも外道はゆるすへからさること也

○九日 晴 此節鹿の子をうむさかり也いつも四月なれ共閏月ある故なるへし鹿は至る産の至る輕きもの也鹿の子至る奇麗なるもの也即今のカノコといふものもとよりこれより出たるなるへし至る見事なるもの也なるの町につゝきたる村々にては鹿に田畑をあらされて至る人々難義すること也このほとんどの様子を詩につくりたり

寧城逐犬嚴於賊。故得悠然糜鹿安。四月生麕豹文背。再爲苔上落花看。けふ夕かた借馬來る家來其外市三郎乗る也馬見所よりのそきみるにいかにも奇妙なる乗かた也可笑事也前にいふ八陣の手綱也大笑なること也

○十日 晴 ならの唐墨製の筥出来たりはしめいたためかみにて上へきれをはりたる所こちくとして女の細工ものゝ如しよつてわか唐帯の反古にてはらせみたるに立派に出来たり唐物よりもきれよろし○夕かた儒者來る夫か父八十三にて死したりとりあけなとしたる拙醫なりとあしくいふものはいふ也其畫像の讚を乞ければ即筆とりて

身遊杏林裡壽得杖朝齡兒在師儒職門逕玉樹馨

としるし遣したり○白井達之進長崎より歸り大坂より二兩はかりなる鮫壹本とキヤマンのコツフ拾其外筆をくれたり我鮫を不好酒器を不好入用は筆ばかり也達之進は御徒にて小普請方下奉行動方なりしか西丸一一條にて歸番になれりされ共可用所ある故にいろく世話をなしたりしか石河の世話にて長崎手附とはなれりわか手にて左遷したる人よりもくるゝといふは不思議也これはわれ人をあまり不憎御用立ものは再び遣ふ故なるへしされ共御用立ものを遣ひしによりて人にあしく申されし也新

右衛門などよく御心得あるへし乍去御用立候人を一人見出すときは其職に應ずれば長く 公義の御爲也よつて其頃は人をみることに苦勞せし也人に被頼たると親類之譯にて世話したることは一人もなき也

○十一日 晴 家來に孟子を教遣して伊尹か有莘の野に耕して堯舜のみちをたのしむといふにいたりていとく恐入たり太公望伊尹傳説後世の孔明など遣ふ人かなければみちをたのしみて世を過すこと權威ありて世に行るゝ人の其時のこゝろと少もかはらじたとへは太公望か文王の師と成しときも涓濱に釣せし時も心は二ツはなかりしなるへしこれいにしへの人の力をみるへき所也夫ならずしては大事に臨み必誤也われ今この地に奉行として朝夕娯て御用向と文武の外多事なかるへきにさてく余事を思ふ也いにしへの人のこゝろの大なるいかなることかとおもひはかられぬ也せめては心をやすく暮へしとおもひ附たり今はともかくも此節この修行のならねは大事をあやまる也常にいふわれ四五年來いろく目の

に逢て病氣の出ぬといふは少々なから書物の御かけもあるへしこゝに心なきときはあせる氣附て大に病を引出す也これは保養の第一也けふいさゝか心におもひ附たることありて歡しさにこのことを記す也新右衛門なと此節よりよく御修行あるへし心の修行はおもふことくにならぬときに益多き也

○十二日 くもり 順右衛門紀州の湯治に參り昨夜歸りたり其みち故に兩度高野山の止宿したりといふ高野山の學侶方大樂院といふ寺に止宿したり相旅人のこときものに信州上州邊の商人といふもの數人參り居りたり商人といへ共みな博奕打のことしといふ六ツ頃よりいつ方は歎行夜明にはみな歸り來る躰等不審也といふ順右衛門にいつ方之人也やと問なら也といひしにならのつる傳は御存知に候哉この頃まで參り居しかよき男也此邊に顔役又はならも近頃博奕かやかましき故につるもこまりて此邊へ參り居たりしか紀州に參りわか山に落つくつもり也なといひしと也この

つるといふものはなら隨一を博奕打にて此頃呼出候處出奔したる也ならは近頃やかましくよき博奕はならぬといふはなし也といひしと也今日右に付つる召捕之もの出す大笑也高野山は長袖を領分故博奕あるとみえたり高野山は九千九百場あるといふよしけしからぬ立派なること也とて順右衛門驚歎せり女人堂はあれ共わきの山より登りておかむといふ也

○十三日 折々雨夕立のことし 夏雲多奇峯と陶淵明か申せしけしき也され共人々わた入單物裕うちましり也順右衛門より高野山のはなしを聞に市川團十郎の墓大名の如しと也高野山には御條目ありて國持大名といふ共墓所二間四方にとまるといふことありしかと覺しに團十郎の墓何事そや空海か開きし靈場非人河原ものか如斯なる墓を立といふはいと非なる事也順右衛門いふ實事ながら怪敷夢をみたり高野山にて土砂をもらひたる夜のことなるよし市三郎與助誠一等銘々陰莖を帆はしらのことくに立岩ほのことくにかたくして銘々對坐して相向ひ土砂を手にてすくひ

かくるとみて驚さめたりと也千柳に

女房はなきくまらへ土砂をかけ

といひしはこれなどおもひて土砂をこりのうちへ納めし故なるへしされ
共あまりに怪しき夢也とて大に笑ひしか其事いさゝか事實に似たるも奇
也とてけふ立派に申出たるも又奇也○米直段又々上ル

○十四日 折々雨 なたし子のはなさかり也けふ與力橋本喜久右衛門か
父喜久右衛門の遺言状のときものを一冊の書としてひそかにわれ
にみせて苦らすは奥書にてもはし書にてもなしくれよと内々歎き出たり
其書を一わたりみるに實地の論にて涙の落るかこときこともあれば則筆
はしらせて末の白帯へしるして其末へ

子にのこす親の教の玉章をみかきてうつせおのかこゝろに

おもしろきはかせのふみはなかくにかくまことあることそすくなき

○十五日 雨 月並之禮受ること例の如し○人に聖像の讚をたのまれた

りいかに恐入て讚すへき様なしとて断たりしに顔淵喟然歎曰仰之云々の
語をしるしてくれよとの事に付幸ひ此節は齋中に付かゝり湯を遣ひ 神
拜之後しるし遣したり其序ツイテにこのころたのまれしもの共を書たり一滴の
酒なしさてよく書つもりになりて書損すましといろくする故にますく
わるしされ共醉墨と違ひて卒爾は少し彼武編といふはといふ 神慮の
御辭なと新敷筆を以數枚しるしたり其内先達より

負ツクてのく人を弱しとおもふなよ智惠の力のつよき故也

といふ歌を強ちたのまれ居たれば夫を韓信の讚にとり直してとおもひた
れ共跨マタといふことなと和名抄手もとになければしれす古事記により
てムカハキの下くゝるといふこと將軍の字日本書紀にイクサノカミとあ
るなどによりみたれ共何分うたにならすよつて竹によせて
争はす雪にたわむになよ竹の弓となるへき力をそしる
としるしたり我にも縮なとにかゝするものゝあるかとおもふ度々 行道